

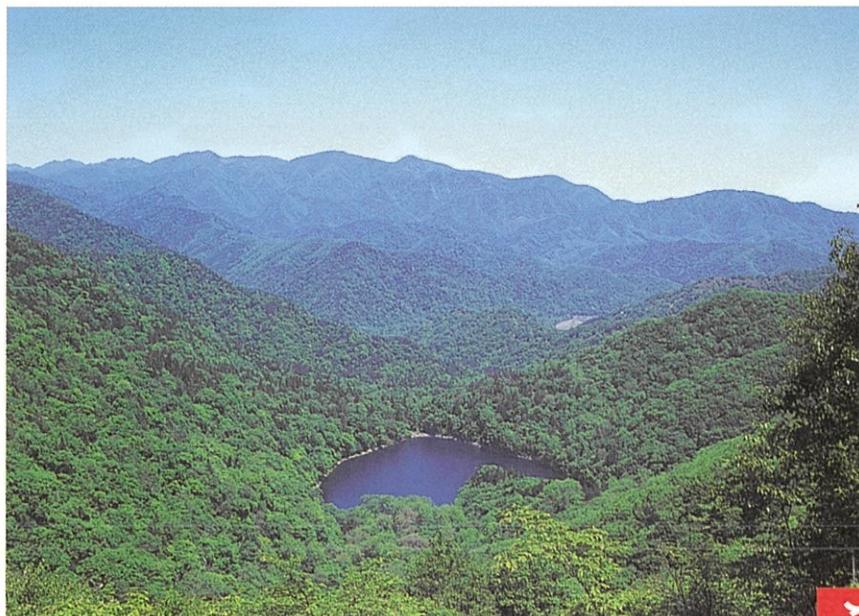
えりも町

ふるさと再発見
シリーズ3

猿
留
山
道



北海道歴檢図（北海道大学附属図書館蔵）



沼見峠からの眺望



猿留山道



東蝦夷地ホロイツミ場所之図（市立函館図書館蔵）

えりも町郷土資料館
水産の館

蝦夷廻浦図絵



蝦夷紀行附図トモツクシ



猿留山道・沼見峠の石碑

猿留山道・沼見峠（アフチ峠・アブチ峠）には、石碑が2基ある。ともに場所請負人福嶋屋嘉七が建立したものである。

左：妙見様 建立年：安政六年1859年 高さ130cm
碑文：右) 石工 長州赤馬関 大黒屋正兵衛
裏) 安政六年巳未九月秋吉祥日
左) 願主 ホロイヅミ場所
請負人 枇浦嘉七
支配人 卯三郎
惣番人中

右：馬頭歎世音菩薩 建立年：文久元年1861年 高さ113cm
碑文：表) 馬頭歎世音菩薩
右) 願主 請負人 枇浦嘉七
裏) 文久元酉年五月吉日
左) 支配人 宇三郎
世話人 周平
惣番人中

江戸時代、蝦夷地の旅の様子（ともに市立函館図書館蔵）



伊能忠敬・松前藩蝦夷行程測量分図「ミツイシヘビロオ」（寛政十二年1800年 国立公文書館蔵）

猿留山道復元ボランティア事業に寄せて

猿留山道復元
ボランティア事業実行委員会

実行委員長 小林 強

私たちの郷土えりもに1799年（江戸時代）幕府が開削した猿留山道について多くの文献が残されていますが、その場所の確認は長い間なされていませんでした。平成9年えりも山岳会が実地探査を重ね猿留山道の道跡を発見、平成12年「日高の山道シンポジウム」において発表してきました。様似山道から猿留山道とつながる山道開削の歴史を知り、先人の偉業が語り継がれていくように努めることと、町の貴重な文化財として長く保存するために町文化財に指定することを考えております。

平成15年猿留山道復元ボランティア事業にご支援ご協力をいただきました関係機関の方々、多くのボランティア活動をされました皆様方に心から感謝を申し上げ主催者の挨拶とします。

また、猿留山道に関する紀行文・絵図の一部をこの冊子にまとめましたので、地域学習の資料として活用していただければ幸いです。

目 次

北海道歴検図・沼見峠からの眺望・猿留山道・東蝦夷地ホロイヅミ場所之図：表紙	
蝦夷回裏浦図絵・蝦夷紀行附図・猿留山道石碑・松前藩蝦夷行程測量分図：表紙裏	
「蝦夷干役志」伊能忠敬	2
猿留山道について	3
「蝦夷草紙」最上徳内・「蝦夷日記」木村謙二	4
「蝦夷紀行」谷元旦	5
「休明光記卷之ニ」羽太庄左衛門正養・「蝦夷の嶋踏」福居芳麿	9
「蝦夷道中記」磯谷則吉	11
「蝦夷日記」児島紀成	12
「仙台よりクナシリ迄往来日記道中規細抄」高屋養庵	13
「東行漫筆」新井保惠	14
「日鑑記」厚岸国泰寺住職	18
「蝦夷日誌」松浦武四郎	18
「蝦夷紀行」忠藏（尾張屋番屋）	25
「協和私役」窪田子蔵	26
「蝦夷行程記」阿部喜任	27
猿留山道の位置図	28
東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図	29
北海道歴検図	30
「竹四郎廻浦日記」松浦武四郎	33
「東微私筆」成石修	37
「罕有日記」森一馬	38
「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」松浦武四郎	40
「安政六年未年アイヌの御目見え附添并喜多野様井上様竹内様御取扱日記」	45
「東蝦夷日誌」松浦武四郎	46
あとがき	56
福嶋屋文書 帆泉場所山川地名里数並絵図	57
罕有日記・松前屏風	59
戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・蝦夷地全図	
蝦夷、加瀬多、骨奈誌利、月多大福、獅虎島、写図・改正蝦夷全図	裏表紙

「蝦夷干役志」伊能忠敬 寛政十二年（1800）

＜出典：「蝦夷干役志」伊能忠敬著 伊能忠敬記念館刊 森資料＞

猿留山道開削直後の寛政十二年、蝦夷地測量時の記録。伊能忠敬は東蝦夷地の釧路根室方面への測量を急いだためか、新山道の測量をするためか、歌別川河口近くコロップから猿留山道に入り、襟裳岬、百人浜、庶野、黄金道路沿い、目黒（猿留）までの海岸線は歩いておらず、地図には「不測量」と記述している。

1800年8月21日（旧暦：寛政十二年七月二日）薄曇、夜も同じ。6時30分頃（朝五ツ）砂馬仁を出発。海岸は砂で小石が混じっている、または大石の馬の背のような道を行くのは困難だ。また海岸に高くそびえる大石を上下する所がある。大変険しい。また波の間をみて走る所がある。案内のアイヌを連れているがちょうど波が満ちると渡ることが難しい。あるいは波に濡れて380mも戻る。念佛坂というアイヌのみが往来する危険な山道があり、ポロマンベツという川へ出る。念佛坂の下から海岸を通れば道路は大変近い。川を越えて休所がある。1600mほど行くとオトロシヤンナというところで昼食。そこから海辺、または新道11.1km、内3.9km位。夜に入り8時（五ツ）頃ホロイヅミに着く。御詰合支配勘定佐藤茂兵衛殿、会所支配人が50mほど御用提灯を持った人夫を迎えて来させてくださった。終日難所。わらじもことごとく切れ破れ裸足になり大変困っている時に迎えの提灯に会ったので、俗に言う「地獄に仏」というものだ。距離は27.5kmというけれど31.4km以上もある。その上、干潮といつても通れるものではない。あわせて新開山道も難路である。仮家に宿泊する。8時（夜五ツ）到着。

8月22日（旧暦：七月三日）朝から午後まで曇り、その後少し晴、夜は晴天。測量。

8月23日（旧暦：七月四日）8時（朝五ツ）過ぎまで曇り、それから少し晴れ。夜曇り。夜半過ぎより雨。8時（朝五ツ）頃出発。海岸を1.9km行って新開山道（猿留山道）に入る。昼食所までは少し上下はあるが平地と同じ。それから山坂が多く難所である。谷間のサルト～26.5km、5時（七ツ半）過ぎに到着。定杭にはショウヤ～13.6km、ショウヤよりホロイヅミ～18.7km。

8月24日（旧暦：七月五日）朝小雨。8時（五ツ半過）より少し晴れる。12時（九ツ）ごろより4時（七ツ）前までまた小雨。夜は曇り。

8月25日（旧暦：七月六日）朝曇り、昼間（午中）は薄曇、太陽を測量。7時（六ツ半）頃まで曇る。8時前（五ツ）前より晴、この夜勾陳奎九を測量する。ここで八王子同心頭原半左衛門殿手附橋本忠兵衛、石川半兵衛、沢田与八、三人と宿と一緒にした。

8月26日（旧暦：七月七日）朝より晴れる。昼間（午中）太陽を測量する。前夜は、夜更けまで測量をしていたので逗留する。

8月27日（旧暦：七月八日）9時（朝四ツ）ごろまで曇る。その後晴天。4時（七ツ）過ぎより薄曇、暑さが強い。夜曇り。4時（朝六ツ）過ぎ出発。新開山道である。ルベシベツという山中で昼食。22.3km、サルトより、4時（七ツ）頃ビロウに到着。御詰合支配勘定格三浦善蔵殿、御小人目附田口久治郎殿。

＜復路＞

1800年10月9日（旧暦：八月二十一日）、朝から晴れて霜が下りた。気がふさがることが多い。夜薄曇、6時（朝六ツ半）過ぎ出発、ルベシベツで昼食。山が多く海岸が少ない。22.3kmでサルトに4時（七ツ）頃到着。本番屋に宿泊した。往路と帰路は追分から道を変えて、海岸からサルトへ入ったので難所であった。

10月10日（旧暦：八月二十二日）、朝曇り、それから少し晴れ、夜曇り。6時（朝六ツ半）サルト出発。アツヒで昼食。道程は26.5km、5時（七ツ半）ホロイヅミに到着。借家に宿泊。

10月11日（旧暦：八月二十三日）、朝曇り、夕暮れまで小雨があった。6時（朝六ツ半）出発。海岸11.8kmでホロマンベツにて昼食。ここより新開山道は難所で13.7km、この間大小の峰を6～7回越え、それから海岸へ出て2kmほどで6時（暮れ六ツ）前、道程27.5kmでシヤマニに到着。夜は雨。

猿留山道（さるる・さんどう）について

猿留山道は、寛政十一年（1799）江戸幕府が資金を直接支出し、最上徳内・中村小市郎らの指揮により、切り開かれた最初の山道で、様似山道も同じ年に作られた。また、広尾猿留間のルベシベツ山道は、近藤重蔵が私費を投じて寛政十年に作られた。

当時、蝦夷地、択捉島、国後島周辺には、ロシアなどが頻繁に出没するようになり、江戸幕府は北方警備を重要視するようになった。当時、情報、兵や物資の流通は、北前船など帆掛け木造船による風まかせの移動であった。大量の物資を一度に輸送するのに船は適していたが、風向きが逆の時や時化などの時は、幾日も足止めになり、情報の伝達が滞っていた。また、蝦夷地第一の難所といわれた様似～えりも～広尾間は、日高山脈が太平洋に直接落ち込み、高い崖が続き、旅人を悩ませていた。猿留山道開削について最上徳内が著した「蝦夷草紙」の編者である吉田常吉の注を以下に引用すると。

新道の開削

蝦夷地は元来天険が多く、交通に不便で、海岸に添うて船を進めようとすれば、風に阻まれてむなしく逗留せねばならず、一朝事ある時に急を報ずることは容易ではなかった。それで幕府が東蝦夷地を直轄すると、道路の開削を急務の一つとして、水越源兵衛、最上徳内、中村小市郎、小林卯十郎、らに工事の担当を命じ、蝦夷地取締御用掛大河内政寿が様似に出張して監督し、南部より杣夫・人夫を募集して様似山道（様似・ホロイヅミ間）、猿留山道（幌泉・鏗田貫（ビタタヌンケ）間）などを開削した。ことに猿留山道は、その里程が長いこと、険急などによって、東蝦夷地第一の難道と称されたものであった。すなわち幌泉・猿留間は、從来海岸に沿うて襟裳（襟裳岬）を迂回し、しかも庶野・猿留間の海岸は、岩礁が多く、すこぶる難所だったので、寛政十一年（1799）新たにオタベツ川の渓谷を遡り、トヨニヌプリの中腹を通り、サルト川の中流に出て、海岸に至る道路を開削した。これらの道路はみな工事を急いだので、完全とはいえないが、同年の秋には、様似から釧路まで馬を通すことができるようになり、その後次第に修築して、東海岸一帯は、天候の不良な日でも、ともかく安全に通行することができるようになった。

＜出典：「蝦夷草紙」最上徳内著、吉田常吉編、時事新書＞

あった。明治時代に新道が開かれたこともあり、どのような状況で残っているのか、町民有志（後に、郷土資料館N42°の会：友の会に発展）との調査により、2003年春、残存している区間を確定することができた。

全長約27kmといわれるこの山道は、現在、国道、町道、林道、作業道などに姿を変え、江戸時代の様子をうかがうことができるのは、わずか9.3kmである。確認された区間は、チシマザサが覆っている部分もあったが、路肩、法面などを確認することができた。その理由は1970年ごろまで、猿留山道や他の小径の下草刈りが行われており、また、開削当時の丁寧な作業、その後の補修が適切になされていたためと考えられる。

この猿留山道を、伊能忠敬、松浦武四郎、厚岸国泰寺の住職、根室・千島の警備する諸藩の兵など、多くの旅人が通り、紀行文・絵図が残されている。本書は、北海道大学付属図書館北方資料室、市立函館図書館、国立公文書館の資料を中心に、えりも町史ほか出版物に記載されている猿留山道の絵図・紀行文を紹介した。

注>

- 1) 本書は出典をもとに口語文にしたが、誤記もあると思われる所以、詳細は原著を参照していただきたい。また、口語文に訳さなかった語は、出典の表記をそのまま用い、(○○) または○○と下線を記した。
- 2) 時刻などは、西洋時間と出典の記述（六ツ時）とを併記した。
- 3) 距離（里数）は、一里=3.927km、一丁（町）は、109m、一間は1.8mで計算し、表記した。
- 4) 夷人、土人はアイヌと訳した。
- 4) 口語訳の際に説明を付け加えた部分は<○○>と示した。
- 4) 地名は、出典に記されている地名をそのまま記した。誤記、アイヌ語の誤訳などがあるので、注意が必要。
- 5) 森勇二氏の提供による資料には、森資料と記した。

猿留山道がえりも町山中に一部が残っているのが確認されたのは1996年のことで

「蝦夷草紙」 最上徳内 寛政二～十年（1790～1798）

＜出典：「蝦夷草紙」最上徳内著、吉田常吉編、時事新書＞

15年前から蝦夷地に体を痛めつけながらも従事すること17年になり、一命を覚悟したことが三度もあるけれど、大きな仕事である新道係になったのはありがたいと思い、粉骨を尽くして新道を開き、永続的に使えるようにしたいと、1799年6月21日（旧暦：五月十八日）に作り始めたが、丁寧に作ることはよくないこととして、7月10日（旧暦：六月八日）に罷免され、よんどころなく引き去り、ここからクシリ場所まで行き、なんの事もなく旅行だけをして帰ってきた。帰りの時、新道の様子を聞くと、ショウヤというところには、新道三筋を付けたけれど、この道を通る者はいないという。莫大な公金を費やして通る人がない道が三筋もあるのは、無益の支出で、もったいなく異常だ。数万両のお金を使って、後年になり開国の跡が残るのは新道だけである。その他に開国の中となるものは未だ一つも見えない。家を8～9軒作れば300～400両のお金が必要だ。しかし、アイヌが服従すれば、これは莫大なお金に替えられないことであるが、アイヌの統一には喜ぶことが出来ない。ただ、この新道が後世に残るばかりである。その新道でさえ馬も通れないのか、したがって私はここに強く思う。帰路の際、新道を見たいと思ったが、人足・アイヌたちの言うには、新道を通っては格別難儀であるというので、古い道で帰った。

（新道を作る担当であった最上徳内が、大河内政寿と意見が合わず罷免された後の文章。）

猿留山道開削後は、幌泉は伊達藩等の管理地となり、山道も必要に応じて修復されたと考えられるが、冬期や残雪期には通行できなかった紀行文の記述もある。

「蝦夷日記」 木村謙次 寛政十～十一年（1789～1799）

＜出典：「蝦夷日誌」山崎栄作編・自費出版＞

猿留山道開削前の紀行文。寛政十年、蝦夷地調査の幕府の命を受けた近藤重蔵の秘書役として、水戸の学者で医者であった木村謙次の行程記。＜森資料＞

1798年7月25日（旧暦：寛政十年六月十二日）雨、南西の風 エリモはネズミのこと、岬の形がネズミに似ているからいう、二つの小さい流れ、アイヌ家4～5軒、

小さな流れの脇から山へ上がるところに卒土婆<そとば：供養追善のために立てる細長い板>がある。ユルホル山中に沢がある。シロシシヤマ 坂、谷、水が多いシロシナイ沢 道の右の高山はカムイエトウ、百人浜の音（波音）が聞こえる 下り坂沢に粟畑がある。

東 寛政十年戊午六月十二日
南
西 近藤重蔵記

ウベシヘ フキの大きさは、茎（トウ）が約24～27cm、葉（傘）が大きなものがある
クルミの実がある
浜辺を下りトウベツ<トマベツ>

沢の近くに家二軒、山に一軒、海に近い所にヒロセシヤマ沼の左を通りトウベツに出る 沼のことを<アイヌ語で>「トウ」、川のことを「ヘツ」という 沼より流れ落ちる川ということ、エリモ岬を右に望み7.9km回り道という、砂の高いところに杭があり読むと さりん<場所不明>より11.8km、ホロイツ15.7km、この通り27.5km百人浜とあり、その下は見えなかった。

北 寛政十年戊午六月十二日
東 当別海岸に
南 近藤重蔵記

キゲシキ ヲタベツ奥から流れる小川
アーブチ エッチートモ川

昼食小屋、小さな原を通り チベヲショヤという ロイラン ショイヤ 谷水が出ていて小屋あり、ヒトマヘチ川、ショヤ小屋に泊まる 2時（ハツ時）到着 ホロ泉から 番人が来て野宿する 銅笠で水を汲む

村上氏の話 エリモ岬の道 シマウシヤンゲヘツは細い流れ ボンナイ エリモサキへまわる えりも岬東蝦夷のこれを過ぎると風土が一変する 海が濁り 回船エサシ エリモと 目当りの所エリモ岬ではアイヌはイナウを立てて神酒を供える カモイエツという エツは崎の訳 このへんはすべて油子澗<油駒>というのは油目という魚をとる エツ澗ということ、また油子澗とする地名もある

7月26日（旧暦：六月十三日）曇り雨、南風 4時前（六ツ時）ショヤを出発 小山を越えてトウゼ 木下与八は苦労せずに 嶮しい岩を越えてフシコヘツ コヤクヲハイ シヤクハイトモ川 前後の岩を通るのにアイヌに2本の針を与えた 問答すると シケウン 砂をとるところ 所々小さな滝がある ウトマエン 波と岩が難所である ウエンヘン 木下与八は「ヘン」は濡れると訳す サルムン小屋の錠七双ある 造船している 御休みをとり、御付足軽 昼食 船は四百石位 修徳丸という 去年船が破損し、見えないように囲っている サルムヘツ船渡し合図船人足アイヌのうちイクシベは地名をよく覚えている シロシナが言うには ヲネト

川 ビタヌンケンフ川 小川 トモチクシ 難所 タンネショ 大変な難所で波をかぶる ヒタヌンケフより御影石<花崗岩>が産出する 異国の船が白鳥の淵にあるのと同じ ピンナイで上がり山に入る ムイケセ ピンナイから山を歩いている時、ヘカチが小石を踏んで落ちた。 私は大変怒るがしからず、なにごとかと笑った。 トヘシヘツ川

昼食 母衣泉から来て小屋があり山間に川が流れている 沼は二つあり二股川という、コトヲナヲコチベ小屋、川をヲサルベツ川、番屋、ムイケセ川、ピホロ川番屋、これからヒローの持ち場所である。小滝があり3.5mを上がり、江戸の人はこの滝をヤロウノ滝上りという、たすきがけで上がるところ、ベニセマイ沢を上がる

途中には平らな所もある、ピホロより海岸は波の引きを待って涉る。海上にアザラシを2~3頭見る。フンペマモイは小川のほとり、これよりヒローまで、案内のものは約218mというが、大小の川を5回位渡りおよそ600mもあった。おおよそヒローはシヤマニから7日かかる道ですべて蛎波藏人<蛎崎藏人の誤表記>の領地である。川下の立岩ヲワタラに泊まる。栖原庄兵衛が請負っている場所で、支配人は弥五兵衛で、通訳（通事）は常吉である。

<以下省略>

12月8日（旧暦：十一月二日） 晴 西風

6時サルトンを出発、この間難所が多い、アフチで昼食をとる、11時40分（九ツ）小屋、エリモ崎針位、仙台位、南（午方）はアツケシ位、西はエサシ位、南西南（申方）はショノモ崎トウセブ位、北北東（丑方）エモト位、西（西方）エリモ崎、磯の上で太郎がアザラシを手で獲って来て、砂の上に放すとともに動きが遅いものである 水に入れば早い アイヌが左眼を刺して殺した 口エリモを後にまわり油五間<油駒>海岸通りホロイヅミまで約9.8km、私は腹がへりコンブを探って食べた。3.9kmほど歩くと夜になり暗く風が強くなる、宿から握り飯がでた 8時（夜五ツ時）ご到着 ホロイヅミに到着 運上屋まで約3.9kmある。 ニワトリを太郎・弥郎が初めて見て喜んだ。酒一升をお与えになり、あわせて白糠の久兵衛石松までとどけた。エンルムカにのろしを炊くところがある。久兵衛石松氏がここまで見送りに来てくださった。川を越えてこの二人はもどっていった。

1798年12月9日（旧暦：十一月三日） 晴 宿に留まる。

シヤマニ山道の様子を見にヒローのイクレンナ シヤマニのトマクシテタローと飛脚のコサンリキに、私のわらじを三足渡し、米も渡した。長嶋新左衛門からの手紙（御用状）が届く、トイ<戸井>よりホロイヅミまで運上屋16ヶ所、太郎が山を越

える道を下見して帰ってくる。12時すぎ（九ツ過）道が開くことができた。

1798年12月10日（旧暦：十一月四日） 晴 雨（アミ）風

ホロ泉 6時（六ツ時）出発、ホロマンベツ10時（四ツ）到着、昼食、この山道は少し内陸に作っている、難所を越えて馬3頭がお迎えに来た、アイロ 馬方 梅五郎 ヤロウ タロウ 馬を初めて見る 鎌田幸七が、長い道なので勝手に馬を呼び寄せましたのでぜひ馬に乗ってくださいという。シヤマニには17時（暮六ツ）に到着、約31.5km。

「蝦夷紀行」 谷元旦 寛政十一年（1799）

<出典：「蝦夷紀行」谷元旦著 佐藤慶二編 朝日出版刊>
蝦夷地薬草調査の幕府の命を受けた渋江長伯に随行した画師が谷元旦。

1799年7月11日（旧暦：寛政十一年六月九日）

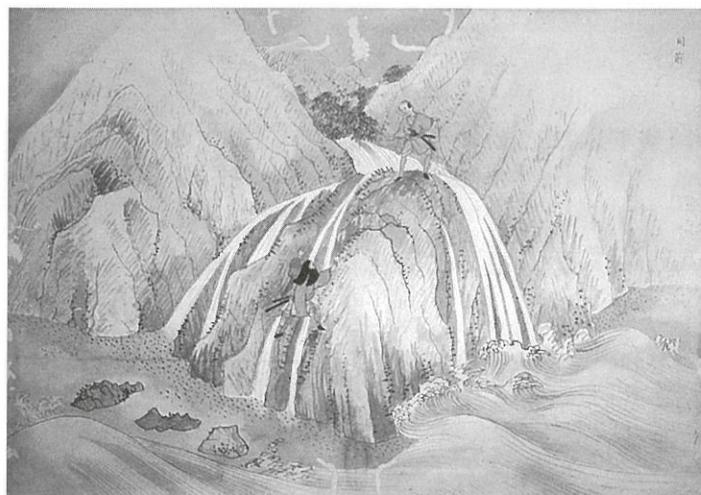
シヤマニの宿を出て後ろの山を越えてシヤマニ川を渡り行く、流れは湾曲し川幅18m位。浜を通りヒラウトを経て石山がある。海岸に並び、沢があり、ヒラウの岩山は大きな家屋のようで、波の高さは十数メートルで山のすそに打ち上がる。モヘツ川を過ぎて左にモヘツ山が見える。石浜をまわるとシララヤアという山が海岸に切り立ち、海の波は激怒して霧が打ち合うように、見分けができない。チカラ川を経て、ワタラクナイの沢を越えて、左の山に茂った林を見る。ナノシヘツの川を上ること2km位草を分けて山に入りヲンコの林に出て、元の道に戻り、川を下り海岸に出ず、流れが清く丸石で水が多い。浜を過ぎる。石浜を行く道はとても困難である、崎をまわりシヤヌヘツ、石の川である。それより岬の海岸に岩があり、高さ10m位ブヨシユの石門である。高さ21m位の大岩が石門の左にあり、石の屏風のようだ、石門のそばを通り、ヲシユヅシよりユトニともいうアイヌ村がある。ここで昼食。

案内のアイヌが言うには、この先はたいへんな難所が多いと。行くこと3.9km足らずで、岩石がますます危険になり、家屋のような大きな石が浜通りに碎け落ちて道がなくなっている。岩の角の上を伝って通る。テレケウシの難所に着く。岩の壁、高さ16m位海に突き出ている。アリが木を渡るように、岩の上を這い上り行く、岩は危険でとても碎けやすい、岩の上は剣の刃のようで足を止めることができない。下ることもなお危険で、怒涛<大きな波>が打ち寄せて岩にかかる。洞があり、その中で怒涛を避けて、波が引くのを待って、また、次の出た岩の先をまわり、また

前のような岩があり、その岩を越えて、また大きな岩を伝い、石浜から出崎を過ぎ海岸に着く。海岸に大きな離れ岩がある。

また石の川である。高さ16m位、そのそばの石山をヲホイノホリという、この辺大きな岩が多いが、どのくらいかわからない位だ。岸を離れて岩山があり、洞があり、ここの風景は相州の江の島の岩屋によく似ていると思う。洞の深さ11.7mもあり、波が引く間に洞に入つてみると、岩山は離れ岩で役にたたず、岩の先にまわり滝があり、高さ数十メートル位、落ち口は巖に隠れて見えない。滝の中は120cm、そばの岩に洞が2つある。行くこと330mで岩壁にまた大きな洞が2つあり、アイヌはホロという。

立った岩があり、高さ20m位、7m位の石人が立っているような形に似ている、左の崖の上から滝が落ち、滝口は1m位で中ほどで風に散り霧のようだ。近藤重蔵が来てこの石を李白石と名づけた、岩の上に札があり、渋江氏<渋江長伯>もまた仙人巖とした。それからチコシキリに着く、チコシキリは出崎で切り立った岩の下に波が打ち寄せるため、わずかな岩の間をクモのようになって横づたいに歩き渡る、この間36m位である。アイヌのアサカラという者は、頭に担いで波の中を越え、私とその他の者は岩伝いを行つた。また1090m位行くと、突き立った岩を越えて行く、波が高くて道もない、ここも波が少ない時は前のように岩伝いに行くが、波が高い時は通るのが難しいために、220m位戻り、山の切り立った屏風のような所を登る。山はとても危険で陥しくチシマザサ（根筐）またはイタドリ（虎杖）などを、つかんでよじ登る。ようやく山上に着き、後ろを返り見ると、目もくらむような山頂で



＜蝦夷紀行附図：市立函館図書館蔵＞



＜蝦夷紀行附図：市立函館図書館蔵＞

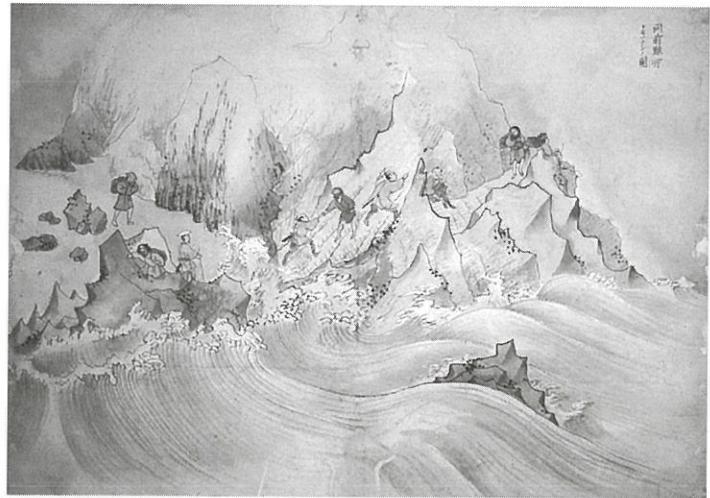
ある。クマザサ（熊笹）を分けて、490m位行き、念佛坂に出る。ここも上がった坂のようでだが、所々に立ち木が茂り登った坂よりは少し安心した。坂の中頃から絶壁で草も木もない、坂の下はホロヘツ川である。枝を尻に敷きずつて降りた。旅の途中にこの坂のような険しい所はない。ようやく川の端に出て岸を通り1090m位行くと新道を切り開いている小屋がある。

ホロヘツは大きな川で、川中に中州があり、ここの新道は、かなり出来上り、馬も通れるほどの道とのことだが、シヤマニで尋ねてもこの道（様似山道）を教えてくれる者はいなかった、人情が希薄であることを知つた。

浜通りに小さな沢がある。ウヤヲの小川ウサキヘツの流れを越えて、ニカンヘツの川の端のアイヌ小屋では、ウド（羌活）を探り、皮をむいて干していた。これで飢えをしのぐという。カントスカよりチカユツフエコシに着く。この間の浜辺は大石でアイヌはチノミイシユマアという、アヘヤキ川を越えてクレナイ川、ユカナ川よりホレンリュム舟底橋を渡りホロイツムに到着する。夜はすでに深くなってしまった。

7月12日（旧暦：六月十日）
ハヤシに逗留。

7月13日（旧暦：六月十一日）
ホロイヅミを出て浜辺を通り、小さな沢を2つ越えてシユモミネ川を過ぎ、また川があり幅3.6m位もあり、川を越えて浜通りを行く、ハアフラコマの道である。左



〈蝦夷紀行附図トモツクシ：市立函館図書館蔵〉

の山道に入り、坂を上がりると野原があり、岩山が続く所から小さな坂を下り、谷合へ出て、沢を2つ越えて、石の川があり、川を渡り右の端を通り行き、谷沢の間を経て、山へ上がりクマザサを分けて行き、また急な山へ上がる。右にエルンノホリという山があり、この間は野原から望むとくぬぎく棟：ミズナラかカシワのことをさしている>が多い。道は石が少なく、ただ山へ上がり谷を下るだけである。したがって、沢を離れて左に小川がある。この辺にはアイヌの家もあり、小さな沢を2つ越えて山に上がり右にカモイ山がある。山を下り野原の中の道、右に水のない池がありカモイシンタラという。左はアブチ沼長さ200m位、行程の半分ほどである。沼の端を通る。

海辺は砂山で海は東南にエリモの出島が遠く突き出ている。海中に所々大岩があり、その形は細長くネヅミの尾のようである。よってエリモという。砂山を過ぎてテンハク川を渡る、アツワシ川に至る、インサルシ山はとても高い。ヲトヘ川を渡り、石の浜に出て、沢水の流れを渡る。この辺の石はみんな雲母を含み光がある。これから丘に上がり野原の道を通り1580m位行き、坂を下り、流れを渡る。海岸には岩石が多く、砂利で道は大変難儀である。

セウヤの入口に沢水の流れがあり、旅館の前浜は大きな石が多い、夜中は波の音がとてもうるさかった。

7月14日（旧暦：六月十二日）

セウヤより石の浜を通り、出崎に大きな石があり、ここは海の潮が満ちると通る

のが難しい、石の手前、山の道は幸い潮が引いていたのでここを通り、第2の浜の出崎に大きな石があり、「ここよりウエンヘツという」・・・第3石門があり、第4は岩石がますます大きくなり、形がおもしろい・・・岩の角をよじ登って第5湾を越える、瀑布が2つあり、山の崖は絶壁で、第6は大きな岩石が海中にそり立ち、第7の立ち石も同じようにそり立ち、その間の石の皺を道としている。第8、大きな丸い石の中に洞があり、窓になっている。第9湾、瀑布がある。第10湾も瀑布がある。第11は洞である。第12はさほど大きくはないが13~14の洞があり、28mの間に川があり、川の左右に大きな石がある、この景色は最も奇絶である、私もその岩を名づけて躍龍岩とした。水は両山の間を流れて、岩に当って雷のような音がしている。谷に入って水源を探して1090m位行くと、水源は遠くて到着は難しい、よってむなしく引き返した。16、17の間、岩の先は形が一定でなく、この時海から波がきて、岩先を渡る時は波の間を待って駆け抜け通る。険しいのと危険と一緒にある。18、19の間小さな湾に先をつくる所、どのぐらいということはわからない。19、先はとても険しくテレケウラに似ている、20、21、22、23、24湾を越えるが、岩石が大きく、湾ごとに滝がある。25湾、先は平らな岩で海の中に大きな岩が2つあり、それから小さな先をまわってサルの旅館に到着。旅館のそばに山から落ちる清泉がある。この日一日中変わった形の岩、ならびに瀑布を見ることだけで、他に変わったこともなかった。

7月15日（旧暦：六月十三日）

サルよりサル川を渡る、浜通りは山の間に出て、フルハヨルの出崎の岸壁は最も急峻で岩石もまた大きい、そこからヒタヌンケの川を渡る、カモイカルヌウの掛け橋（棧）のある山中にアイヌのきこり道がある、・・・近藤重藏が立て札を立てて書いている・・・私は景色を楽しもうと、山中の道を行こうとするが、行李＜荷物＞とみんなは海辺を先に行き、よってスルタヌケの川を渡る、ここには2つ並んで山の道がある、そこから海岸は白壁を立てたような難所があり、トモツクシという山が崩れて岩が5~6個あり、海岸に打ち重なり、岩角を伝って2200m位行くと岩山が海の中へ出ている。岩山のそばを出て、また大きな岩があり、高さ23m、岩の下は深い淵で岩に打ち寄せる波は、岩の高さの半分までくる。アイヌたちはここで私を待ち、ようやく越えた。

岩の角にわずかに足をかけて、手もまた岩の角をよじ登り、岩に取り付き行く、その間36m位、岩に入れる所があり、ここでしばらく休み、28m位前と同じようにして越える。・・・岩石の室は御影石のようで浪苔が生えて・・・後ろを見えれば深い淵で、波が高く目がくらんで魂が消えるようだ。

試みにこれまでの旅で険難だったのは、チコシキリ、テレケウチ、念佛坂、トモツクシ等などあるが、ここのようにすごいのはまれだ。それから出崎を2つ通り石門がある。石門の手前の中を通りヒナイ坂に上がる。坂道は急で曲がりくねって(九折)登る。小さな沢の中を通りルシヘツ川に沿って浜へ出る、ここで昼食にし、浜通りの出崎を3ヶ所過ぎて川を渡り、また出崎4つほど過ぎてシラルンへの川を越える。浜辺に滝(飛泉)があり、岩山が海へ突き出して道がない。

山ごとに洞穴があり、洞で波の静まるのを待って出崎を走り越える、また先の出崎の岸の下は海が深く、出崎の前には清水の谷があり、高さ30m位、ここは、はしごを上がり、沢水にはしごがかけてあり・・・中を通り3.9km位行って山に登る。丸木橋(獨木橋)を渡り、坂を越えてくぬぎ(櫟)の原を通り谷へ下る、小さな沢を渡り、小さな流れを越えて28m位の川を越える。この川はヒロウ川と合流する。またヒロウヘソがあり、18m位の丸木橋があり、川の端に大きな岩石があり、川の合流口に立ち岩があり、18m位、浜に出てビロウの旅館に到着する。<以下省略>

8月16日(旧暦:七月十六日)

ヒロウからサルまで浜道23.6km、新道を切り開いた方は19.6km位である、この日はとても暑く単物で汗を流すことになる、近年ないと運上屋の亭主と話した。ヒロウからサルへの新道は、ヒロウの出崎をまわり坂道を上がる、ここに新道の杭(標柱)がある、山を越えてヒロウヘワに着く、支流に沿って行き、川を渡り、また坂を上がる、しばらく行く、・・・東に行けば旧道である・・・野原を通ってヒンナイの山を右に見て山を越えて、チフロヘツの川に出て、川を渡りまた山道をナウコへ、小川を渡り浜に出てヲツシヤルンベの淵から山道に入り、ナヌライの小さな沢を過ぎると、山道は曲がりくねって上がっている。この辺には谷にかかっている桟橋が2~3ヶ所あり、その中の一つをヲツチンという。山の道は最も高い所で、ヒロウからクスリまでの島を見渡し、アカンのヒンネシリ山を雲の間に見る・・・最も高い・・・ベンヘヘツの山中で昼食をとる、それよりシユムクンナイの山坂を雲の間に見る、もっとも高い・・・ベンヘヘツの山中で谷川に沿って下る所をヒタ・ヌンゲツクという。浜に出る道は、この谷川を7~8回過ぎて、ようやく浜辺に着くのは前と同じである。ヒタ・ヌンケのストフウを越えて右に岩山、左が海である、ヲンネトクからホコラネットベツを過ぎサル・ベツの手前に新道の標柱があり、野道を1400m位行くと旅館に着く。この亭館は新道の方に新しく造った、家の前はサル・川が流れ、森林がある。野には大木とハギが多い、林の中にはキハダ(黄柏)が多い。

8月17日(旧暦:七月十七日)

この夜から沢サルトに逗留、朝から雨、昼後雲がはれ、地震があった。この夜はカネタタキ(扣聲:こうけい)の声を聞いた。心配することはまったくない。松前から雇っているアイヌだけが鐘打鳥という。山中の沢で夜だけ鳴く、その姿を見る人は稀であると話した。

8月18日(旧暦:七月十八日)

サルトからシヤワヤまで浜道11.8km位、山道15.7km、旅館を出て林の中を抜けて行く、坂を下りサルヘツを歩いて渡る、川幅が広く石の川で、両岸は大きな石が多い、風景はとても良く、そこから川の端の林の中を通り、また川を越えて、また林に入る。

ここで川は弓の形になり、支流を越え、野原を過ぎて、また川を越え、谷川に沿って山上へ上がり、谷川を3回越えて、山道につながる。高山を越えて、山が続きトウノホリという山に着く、トウノホリ山はとても高く、道はまた曲がりくねり険しい、山間に沼があり、沼の周囲は高い山が囲み、水の色は藍を染めたようである。形は細長く四角形の大きな沼である。少し山を下ると所々にゴヨウマツの大木があり、また焼山に登る、この焼山も相当高い山である、しばらくして山上に着く、汗も服も乾いているが水がない、泉がない、幸いにアイヌの子どもが樽を背負って登っていたので、水かと尋ねると、水だと言う。お金を与え、ようやく玉露のような水を各々が飲んで勢を得て、山を下った。道ははるかに海岸のまわりを望む平地のように、山にそって上がり下がり3.9km位、その間高い山を11.8kmを過ぎて初めて岩の間を清水が出ていて、少しは渴きをなおして小道を下る。ここにシヤツハイホリという谷川があり、石の川で水が清く、シヤツハツヘツという、この辺の谷にはすべてザリガニ(サル蟹)がいる、少しの時間に100匹位獲る。また山を登り270m位でくぬぎの原に着く、林を過ぎて、枝道があり、ここをホレンリコムとシヤウヤヤの岐路が2筋ある。ここで昼食。

右の道を行き谷を下りると石門がある、ここもまたヲクリカンキクが多く、また109m位行き橋を渡り、少しシヤウヤより先へ出るため、道のそばにある野原を分け入って、川に沿って行き、左の方にまた石の川が合流する川中の石を伝って、丸木橋を渡る。・・・キタキツネ(野狐)を水辺に見る・・・人を見て驚いて山に入る・・・両岸の山は砂土の山で、土の中には丸石が多く、川に沿って下り、新道を切り開いている小屋がある・・・水臼(水春)があり・・・それから樹林の中を過ぎて浜に出てシヤウヤに着く。この川をシトマベツという、水の中の石には雲母を含むものが多い。

8月19日（旧暦：七月十九日）

晴れ、ショウヤからホロイヅミまで山道、旅館を出て、シトンベツを渡り、山道を越え、往路を左に見て、林の中を3.9km位行き、アツフチイヘツの石間を渡る。

この川もザリガニが多い、野道よりは土の沢を行き、九折坂を上がり、カモイ山側に出てここからは同じ道である。山川がありツベツという。それからまた山を越えまた川である。前の名に同じ小さな沢である、小さな沢を上がりくぬぎ林の原を過ぎて、浜へ出てコロアキヤツを通り、シヤマニ、浦川の出崎を望む、そばに高い山がありコロブトイワハという、平らな砂浜のホロイヅミに着く。

窓が小さくて暗く、その形がカゲロウ（遊風）のような虫がいて、この夜、寝ていない人たちはみんな手足頭に顔がかゆく痛い。明朝、衣服を見ると白くなつており、霜のようだ、朝見ると膳椀もことごとく白いほこりがあり、はらつてもはらいきれない、あまりのことでのアイヌの翁に尋ねると「肌着（襦子）を積み置いている所は、草の家（ふし家）も古いため、毎年夏になれば虫が出てくるから」と。

8月20日（旧暦：七月二十日）

ホロ泉の旅館を出る、東風で霧が深く、微雨が降る。ともかく、夜からの小さな虫を心配し、浜通りを往来するようにホロマンヘベツのそばに着き昼食をとる。霧も晴れ、また雨も止む。新道は山が高く、曲がりくねつていて上りにくく、浜通りは平らな坂でとてもやさしい。ただ、テンケウシチコシキルとの間、難所が2ヶ所あるだけだ、新道は道も登り降り、みんなが難所と伝えるが、新道が出来たことなので、川を渡り新道に入り、谷沢の間を切り分けて道となつたところを過ぎて行った。

この上に道のそばに雲母の石が多い、最初の山はとても高く、道は曲がりくねつて登り、また少し下り、また山を越え、おおよそ5つの大小の山を越え、沢を3つ越え、この間山中にトドマツが多い、林が少ない所からシヤマニ・石内・浦河を望む一幅の画図である。また一つの山を越えて岐路があり、この日は本当に晴れて喉が渇き、とても谷の流れを飲み、喉を潤しそばの木にて

鳴呼天意不窮人艱嶮又看=泉水新

一次俄愁忘=癡喝聊題=四句=謝=山神

ああ、自然の道理を極められず、人は険しさになやみ、また泉の水は新たに元気を得た。ひとつの苦しい思いを、にわかに嘆くが、大声でわずかでも気がかりなことを忘れ、四句<人生の四つの苦痛、生・老・病・死>を題して、山の神に礼をいった。

と木に書きつけて行く、岐路の右の方に木の枝を折りながら行き、海辺に出る。アイヌの人足たちはここで待っていて、私がなぜか聞くと、右の道が近くて早い、アイ

ヌも通つておらずその先を通つた者や、後から来る者のために枝を折つたといふ。

新道を切り開いたのは往来の者の利便になるだろうか、人も通らない道を作るのは何の恵みにもならない。今日は特に収穫があった。それから浜道、谷川のそばを過ぎて、日暮れになりシヤマニに着いて宿泊する。

「休明光記卷之二」 羽太庄左衛門正養

<出典：休明光記2巻 羽太庄左衛門正養著 叢文社>
寛政十一年～十二年（1799～1800）の記述と思われる。

大河内政壽はシヤマニに到着し、新道を開き、部下の中村小市郎、最上徳内が新道づくりを指揮する。そもそもこのところはチコシキル、トモチクシなどいうところがあり、蝦夷地第一の難所である。あるいは縄をさげ、はしごをかけて渡り、または巖の間をくぐり、あるいは波が打ち寄せる間を見て飛び越える所もある。ほとんどが人跡がまったくないほどの難所である。しかし新道を開くには莫大な経費であり、私領（松前藩のこと）の力では無理なので、国家（幕府のこと）の力をもつてこの難所を開き、蝦夷地第一の通路を得ることができた。その後、南部家がなお整備し、今は車馬が通るのも思いのままである。村上常福、長坂高景は、シヤマニに止まり、越年して仕事をする。長坂は翌年3月、村上は翌年9月に幕府に帰る。遠山景晋は、ホロイヅミまで巡査する。

「蝦夷の島踏」 福居芳麿 享和元年（1801）

<出典：えりも町史>

箱館奉行羽太正養とともに太平洋を国後島に渡り、エトロフ島の巡査を試みたが渡航できず、帰路についた従者福居芳麿の記録。

1801年6月16日（旧暦：享和元年五月六日）夜が明けきて宿を出発する。今日行く道は二つに分かれ、一つの道は高い峰を打ち開いて作った道で、大変険しく、歩くのが苦しい。もう一つの道は、浜の道を行くが、大きな岩が道に乱れて立ちはだかり、ここの道も大変よくない。これらの道の良悪を人々はそれぞれに伝えれば、まだ見たこともないが行こうとする道を、自分の心の中で一つに定められずに、こ

の道から出発しない人々に、どのようにしたのかといえば、疲れていそうな足には良いとはいえないが磯伝いこそが、少しはましだろうとみんなに伝え、「さらば」と先に浜辺に立った。シラリヤという所まで3000m位は砂ばかり（いさご）の道で、ここから先は毬に似ている石が高嶺から転び落ちたと見えて海辺に積んだように山になっている。これを踏みながら行くと、丸い石が重なり、踏みはずせば足が滑ってしまうのが大変心配だ。とても苦しい道を耐えながらかろうじてここを越え過ぎて、シヤヌシベという所に着けば、大きな巖の道に出る。間を越えてオンヌシヤヌシベという川を渡ってブヘヲエシスマという所に出る。仰ぎ見る限りに大きな巖が大海に突き出ていて3.5m位の穴が2つあり、これをくぐって海辺を伝ってレケツシという所にさしかかれば、8mを越える大きな岩が七重八重にも重なって立ち、これをどのようにして越えて行こうかと目を動かしながら立った。しばらく言葉もなくしていると、若い従者が身軽になって、さるまろの木を伝って少しの岩角に足をかけて大岩に取り付き、綱を下ろした。危ないことではないか。一つ越えれば、また一つの、3つ4つ5つ岩が重なって立っているのを、このように越えて行き1900m位と思うが、高い岩の根が重なり立っていて山はない。見下ろせば青く（碧色）深い高波がこの巖を荒い、足を踏みそこねて落ちはば、命どころか身も骨も打ち砕かれてしまうと思うと恐ろしい。辛うじて砂浜に出れば人々は、日頃でも苦しんでいるのに今日のこの悩ましさに、仏の国である極楽の東門という所に出て心からみんな喜んだ。この川の先是このような険しい道はないなどと言いながら、コトニ川、ヲヨベ川、エバラエ川などを渡り、オホツナイというところの高い峰から落ちる滝がありすばらしい。みんなは元気に行く。

仰ぎ見る高嶺を越えて石の上

落ちて玉ちる滝の白波

さて、コシキルという所になると、右の高い峰は雲の中に入るものいとわない、大きな岩が大海にとても出でるこの渚は、干潮の時は砂浜を行くが、今越えようとする坂は汐が満ち始め波がくる。高い波は巖に当り砕け立ち上がり、白波は10mにもなる。波が引くときは少し浜となるが、すぐに高い波が打ち寄せ、元のように波が巖に当り、砕け散る様子は身にしみる、先に越えるのは危なく足を置く所があれば、波の上をいく船がないので、越える手段がないので、みんな岩に座り、息を長く吐く。御使君のをはさぬに私がここに止まるわけにはいかない。ここにはアイヌが住む家もなければ、もしあっても夕食の食材もなく、<広尾で>新しく腰に吊るした食べ物が少し残っているが、弁当箱（はりこ）の底にあるぐらい、私は日ごと

にアイヌと物言い交わし、アイヌの言葉をほんの少し聞き知っているが、道案内に来たアイヌを呼んで、ホロマンベツへはどのくらいかと質問すると、1000m位という。距離が短いので安心する。さて、岡崎という若者が、海をにらんで、なんともいつ行けるかわからない、あなたはどのように思っているのか、と申し出た。私もどのようにしようかと考えたけれど、これが良いと思う方法がないので、ただこのように眺めている。君がよいと思うことがあれば、身に換えてもらいたいと伝えた。我々は微笑みながら日頃から心は打ち解けている。しかし、身に換えても良い考えがない。若者の心に我々の規則を反する気持を持つことは危ういことだ。若い人を喜ばせるのに大いに語らせるというが、ここからホロマンベツへはわずか1000m位と聞き、それほどの距離ではないのに、波の間を走り越え行くのに、今日は波が打ち寄せるので、波が引く時は少し砂浜になる。さて、高い波が打ち寄せる時は、岩の間に身を寄せ、波の間を走ろう。見たようにこの巖の様子は、実に詳しく細かく見れば、必ずその所に身を隠したくなる。さて、彼がここに着けば、アイヌ船が来て細かく言い伝え、わかったと横たわった。刀2本を取り服を脱ぎ褲を一つしめて行く、さて、ここから突き出した岩の角をつかみ、若者が越えて行くのを見ながら心配していると、わき腹から出る冷や汗で、魂も消えてしまいそうな気持ち、この岩山が海に突き出ている所が弓なりの浜になっていて、走って行くと全てが見渡すことができる。行っても若者の姿が見えず心が落ち着かない。船を待っている間に歌一つひねり出す。

大海ゆ潮は満ち来もいはりとに

くたけて返る波やなになり

少し時間がたってアイヌ2人が車櫂を操作して船を漕いで来た。これしかりと渚に出てみればそうであった。みんな乗船してホロマンベツに着いた。このように困つたが、少し時間が遅れれば大変だった。潮が満ちて岸の波が高く綱を引いて船はようやく着いた。ここまで11.8kmというが険しさに大変遠く感じた。ここは早うよらひかけの所も定めれば食事の用意もあり、みんな入って食事をする。日頃からこのような所を歩いて行く道なので昼食の所は決まっているが、朝に宿を出発して、弁当箱のようなものを腰に付け、場所を決めないで少しの間飢えをしのいだ。ここから先も左は高い嶺が打ち重なり危険な坂道、おもしろい形をした岩などが多く、これを越えていく。最初はたいしたことはないが、次第に苦しい道である。ニカンベツという辺は山を下って渚を行く。これもまた道が悪く潮の引く間を待って走って越える。道が時々あり、13.7kmでホロイヅミという所で宿を求めた。1日で27.5km

位の道であるが、体が大変疲れた。入浴して人心地ついた。さて、あの岡崎を呼んで昼間の彼の勇ましさによって無事に宿に着いたことがとても嬉しいかった。昔、ある人がこのチコシキルを越えようと、このような困難を越えようとして、果たせずに帰らなかつたが、今も人はみんなここを、「だれそれ返し」とか呼んでいると聞く。我々もここに来なければ、大変な恥じになつてゐるであろう。

越えぬとて沖つ汐風越しし

渚を伝えふ跡の白波

など思い続けて、今、かわるがわる笑つた。

6月17日（旧暦：五月七日）

七日の夜明け前に起きると小雨が降っていた。この旅路はすべて浜沿いの道を行けば、雨が降る日は風もあって歩くのが苦しいので、雨の日はどこでも留まるべきなので、早起きしたけれど今日一日はここに留まろうと思うほどであったが、8時（辰）過ぎから雲がなくなり陽射しがさわやかに出てくるので、いざ出発しようとした。みんなは、この道も新しく山を切り平らにして、速い道となつたので、大変狭くて悪いけれど山中の新道なので危険な坂道などではなく、昨日のほどの思いと比べようもない、アブラコマという所に和人が100人もいるなどと言われた。昔、高波によってこの辺のアイヌがいなくなつたと言われた。15.7km位でアブという所で昼食。ここからの道も同じように少し険しいところもあるがたいしたことはない。19.6km位でサルトという所に宿をとる。1日35.3km位の道である。このアイヌに荷物を運ばせたので、酒を飲ませれば、大変喜び酔ひしれ、歌い踊りまわつてゐた。彼らが歌うのを聞くと、なんのこともなく、さらに盛んになることもなかつた。このアイヌの長をオトナと呼び、その次をコヅカイという、このオトナはいろいろなことを知つていて、今もこのように呼ぶ所もある。これは我々和人が付けた名前かもとからアイヌの言葉か、未だに考えている。また、すべてのアイヌをウタレといい、子どもをヘカチなどという。これらはすべてともとアイヌ語で、このように分けているのは、我国の大昔からの言い回しであると思うことが多い。ここにただ一つ、よく悟り得たのは、アイヌ等が常に大変敬い、つつしみ、おそれやまうものを、みんなカムイという。これは我国の神という意味と同じように聞こえ、神という古い言葉の残りで、意味もよく合つてゐる。これは、ふと道を行く間に考えたことなので、これでやめることにしよう。このオトナは妻を多く持ち、あちこちに住まわせてだいたい17～18人もいる。コヅカイもオトナよりは少ないようだが、

そのぐらいの妻がいて、ウタレ等という者は妻はまったくなく、これはこの国の古い習慣である。しかし、人目を盗んですることなどは、少しも聞かなかつた。道のない国にはこのような風習も人が守れるものと知る。もしや人目を盗んですることがあればツクノヒといい、己が尊び愛するものなどを差出し、その罪をわびるという。このことは幕府も理解し、考えがあるけれど、男女の仲は速やかに改まることはない。これをやめようとすると、なかなか思い違いもあり、心から教えなければいけないと司人達に伝えておいた。

6月18日（旧暦：五月八日）

朝が明けて宿を出発。今日の道も大変苦労した。浜道はあのような波が引く間を走り越える所が多く、ウエンベツ、トモツタンという所は、危険な岩が高く突き出しているのを越え、いつもの苦難の道である。ロベシベツという所で昼食。ここまで11.8kmという。ヒナイという所から深い山道に入る。峠は登り下りが多くて大変険しい道である。11.8kmでビローという所で宿泊する。

「蝦夷道中記」 磯谷則吉 享和元年（1801）

＜出典：えりも町史＞

享和元年東蝦夷地を幕府が永久直轄することになり、松平忠明の蝦夷地調査一行の一員、磯谷則吉の紀行文。

1801年8月2日（旧暦：六月二十二日）

7時（卯半刻）美老を出て、3.9kmでイベニマイという所で、左に行けば海岸でトモチクジという難所があり、波が高ければ通りにくいので、右を通り新開道を行く、カムイカルーという所から浜に出て、2kmでまた山に入り、1090m位でサルトの仮屋につく。

8月3日（陰暦：六月二十三日）

朝7時ごろ（卯半刻）約500mで山に入りサルト川がある、渡船が2～3隻つないでおいてある、また渡してくれる人もないので、自分で棹を20回使って渡つた。約7.9kmも上ると、左の方に、東の海の浜、エリモ岬、百人浜（百人浜ということは寛文年間のころであろうか、シヤムシヤインというアイヌの長と津軽の金堀庄太夫という者が、罪のない（聟：むこ）集団を作り、松前に近い蝦夷地オシヤマンベ

辺までも和人を襲って来たが、このことが松前藩主に聞こえ南部津軽藩に命令され、松前藩とともにこれらを討ち負かして、責任者百人をこの浜において殺したこと（百人浜と名づけたという。）を眼下に見下ろし、右の方を望めば、森林でおもしろい峰が幾重にも重なることもなく、また少し行くと500mの間に左右、見渡す限り秋萩が生え茂っている。

まもなく咲き始めたなら、言葉もないほどキレイだろうと思われる。

秋萩の咲出む頃は行人の

袖の錦や色やそふらん

「秋ハギの咲く頃は袖が錦に色どられたようになるだろう」

25.8km位の山道を登り下りしてホロイヅミに着いた。

8月3日（旧暦：六月二十四日）朝7時ごろ（卯半刻）出発し、12kmほど浜辺を行くとホロマンベツまでの間、砂の上の道がよい。ここでは当時幕府が造船しており、たくさんの大工鍛冶屋等の小屋があり、船は半分以上できている、すべてで5艘である。景福丸千四百石、万金丸千二百石、千春丸六百石、豊泰丸八百石、矢祐丸六百石、どれも蝦夷地での幕府用の船と聞く、さて、ここより海岸通りは難所なので、少しでも波がある時は通ることができない。よって近頃山を開いて道を造らせた。今日も波があり通ることが難しいということだが、このような所を行くこともいいものだと思い行こうとするが、続く者はただ一人だけであった。左は広くはてしない太平洋（東海）、右は数十丈の岩山が険しくそびえ立ち海に面している、打ち寄せる白波は細かく碎けて玉のように散り、岩間に貯まっている海水は緑色で濃い青色（碧瑠璃）をしている、また山の岩の元をほとばしる飛び散る泉は100m（三十丈）の白髪のように乱れ流れ、海中に一つ立つ岩は波を青い苔のように受け、髪を洗うようだ。そうして岩の角を伝い伝い行くときに波が高ければ通れるべきものでない。山に登ろうとすれば絶壁をよじ登るしか方法がない。そういうても刀を帶で結び、衣服を包んで首にかけて、ようやく足のつま先がかかるところを力をいれて、波が寄せて引く間を見計らって岩を伝って行き後から寄せてくる波が腰のあたりに打ち寄せる、かろうじて砂浜にたどりつくが、木の皮で作った不思議な小屋があり、そばにすねは膝から下を出して、袖にはたもともなく、背中には大きな模様をつけたアツシというものを着て昆布を探り持っている女がいた。このような人が来ないようなところにいる女性は、どのような仙女に仕えているのかと問うと、お

らは＜私は＞この五月に函館から来て昆布稼ぎ＜コンブを採って働いている人＞と答えたが、夢がさめたような心地がした。このようなものを見て実に世渡りは難しい事だと知ったものである。

このような難所を数ヶ所越えて行くと、向こうに大きな石門があり、干潮の時にはこの石門の中を通る、満潮の時は横を行く、高さ丈余、幅は広く馬三頭を横に並べて往来できると思える、一般にブウヤシユマということだ（フヤは穴のこと、オマレは入ること、シユマは石のことなので、穴があつて入る石ということだ）、程なくシヤマニに着く。

「蝦夷日記」 児島紀成 文化五年（1808）

＜出典：えりも町史＞

文化五年幕府は、それまで蝦夷地を警護していた津軽藩、南部藩、秋田藩、庄内藩に加え、仙台藩、会津藩を加えた。松前奉行も東西蝦夷10ヶ所にそれぞれ調役、下役、在住、同心を配置し、勇払から幌泉の間を調役比企市郎右衛門の管下にした。督軍西丸御書院番頭夏目信平に従事し、エトロフ島からの帰路に猿留山道を通った児島紀成（国学者香川景樹のすぐれた弟子といわれた）の紀行文。

1808年10月2日（旧暦：八月十三日）天気よし。今日は特に山も高く海も深く見え、眺望はとても遠くまで見える。谷川の水はとても清く流れ、丸木の橋が渡してある、坂ばかりの山路はいうほどのものではない。しかし、この山は昔から登る人がないと聞いて、近藤重蔵が始めて開いたので、今は近藤坂という。

おそろしきさかしき山の奥にまで

朽ぬは人の名にこそ有けれ

「おそろしい坂しきが山の奥までのびている。
朽ちないのは人の名だけだ。」

日が照りながら雨が降る。行くのに難儀して押蘭別（オシラベツ）で休み、佐留々（サル）の番家に宿り、江戸からとみの消息を知った、今はたかの島へ帰るべきではないといましめられ

今更に何の騒きが出来らん
 覚束なしやけふのたよりは
事もなくかへる旅ちに成ぬとも
 故郷人はしらずや有るらん

「今更、何の騒ぎができようか
 約束がない今日の便りは
事もなく帰る旅にならなくとも
 ふるさとの人は知らないでいるだろう。」

10月3日（旧暦：八月十四日）曇りの日で進まない。10時（巳）過ぎに、晴れるように見えたのでよいと思い出発した。とても高い山々の峰を伝って行く道だ。谷底から湧き出る雲がただようを見て

大空ははれ渡りけり山あひの
 いさよふ雲はいづちゆくらん
 「大空は晴れ渡っている 山間の
 うごかない雲はどこへいくのだろうか」

阿渕＜アブチ＞で昼食をとり、母衣泉＜ホロイヅミ＞の役舎に宿る。海の眺望がとてもよい。在住の和田さんが、会いに来て下さり主人がご馳走で大変親切してくれる。ここを境にして東を奥蝦夷、端蝦夷などとう。住吉弁天などの社が建てられている。初めて、うり、茄子のようなものを見た。さすがに人々の心はずばらしい。波の上に月も出た。ああ、それを見つめて

珍しき海と山とのけしきをば
 よりも見よとか月はてるらん
ふる里にありてみしにもかはらぬは
 今宵の月のかげばかりなり

 「珍しい海と山の景色を
 夜も見なさいと月は照っている
 ふるさとにいて見ても変わらないのは
 今宵の月の影だけである。」

「仙台よりクナシリ迄往来日記道規細抄」高屋養庵 文化五年（1808）

＜出典：高屋養庵著、高柳義男編、宝文堂刊＞

仙台藩は文化五年、東蝦夷地、クナシリ島、エトロフ島の警備を命じられ2000人を派遣した。著者高屋養庵はクナシリ島付の医師で、往路は函館から船でクナシリ島へ行き、帰路は陸路を通った。〈森資料〉

1808年10月10日（旧暦：文化五年八月二十一日）

朝夜明けまで雨が降り、模様を見ていると、次第に晴れてきたので、8時（五時）ビロフを出発。山中を通る、7.9kmほどで海岸へ出る。椎茸小屋がある、また同所に一里塚がある。ここにヲツシヤクベツと海岸への分岐杭がある、段々行くと出崎があり、しかも大石で通路は難所であり通過して、また山道へ入り、昼所に到着する。ここは海岸でヲシラルンベツという。昼食をとって行き山を2つほど越えて海岸へ出る、岸は大石が屏風を立てたように峰がそびえ、または剣のような石山で70mほど、山道にセコノ森というのがあり、おそらくもまた絶景である。また山を一つ行き、山へ入り2km位でサルト御番屋へ5時（七半時）着く。末筆ながら、ここから一里半程5.9kmほどで、ビロフとの間によい板橋があり、ここがトカチとホロイヅミとの境であり、休憩所がある。同夜、夜更に及川の病体が段々段々と悪くなり、深夜1時頃（八時比）病死する。同夜、直接立ちまわり人足等を頼み準備し、同所へ葬いを申し出て、同所番人等へ手続きを頼んだ。手続きのため明日中に出かけ2～3日も逗留することになるかと思ったが、サルト会所まで役人のやりくりにより、同所で病死したことを聞き、急いで行き駕籠を用意してやりくりしてくれた。

10月11日（旧暦：文化五年八月二十二日）

サルト出発は伝染病での死（萬病死）なので、御人数よりは早くとりあつかいし、7時頃（明半時比）出発した。道程の半分（半道程）ほどにサルト川という川があり、幅13.6mほどで舟で渡る。ここから山道へ入り、段々と昇り、難所であり山頂まで20回も曲がり、急な坂で、もっとも石山である。登り詰めると、またまた下りの坂になり、右の方に大きな高山があり、アイヌにこれを問えば、カムイノボリという。本当に大きな高山である。段々と山の坂を下ってアツツツ昼所に着く。杭があり、これタヌキ沢とある。この昼所より真向に当るところにエリモの嶺が見える。景色は大変よく見える。昼所の後ろは高山がそびえ見える。段々と行ってホロイヅミへ2時（八時）着く。着後、雨が降る。仲間が伝染病（萬病）で死んだので、同

所で御備頭に報告し、御備頭から同所の詰相公儀御役人へ届け出た。支配人に頼み同所へ葬った。この準備について同所の役人が直接我々を呼び出し、様々な事情を話し、退席した。

10月11日（旧暦：文化五年八月二十二日）

ホロイヅミを8時（朝五時）に出発。前夜から雨が降っており、少し小降りになり、段々と行くと、風雨は激しく砂や石を飛し、風上へ顔を向けることが出来ないほどであった。山道へ入り、山を5ヶ所ほど越え、山坂が急で危険な所が多数あり、10時半ごろから1時（四半時比より八時）まで快晴。

<以下省略>

「東行漫筆」 新井保恵 文化六年（1809）

<出典：秋葉実編 北方史史料集成第一巻 北海道出版企画センター刊>

新井保恵は松前奉行の役人で、「東行漫筆」は東蝦夷地の各会所の詳細な調査報告書である。当時の会所の経済状況を知る上で貴重な資料。沼見峠、豊似湖の記載はない。<森資料>

東行漫筆 一
従 箱 館
至 保呂泉

1809年5月29日（旧暦：文化六年四月十六日）快晴

<略>

このブユケシマは馬屋3軒のような石門が立ち、大岩の胎内に潜るようで、馬に乗っても通れる大きな穴がある。ここにはアイヌ家が3～4軒。この辺から良いゴヨウマツ（姫子松）が産出するという。シヤマニ会所請負の材木が出る。ここからまた丸い石がごろごろしている細い道を行く。アイヌの家なし。海辺には女子がフノリを採っていた。

ここから行って新道（様似山道）は山に入る。登りは約600m、道は悪く樹木が多い茂る所を行く、半分位行くと坂を下がる（シヤマニより7.9km）。ここに板張りの小休所がありヲコトニ。ここまで7.9kmだが遠く感じた。

この休み所の前に谷水の流れがあり、滝が落ちる音がして良い山の住まいの宿と

もいえる。この新道は享和二年（1802年）戌（いぬ）年に田中定右衛門が来た際に、この道がないところは海岸の出崎を潮が引いた間に通ったという。

シヤマニを出て初めてエリモの崎を見る。快晴なら浦河から（エリモの崎が）見えるという、昨日は曇りだったので見えなかった。ここから新山道を行き登り下りが難しい場所で道が悪く所々丸太を並べて道を作っているところもある。5.9kmでホロマンベツ、川を渡り、直ぐに昼休所。（ここに和助という者がいて妻子があり、自分稼ぎの者である。ここは船渡して、昼休所である。）

シヤマニ持ちの地域である。この昼休所はこの度新しく建てられた、上ノ間、次ノ間、六疊二間ばかりで継ぎ足し、非常にきれいである。ここは浜辺海岸に行く。

一. この新道は出崎の潮が高い時は通行が難しいので、山を突き抜いたのである。
よって大変険しく危ない。ここにはアイヌの家もある。

一. この出崎の先に李白岩がある。近藤重蔵が建てたという立て札が2つあり。この出先をチコシケルイという。平川次三郎と家来の三人は山道をいやがってこの崎を渡った。

ここから海岸になる。しかし所々丸い石があり道が悪く、草が倒れている道である。3.9kmでニカンベツ、シヤマニとホロイヅミの境の川である。この川の通りにアイヌが住む。

少し先にアイヨシ。ここに和人が一人いる。重左衛門という自分稼ぎの者、妻子持ちである。昆布を探っている。道筋は海岸である。やはり難しい道である。ニカンベツから3.9km、ウエンコタン、ヨシのすのこ建ての小休所がある。ここも昆布取りの場所である。ここからホロイヅミ会所へ3.9kmある。

ここから3.9km新道で少し海岸を離れる。道筋は平らで牛袋の持場ホロイヅミ、アイヌ語でホロエンルムという、ネズミのことである、この岬はネズミの尾のように出っ張っているからである。人足11人が馬3頭で来て泊まる。この会所、享和元年（1801）佐藤茂兵衛<当時支配勘定、旧暦：享和三年壬一月一八日調役、文化五年一月吟味役>が持っていた時に建てたもの。番人給180両、支配人佐吉、家内引越 納金28両、通詞17両、15～6両より10両2分位、番人11人。外御雇が12人で月に1両をあてている。

請負に向いている良い会所である。

一. 会所1ヶ所、長さ34.5m、横10m、建坪95坪。一. 板蔵5ヶ所、5.5m×7.3mから、5.5m×21.8mまで。一. 板蔵2ヶ所、3.6m×5.5m。一. 旅宿所1軒、7.3m元は古い板蔵である。これを座敷用に作り直した。18.2m、新しく建設した。一. 古い会所5.5m×10.9m、これは栖原屋半助が請負の時に建設、運上屋として使っている。その時は旅宿所に用い、粧家で良い家である。一. カヤ蔵2ヶ所、積

物入れ。一. 荒物置屋2ヶ所7.3m×14.5m。一. 大工細工小屋1ヶ所、7.3m×14.5m。一. 馬屋1ヶ所、7.3m×14.5m。一. 弁天社。一. 住吉社。一. 番船1艘、40~50石積。一. 中使1艘50~60石積。一. 小廻し2艘30~40石積。一. 漁船1艘。一. 磯船45艘。一. 馬14頭。一. 漁小屋2ヶ所 エンルンモカ 会所の直営の稼ぎ場である。一. 昆布小屋3ヶ所、アブラコマにあり。一. 昆布小屋蔵二軒、アブラコマにあり。一. 小休所 会所より7.9kmヲタベツ。一. 昼休み所 アブチ。一. 番屋ショウヤ。一. 板蔵2ヶ所 サルト。一. 旅宿所サルト(21.8m×7.3m) 一. カヤ蔵1棟サルト。

ヒホウ境

一. ヒタヌンケ川 板橋の長さ20m、ヒロウと隔年で維持修繕をしている。この境目は1802年（享和二年戊午）に話合って決めた。一. 同所、小休所 ブユマフ小休所あり。一. ニカンベツ川 土橋長さ22m、シヤマニとの境にかかっている。去年1801年（酉年享和元年）茂木吉十郎の持ち場である。一. アイヌ家45軒、181人（男92人、女98人）。一. 港1ヶ所、南西に向き 深さは約5m、700~800石の船なら3~4艘が入り、千石以上の船は2艘ぐらいに入る。良い港でエトモよりもこの港だ。時化をかわすのにもよい。南西（未申）から入り、北東（寅卯）から出航する。

出産物

タラ、カスベ（鮑）、サメ、フノリ、コンブ、シイタケ、ワシの羽根、間伐材（早伐・さぎり）、これらは松前藩（私領）のときは2000~3000石目、幕府の直接管理（御用地）になり3000~4000石目位、囮荷物は毎年2000石ほど。一. 1805年（丑年、文化二年）水産物はコンブ4500~4600石目、フノリ、魚類400~500石目、合計5000石目、700両であるが、毎年それ以下になることはない。

一. ショウヤ、会所の東19.9km、ホロイヅミにはアイヌがいない。松前藩（私領）が引き上げるまで、ヒロウからの出稼ぎが30人住んでおり、コンブを勝手に採っていた。松前藩が引き上げ1803年（亥年：享和三年）からこのように取り決めた。一. 自分稼ぎの和人が50~60人、これはアイヌが不足しているためである、松前藩（私領）が引き上げてから、旧暦2月頃から南部地方から来て漁労をし、これよりコンブを採り秋になると引き上げる。この稼ぎ高は、3000石目ほどある。アイヌの稼ぎは1000石目ほどである。一. 自分稼ぎが仕入れるのは米400石ほど、その他、タバコ、木綿類などを隨時仕入れ、その利益もあり、この辺にはない大きな場所である。一. 畑作 シヤマニと同様の出来。一. 幕府の武器はない。一. 生活に困っていたり、特に優れたものや、人につくす者はいない。一. 会所は土手に囮われ、去年作つ

た。和田貞吉（調役下役出役）が所有している時に作った。

アイヌからの買い入れ価格。

一. 干しタラ1束（20本）90文、一. 干しカスベ1束（20本）90文、一. 鮫から1束（20本）5文、一. フノリ一貫目18文、一. 魚油1升、100文、一. 椎茸100個60文、一. 鶯羽1羽130文、一. 早伐1本3文、一. コンブ四貫五百目35文。<1貫は3.75kg、1貫は1000匁（目）>

和人からの買い入れ価格。

一. 干タラはシヤマニにおなじ。一. 干1束400文、一. 鮫殻1束100文、一. フノリ一貫目60文。一. コンブ三貫八百目で、盆前は110文、盆後は90文、これは囮いになるためである。一. 魚油1丁4斗入、2貫文、一. 雜魚粕、130貫目で金1両、一. 赤魚粕、80貫目で金1両、チカいわし粕も同じ値段。

△

一. 両替金はない。銭170貫文あり。願い受物は一昨年より2割。一. 自分稼ぎの者へ与える金は、箱館の勘定になり、とどこおることはない。一. 元詰合の和田貞吉に願請けるものは、とどこおることはまったくない。一. 箱館からの囮荷物の積取船は450石で積栖原屋金次郎の船、岳乗丸で、

ヒホウ（広尾）から出航し、稼場ショウヤ（庶野）へ積込み、しかも入港する、沖での碇泊に、しかも荷物200石目を積み込むところ、旧暦四月六日の東風によって沖での碇泊が難しくなり、ホロ泉（ホロイヅミ）の港まで船を廻す際、ロクロ棟に弾かれ乗組員（水主）善三郎、庄次郎の二人の頭を粉々に打ち砕き即死。他に三人が怪我をしたけれど、早々に全快し働いている。今日も船を繋いでいるが、すでに風の向きはよくなり出航しそうな様子である。このようなことで法事料として金一両を支配人佐吉をとおして船頭へ渡す。

一. 等済院へ金一分を納める。一. 今日、山中のアイヌ人足は大変だったので、酒代として人足11人へ金2朱を与えた。<米価換算6250円位、一両換5万円として>一. 今日の新山道、最初は幕府によって出来、難しい仕事の二度目は南部家によつて出来た。一. 当初からサルトン<サルル>までの新道、徳内、小市郎が作ったのは寛政11年（1799）である。その前は、海岸エリモ岬の前から百人浜を通り、サルトン（サ

ルル）で泊る。31.4km位であった。

- 一 武勇ヶ島から先、テレケウシ出崎である。先年（寛政11年）大河内善兵衛がここから行くのが難しく戻った。よって善兵衛返しと諺にいう。

1803年（享和三年）まで南部藩の勤番が22人位いたが、その前後はいない。

夜具が90組、膳椀が100人前位ある。奉行たちが宿泊する際、一泊がさしさわりない位である。

エリモからエサン岬は西南西（申酉）方向に294.5km。

ただし、エリモはホロイヅミの範囲内である。会所から11.8km位ある。海に沈んでいる岩があり、岬の近所にはアイヌの家も在住者もない。もっとも寄り昆布の稼ぎがあり、その時期には10日15日の間、アイヌの出稼ぎがある。

- 一 関取船2艘、幕府が蝦夷地を直接管理してから、去年初めて2艘2300石位金一両90貫目位は、去年、箱館でのお支払いが70貫目、運賃を引き、これが40両の幕府の損失となった。あわせて、海上での心遣いがなかったため、抜荷等もあったので、以来ないようにした。

- 一 エリモは海へ3.9km位出っ張っている。ここまで東から南へ帆をかけて来る。エリモをまわればまっすぐ北へ向かう。この頃は風の様子がよく、漂流死人などは前より少なくなった。支配人は利口でこちらが口出しすることはない。しかし物事をよく分り、やりくりが立派であり、優秀な支配人に見える。

ホロイヅミの床の間に蜀山扇面の一軸があり

歌に

かしらいばらでさゝれはすれど
前ハけつこうなくお正月らん
くいばらのとげで頭を刺されながら覗いてみたら
前方ではおおっぴらに楽しいことをしている。>

- 一 エリモの嶺でアイヌがカモノノミ<カムイノミ>をする。

5月30日（旧暦：四月十七日）快晴

ホロイヅミ会所より、

- 一 エリモ出崎へ11.8kmほど、エリモというのは、アイヌ語でネズミのことという。出崎にネズミの形をした岩があるので名がついたという。ホロイヅミ出発。海岸をおおよそ半分位行ってここから新道（猿留山道）に入る。山道3.9kmあまり、ホロイヅミより7.2kmほどで、ここまで道が良い、小休所が仮に建ててあ

る。テホルヘツこれから山へ入る。登り下りし大きな坂が二つある。たいして急でない。6km位でホロイヅミより14kmほどで昼休所アブチ、この昼休所は羽目板屋根で、内側は腰掛けのように作ってある。上の部屋3.6m×7.3m、次の部屋が3.6m×7.3mほどである。

- 一 ここからエリモの先が良く見える。昼休所より正面見渡し、しかも南（午）の7～8分に当る。ここは山中の休所で海岸まで山が14～15もある。

- 一 ここにはアイヌの住居はない。

この山道の間にショウヤへ行く分かれ道があり、おおよそ3.9kmほど。これより11.8kmほどが山道である。ここは登りで石が多く急で危険である。登りつめて左に沢があり下るのは大変遠く感じる。下りつめて小川がある。サルハン川の枝川ショチケウトルマという。この川に沿って少し行くとヨシすだれの小休所がサルハン川の縁に仮に建っている。ここからサルハン川を船で渡るが、徒歩で引く。川下は浜まで3.9km。おそらく川の源流は30kmもある。この川の通りにアイヌの家はない。

- 一 ここからサルハン番屋へ2.9kmあまり。

- 一 エリモは弁財船の乗組員がお神酒を捧げ、草で作った船を流すという。西地ヲカムイの如し。

- 一 エリモ崎からエサンへ西に294.5km。アツケシ大黒島へも294.5kmという。サルハン川の小休所から少し先に一里塚。ここからサルハン番屋まで2.9km。この間に川2本、板橋がかかっている。平地である。ここの人馬はホロイヅミよりヒロウまで通し、人足10人馬7頭で来る。牛袋持ち場所の中のホロイヅミ番屋、宿泊、サルハン、通常は番人が一人いる。ホロイヅミよりアイヌ1人が年を越している、清兵衛。ここにはアイヌの家はない。産物はない。山中の沢あいで、旅宿所のみの番屋が建ててある。

- 一 この近辺山の木は繁茂し、トドマツ、エゾマツ、モミジ、ゴヨウマツの類が多い。先年、佐藤茂兵衛が持っているとき、山の木をみだりに薪などに切らないように命令し、木を切らない山にした。しかし、薪の木にはまったくさしさわりなかった。

- 一 ここには5～6年南部藩の家人が数人詰めていた、公文書などの取り継ぎをしていた。当時1.2m四方の粗い板倉を造ったものがある。その後、会所が開かれたので、南部藩の人は引き上げた。

- 一 今日、ホロイヅミよりこの宿泊地まで通訳1人、帳役1人が案内に来る。支配人が言うには、一昨日、仕入れの船が入り、荷物を揚げたという。

- 一 ニイカツフからここまでにヤマシャクヤク（吉事草・きちじぞう）が道端にあ

り、アイヌは目を病んだときこの根を煎じて利用する。アイヌ語でヲラツフという。サクラソウに似ている花、和人はボケといい、アイヌは不和という。この入口に標識の杭がある。左、ここから志やうや（庶野）～13.6km、保ろいつミ（幌泉）～24.1km、新しい山道 北ヘヒロウ～22.5km、新道係 最上徳内、小林卯十郎、寛政十一年未年八月＜1799年、9月＞と認められる。

一. 菜大根、夏野菜もできる。

東行漫筆 二

サルトンから子モロまで

- 一. 雪が深い所である。この辺は木が生えている沢が沢山ある。今日通るとよく伸びているトドマツがあった。しかし、茂兵衛が木を切らない山にした。小名わらび台といい、徳内わらびからの名といい、ワラビがよく生えている。
- 一. ノボリサルトン、サツテクサルトンの両方の川には板橋があり、すぐに合流して一つの流れとなり、サルトン川へ合流する。この川にはマスが少しい。アイヌの食料になる。
- 一. ここに常駐している清兵衛は、ヨシを刈り取り、その他通行人の世話をしている。ここで炭焼きを始めた。これまでホロイヅミから取り寄せていたという。ここにはアイヌの炭焼きがある。
- 一. クマ、カワウソ、シマリス、シカ、キタキツネ、クロテン（ホイヌ）、ウサギの類が多く、アイヌがいないので獲っていない。近年シカが少なくなっている。
- 一. この番屋は18m×7.3m。茂兵衛が請け負っていた時にできた。
- 一. ビタヌンケはトカチとホロイヅミ境、番屋から3.9km以内。
- 一. ここからヒタヌンケまでも新道がある。ヲン子トウという沼を行ってヒタヌムケへ出る。7.9kmほどもあり道は急で危険なため、当時通行する人はいない。今回も道を作ったが、放置しているという。道全体を造るのにアイヌを200人区使ったという。

5月31日（旧暦：四月十八日）快晴で時々冷たい雨

サルトンを出発して1.4kmで海岸へ出る。1kmほど行ってヲン子トウという沼がある。ここから新道がある。このヲン子トウの出崎は、時化の時は波の当りが強く、通るのが難しい。しかしこの新道ができて、ヲン子トウの先を山を越える方向に行くと古い道に落合う。今日は海岸を行って山の新道は越えなかった。この山道2.2km

も遠く道が伸びているという。

海岸から山の道の間に入ると川がある。ホロイヅミとトカチの境、ヒタヌルムケには板橋がある。この辺は古い道の海岸である。3.9km位、小休所が川沿いにあり、ビタヌムケ、ここから山道へ入り上がり下がりして約7.9kmで、昼休所、羽目板で作られ腰掛があり、ふた間ある、ヲシラベツ。

- 一. 浜へ出ると所々土で、しかも海岸に番屋がある、ヲシラベツはコンブで稼ぐ所である。この新道も徳内が係でできた。ここから波間を行ってまもなく海岸へ出る。ここは山に新道がある。海岸は岩が高く馬が通るのが難しいので、また、山の新道に入り、川を渡ることが3～4回あるが橋がある。越えて山に入る。道のり3.9km位でヲナヲベツ、小休所が仮に建ててある。ここから山に入る。上がり下りしてヒロウ川に着く。2筋あって丸木橋がわたっている。石のある川で流れは遅い。川を下ってビロウ。ホロイヅミから同じ人と馬であった。宿泊、松前から550km、箱館（函館）から463km。

＜略＞

- 一. 東に海がありホロイヅミとの境まで約15.7km。

＜略＞

- 一. ホロイヅミ領シヤウヤへ出稼し、フノリ、コンブを浜で船に積み込むところである。

＜略＞

- 一. 海辺にトモツクシという所がある。切り立った岸で岩が白く道はない。36mあまりの所は岩の切れ目を足がかりにして、波の合間をみて通ることになる。新道が出来た後はこの道を使っていない。

＜略＞

ヒロウの山アイヌ・イシリキアイノに箱館での御目見のための手拭いかけをこの秋までに三つ作っておくように、帳役の半兵衛へ命令していた。ホロイヅミ乙名のミ子アンケロが、ホロイヅミからホロウまで案内に来る。彼には耳飾り（耳かね）をお礼に渡す約束をした。

- 一. ホロイヅミよりヒロウまで山道を通って二日、人足のアイヌ10人は、ヒロウにて米三升を渡す。

＜以下省略＞

「日鑑記」 文政十一年1821年

＜出典：日鑑記 解読研究第2集 厚岸町立教育研究所編＞

蝦夷三官寺（様似等渕院、伊達善光寺、厚岸国泰寺）の厚岸国泰寺へ赴任する住職の記録

1829年1月23日（旧暦：文政十一年十二月十八日）

一. 朝8時（辰之中）ごろ等渕院を出発、大門の駕籠まで等渕院の漸教が見送ってくれる。それからコトニで小休憩、ここまで等渕院役僧漸教が見送りのため来てくれる。また、同寺から茶菓子重の詰め合わせ等を贈っていただき、ここで漸教房は寺に帰られた。ホロマンベツ川で昼食、そこからブユマウ小休所、そこからアベヤキ川、そこから夜の7時（戌之上刻）頃ホロイヅミ会所に到着し、宿泊。今日は山道が特に難所であり、夜になってしまい、人足も骨を折ったので＜疲れたので＞酒代を与えた。

一. 金50匹＜25文で1匹＞シヤマニの人足31人へ

当所の請負人は高田屋金兵衛

1月24日（旧暦：十二月十九日）

今日は雨天なので当会所で逗留。

1月25日（旧暦：十二月廿日）

＜ホロイヅミ～サルル間、サルル～ヒロオ間でのオシラベツの記入に誤りがあるが、出典の表記をそのまま記述した。＞

一. 朝9時（辰之下刻）頃ホロイヅミ会所を駕籠で出発。ヲシラベツで昼食休憩、沼見峠にさしかかり、ここは東蝦夷地第一番の大難所である。そこからビタタヌンケ小休所になり、夜に入り明り（排灯）を用意し、そこからヲシラベツを渡り、そこからビボロ川を渡り、それからビロウ川渡り、しばらくして夜8時（戌之刻）頃サルト番屋に到着し、宿泊。1月26日（旧暦：十二月廿一日）

一. 日中雪が少し降り

一. 朝9時（辰之下刻）頃サルト番屋を駕籠で出発。ビタタヌンケで小休憩、それから昨日渡った川の下流になり、また今日も渡り、ヲシラベツになり、昼食休憩、それからビボロ川にて小休憩、それからビロウ川渡り、それから4時（申之下刻）頃ビロウ会所へ到着、宿泊。この場所の名はトカチといい、また今日

もよほど山坂が難所だったので、ホロイヅミからの人足は昨日今日と通じて骨折りだったので酒を左の通り与えた。

一 清酒2升 和人8人へ

一 同1升 役アイヌ3人へ

一 同8升 平アイヌ32人へ

この代金は会計2貫200文である。

当所の請負人は福嶋屋嘉七である。

＜以下省略＞

「蝦夷日誌」 松浦武四郎弘化二年（1845）

＜出典：松浦武四郎著 秋葉実翻刻・編 校訂 蝦夷日誌【一編】

北海道出版企画センター刊＞

ホロイヅミ、シヤマニから会所まで約23.9kmともいう、享和3年（1803）改め25.4kmとある、馬がいて引き継ぎ所であり、ここは砂浜である。運上屋の上は、平らな山が続き、峰が高くヒロウ越えの峠をへだてている。その土地は西南西（申酉）を向いてとても暖かいところである。もしこの辺を開拓すれば野菜並びに五穀（米、麦、粟、黍、豆）がよくできるだろう。しかし水が悪く、土地は樹木が多く、炭薪は自由に手に入る。幕府が管理する（公料）前は蛎崎藏人の領分であった。アイヌ小屋は10軒位あり、そのほか出稼ぎの小屋がある。

勤め番人は様似場所の支配人である。春秋2回見回りをする。非常に備え蔵、並びに弁天社のほか数蔵がある、運上屋は西向きで玄関と座敷が美しく建っている。勤め番人が上り下りに泊まる、風景がよく、船澗でないが、岸からおよそ100m位の所には11mにもなる所があり、船の碇泊によく、また碇泊杭（繩杭）が立っている。碇がかかる所はない。西南の風にはどうしようもない所である。よって荷役を積み次第出航する。

天保改め

幌泉御場所運上金

一金八（六）百8両 上納

請負人 函館内澗町
⊕ 福嶋屋嘉七

アイヌの小屋はこの近くには少ない、皆山に住んでいる人が多いと聞いている、運上屋の周りに茄子、稗、粟、大根、南瓜、いんげん豆類を植えている。

日本経緯42度05分 また26分

シヤマニまで 約24.9km 江戸まで 約1262.9km

文化9年申年改（1812年）

土産、こんぶ、干し粕、ヲカゞ粕、雑魚の油、魚油、にしんゞ粕、さめ志ん、
干し鮭、ふのり、猶（かわうそ）、そのほか海参（いりこ）、鹿皮、水豹皮
(アザラシ)、海馬（とど）、あぶらこ、カスベ、ホッケ、そのほか海草多し。

木村子虚日記

松前相去遠 路程廿日余 濤声動旅況 夷語喧群居 場秀不時
艸膳羞隔歲 魚偏雖嫌食 臭身臭亦如何

<旧暦：寛政10年6月10日（1799年）幌泉にて。松前を去ること遠く、旅の日程は20日余り、波の音（大小）により旅の状況を変動す。アイヌは急いで群がりいるも、場所は時間を問わず食草が豊富で、生肉とうまい味の食べ物、隔年に食べる魚あり、私はもっぱらその食物の臭いを嫌うが、彼らの体臭はどうしようもない。>

さて、海岸を600m位行くとシラリマナイ、ここには昆布取り小屋があり、小石の道でよい、山の方に木立があり、少し行くとニケフシ、そしてシュンケシナイ、小さな岩が出ている岬があり、まわってモンモロヨ、砂浜が少しありユルフル、小川があり、番屋が2軒ここにある、アイヌの小屋も3軒ある、この川は山上のユルフルという所から流れてきている。今は海岸の地名となっている。会所から約2kmに小休所があり、番人とアイヌ人が来てお茶を入れてくれる。これから山道、右は海岸通り、他に記録し、ここでは略する。

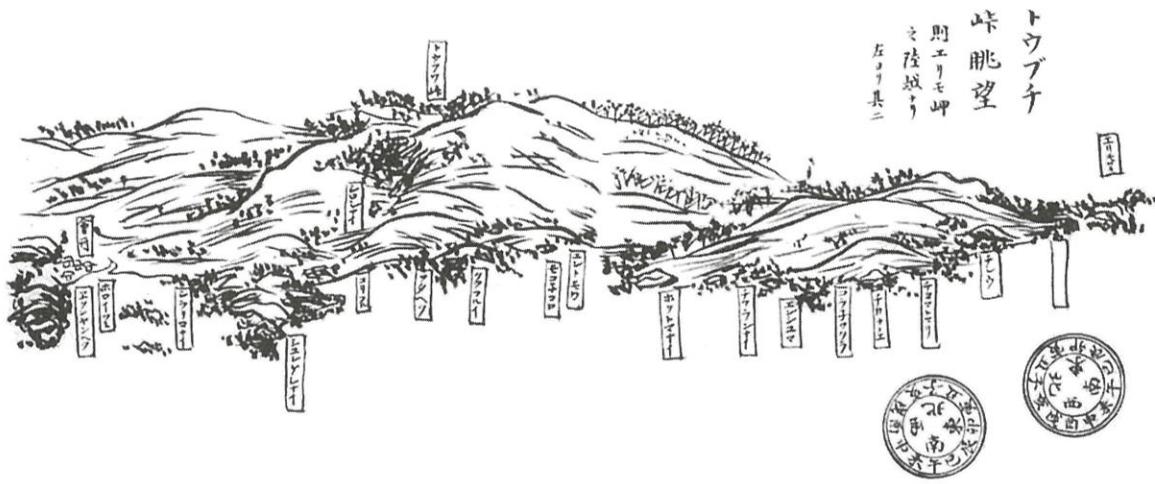
さて、これから山道、南岸は高い樹木が生い茂り、岩角が逆さまになっているような難所である、しばらく行ってケレフシ、しばらく行ってシロシナイ、少し峠を越えて沼があり、これをカムイトウという、ここに小休所があり、アイヌこの沼に神靈（カムイ）がいるという、よって見てはいけないという。まわって約5.9km位、四方は山が高く、青葉が茂り薄暗くもの寂しいところである、越えて、しばらく行って下る。ヲタベツ川があり、歩いて渡り、ここから下り坂になり（つま先下がり）東の海辺の方へ下り約5.9km、沢伝いに下りアフチに着く、ここは海岸から少し上である。小休所がある、昼食をここで食べる、番人とアイヌが出張してお茶を入れてくれる。すべてこの峠内をトウブチ峠といふ。

蝦夷地行程記

一. 会所元から	シラリヲマナイ	565m
一. シラリヲマナイから	ニケフシ	64m
一. ニケフシから	シュンケシナイ	500m
一. シュンケシナイから	ホンモヨロ	218m
一. ホンモヨロから	コルフル	545m
ここから陸路を行く道をします		
一. コルフルから	ケレフシ	1200m
一. ケレフシから	モセウシナイ	1526m
一. モセウシナイから	ヲタベツ	2398m
一. ヲタベツから	アフチ	5.9km

さて、この間海岸通りは、ここは旧暦七月の帰路の時は、船に乗り百人浜に着いた。その時海岸を眺望したままの様子を、ここでは逆に記して、本編を助けまた次に順路の距離は行程記に示したものである。コロフルを過ぎ海岸へ出て。

歌別は砂浜で川があり、約20mでクッフルイ石がある。モエ子コロ、大石の地名で、ほんの少し岬なっている。コンパス（渾發）で測ると490m位で、この間は石の浜である。エントモカ、ここは小さな岬になり、まわって約320mで、ホクトマナイ、小さな流れがあり、約454mで、ウケマシナイ、また岩石の浜で、約270mで、シユマウシ、岩石が立ち重なり、小さな流れがある、約490mで、ウエンコマナイ、同じように岩石がある、約270m位でチャラセナイ、小さな流れがある、また約220mで、ヲニタラツフ、ここから少し湾になり、約1.5kmを越えて、エンシヤニ岬である、岬をまわるとまた湾がある、約279m弱を越えて、リフンエレトモ、岩石の浜、山には樹木が多い、約270m強で、ヲリマツフ、岩の岬、小さな出た崎である。約950mで、シヤモサキ、この辺は大難所である。約350mでまた岩の崎を越えて、アブラコマ、この湾は団合船（津軽海峡を往来した30～100石位の運送船、100石=18トン）が碇泊するのによい、油子は江戸でアイナメという、したがって、この魚が多いと思われる、約450mで、チヨマトマリ、小さい湾になり、岩石で道がなく、小さな滝があり、船中からは良く見える、約1kmで、テシケ、岩石が続き、約430m歩いて、レツハモエ、出た岬、怪岩をまわって、また約650m行って、サンベワタラ、ここから丘を越えて、東の海辺のフラリモエへ行く道があるという。約2kmと聞く。また海岸を伝って行くと、エリモ岬、この岬は海中に突き出るのは1500m位である。汐が満潮になるときは隠れ、干潮になるときに現れる。エリモを訳すとネズミである、この岬を遠くから見た時は、ネズミのようだということから名づけられたか。船乗



<蝦夷日誌：市立函館図書館蔵>

りや船頭（船乗水主）たちは、みんな大変、ここは難所として沖に出て岬をかわす、またアイヌは、ここを通るときはイナウを削り、奉って通る。岩の前に石の小さな祠がある、この暗礁は南部尻矢崎のアシカリ嶋と同じようである。アイヌ人がこの海中の暗礁を指して、カモイエソという。訳して神の嶋である、ここから針（羅針盤）をたて方向（干支）を記録して行く、さて、この海岸の距離を測るといつても、船中からコンパスで測ることになったので、その相違はあるだろうがゆるしてほしい。さて船頭からこの岬を中心として、いろいろな方角と距離を記録する。

針位

北（子の方）峠の下アツツ小休所、北北西（丑）クスリ場所、北東（寅）アツケシ約157km、南南東（辰巳午）大洋、南南西（未）南部尻矢、約275km。西南西（申）恵山、約295km。西（酉）エトモ、約275km、西北西（戌）ユーフツ、北北西（亥）シヤマニ58.9km等、聞いたまま記録した。また度数のことは伊能忠敬の書によると、ここ西洋人のその説を揚げる。

野作雑記（1785年オランダ人ニコラス・ウイッセン著を、文化6年（1809年）幕府天万方馬場貞由が訳したもの）

野作（えぞ）の沿岸を巡ると、北緯42度から43度のところまでは、海底の深さ総て36mあり、碇泊するに良い。貞由が考えるには、東蝦夷地エリモ岬近海からコンフィの辺の海のことをいい、ここがだいたいこの度数にあたる。

蝦夷地行程記

一. コルフルから	ヲタベツヘ	327m
一. ヲタベツから	エントモカヘ	545m
一. エントモカから	ウケマスナイヘ	872m
一. ウケマスナイから	シユマウスヘ	218m
一. シユマウスから	サカキシヘ	327m
一. サカキシから	ヲニタラフヘ	327m
一. ヲニタラフ	エントモヘ	218m
一. エントモから	ヤンケベツヘ	109m
一. ヤンケベツから	ヲシヨロスケヘ	436m
一. ヲシヨロスケから	アブラコマヘ	327m
一. アブラコマから	チヨトマリヘ	327m
一. チヨトマリから	テシケヘ	1000m
一. テシケから	イリモサキヘ	654m

さて、エリモサキをまわって東海岸に出る、この間約600m強、岩石でそして険しい道である。しかし西海岸よりはよい。図は他に記す。ここにシヤマンベウタという白い砂がある。シヤマンベはヒラメのことである。その形に似ているのでその名になる。また、これから奥の方を百人浜という。その理由はなんであろうか、アイヌがいうには、昔ここで百人が溺死したため名づけられたという。また、ちなみに記述すると

三国通覧捕く工藤平助著の赤蝦夷風説考を底本にして、天明6年（1786年）林子平著三国通覧図説の補遺らしくあらわしたものといわれる。「赤蝦夷風説考」上巻にも類似文あり。>百人浜はエリモというところにあり。古来から金掘りたちが諸国から入ってきた所である。アイヌの蜂起（1669）の時に盗掘の者100人を捕え、松前家によりその地にておいて死刑した。したがって、その名を百人浜という。このところも金がとても多いといい伝わっている等ちなみに記述しておく。

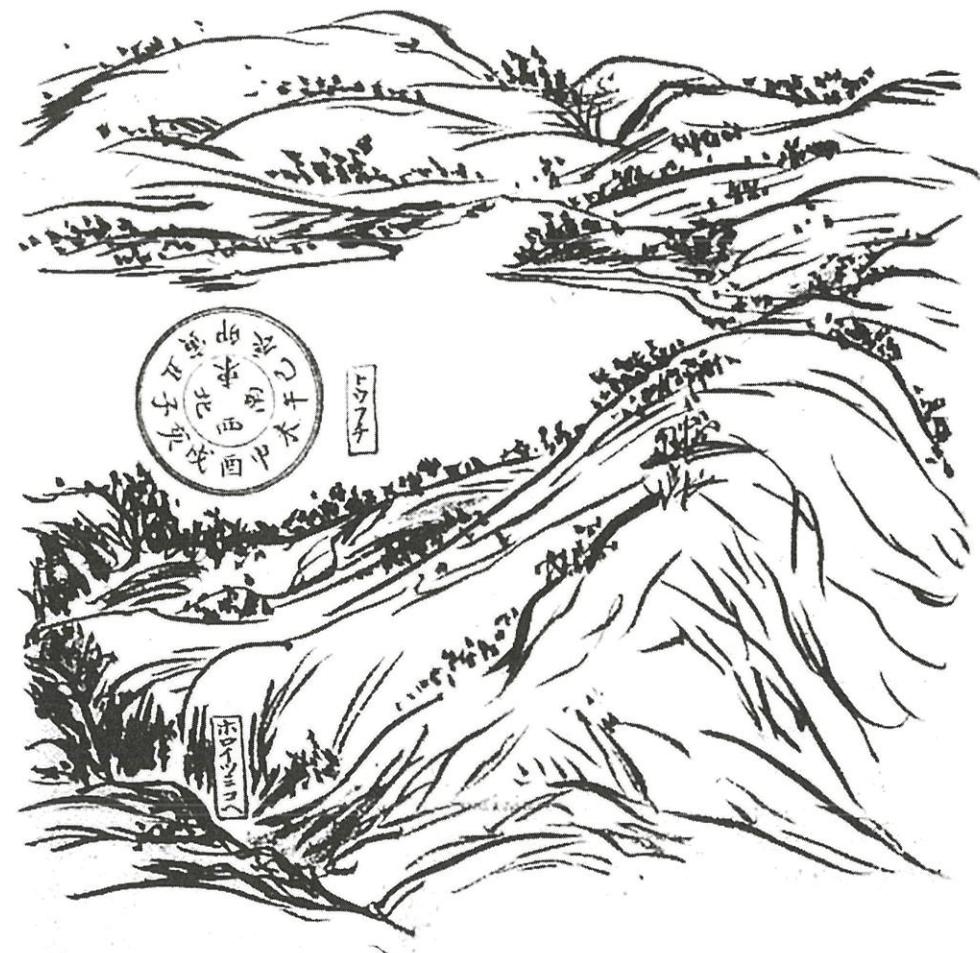
フラリモエ、ここから約1.5kmで、ヲコシ、小石浜である。約300m弱でニヨモエ、ここに小さ流れあがある。また約300m強で、ヲコヘマウシ、岩の岬があり、丘には樹木多し。1250mで、シユマウシ、大きい岩石の岬である。アイヌ出稼ぎ小屋がある。490m弱で、ホロヲリベツ、小川がある。この沢は広い、約2kmで、トウベツ、この川は峠の湖水から流れて来る。この沢の奥にアイヌ小屋がある。1145m弱で、（百人浜）キシケ、同じように小さな流れがある。1360mで、ヲトベ、小さな流れがある。砂浜で道は良いと思われる。小さな流れがある。越えて、1400m行くと、アフツ小休所に着く。

蝦夷行程記

一. エリモサキから	シヤマンベウタへ	1100m
一. シヤマンベウタから	フラリモイヘ	436m
一. フラリモイから	ヲコシヘ	218m
一. ヲコシから	ニヨムイヘ	327m
一. ニヨムイから	ヲコエマウスヘ	654m
一. ヲコエマウスから	シユマウスヘ	1308m
一. シユマウスから	トワンベツヘ	1308m
一. トワンベツから	アフチヘ	4500m

等である。ここで本道と出合う。

國之峠チフヲト (帝)



<蝦夷日誌：市立函館図書館蔵>

さて、こここの昼所からサルゝ番屋までの海岸の道を引き続き記述すると、アツツからしばらく行くと、小さな流れがある。そこを越えて砂道を行くと岩の岬がある。ここは上下ともに通りやすい。丘の方を少しまわって、チヒランソヤ、小さな湾がある。シ子ライヌ、そして、ルエランシヤウヤ、そして岩の岬の上を通り行き小さな流れを越えると、シトマベツ、そこを越え、シヤウヤ、またここに岩の岬がある。本道の山道からここへ下がる道がある。風雨の荒い時はここから上に登る。小休所がある。番屋、アイヌの小屋がある。そこを越えて岩の岬を越え、トセツフ、この間は浜の道はない。ここから左は浜の道で大変悪い。そこを越えると陸の道はよい。私はアイヌ1人を連れて、海岸を行った。岩の道をまわり、ニヨムイ、そして岩の間に滝がある。ホンフベツ、並んで、ホロフンベツ、という。サクハイ、岩石と岸壁の間に滝があり、景色がいい。風波の時はなかなか行きにくい。ウトマエウシ、大岩で出ている岬である。まわって少し内に入り、ウエンベツ、風のあるときは濡れて悪いということか。そして、トリフタフナイ、岩石が続いている。まわって砂の道を少し行き、ヲムコノエキ、砂浜。まわってすぐに、サルゝサキ、そして、チフヤニ、ここもまた砂浜をまわってすぐに番屋に着く。

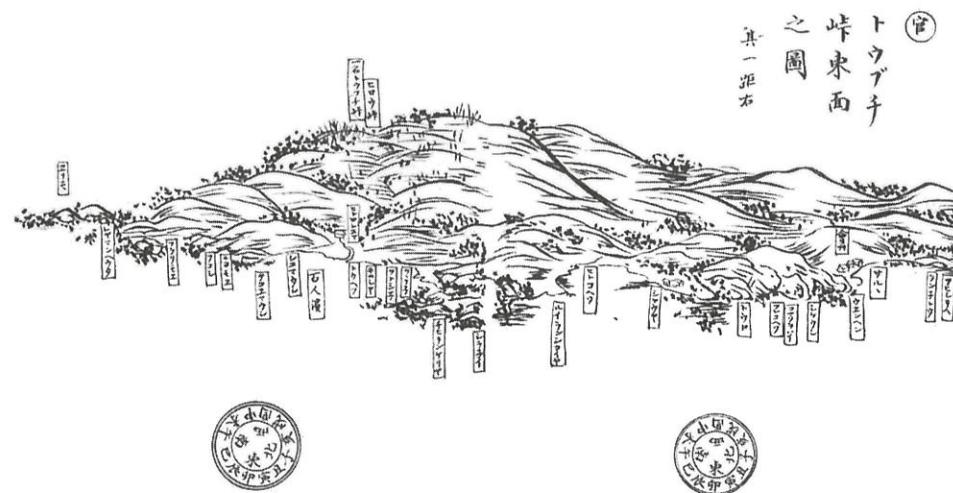
蝦夷行程記

一. アチから	チヒラシヤウヤへ	109m
一. チヒラシヤウヤから	ルエランシヤウヤへ	872m
一. ルイランシヤウヤから	シトマベツへ	545m

一. シトマベツから	シヤウヤへ	654m
一. シヤウヤから	トセフへ	2398m
一. トセフから	ニヨムイへ	1090m
一. ニヨムイから	サクハイへ	654m
一. サクハイから	ウトマエニへ	1090m
一. ウトマエニから	ウエンベツへ	1417m
一. ウエンベツから	ヲムコノサキへ	2180m
一. ヲムコノサキから	サルゝサキへ	1635m
一. サルゝサキから	チフヤニへ	436m
一. チフヤニから	番屋へ	327m

海岸の距離数は約26.5kmである。

さてまたアチよりサルゝへ陸の道は約11.8kmである。簡単に書くと、この道は文化（1804～1818年）前は多くの人が通行したけれども、文化年間（当時）は通る者がなかったという。野道を上って約2kmでシトマベツ、小川があり、歩いて渡る。越してまた野道を約3.9kmで、トヨニ、ここは岬である。上に湖1つある。この川は流れて海岸の所々に落ちる。約3.9km下って、サルゝ川、川幅は約27m、アイヌ小屋があったと聞く。しかし、今は無い。しばらくしてシヤテクサルゝ、そしてすぐノホリサルゝ、小さな川がある。越えてまた少し下り、番屋元に着く。しかし、こ



<蝦夷日誌：市立函館図書館蔵>

の道は聞いたそのままを記録した。間違いがあつても許していただきたい。

蝦夷行程記

一. アフチから	シトマベツへ	1962m
一. シトマベツから	トヨニヘ	3. 927km
一. トヨニから	サルム川へ	3. 927km
一. サルム川から	シヤテクサルムへ	2616m
一. シヤテクサルムから	ノホリサルムへ	109m
一. ノホリサルムから	サルムへ	1199m

等である

サルム、ホロイヅミ会所から26.4km。享和3年（1803年）改め26.3kmとなる。宿で用意してある馬で上り下りの引継ぎをする。ここから東海岸に向き岩の出ている岬、沢合の約1090mの平坦な土地である。しかも山の方は樹木が多い。また土質は大変よく、野菜の生育はよいものと思われる。もっとも「シャマニ」「ウラカワ」辺よりは大分寒い。水が悪い。番屋があり。ホロイヅミへ用務のため出ている。アイヌ人小屋が7～8軒あり。上り下りの行き来の宿泊所である。蔵が数棟ある。弁天社あり。勤番はクスリ詰合の支配である。船澗、海岸から約500mに停泊する。しかも、西北の風にもっともよい。碇がかかるところがある。500～600石（90トン～108トン）の船はみな岸の近くまで来る。備米蔵がある。元蛎崎蔵人の領分である。

サルム、訳すると（サルムにて、昔この山中にツルが多く住んでいたため名づけられた。サルムはツルのことである）＜他に、サル・オル・オ・ペツ、ヨシ原の中にある川が訛ったとの説が有力。＞また会所の前に川がある。この上の沼から流れてくる。川は平らな船でアイヌたちが渡している。土産はホロイヅミの部分に記録したのでここでは略する。しかし概要は昆布、干しナマコ（いりこ）、サケ、マス、カスベ、アブラコ、干しタラ、数の子、ニシン、椎茸等である。その他雑魚多いが省略する。

日本経緯度実測 江戸まで約1283km

1. 北緯42度07分 同（北）23分

等である。

砂浜、しばらく行くと、ヲン子トウ、ここはこの川上にある地名、海岸の地名になったものである。ヲン子は大、トウは沼である。小さな岩の岬をまわってヲヒタシヘ、海岸の道はよい。丘は平地。所々立ち木の原がある。小川が所々にある。越えて、ビタムンケ、ここは砂浜。境に杭が立っている。ここから西ホロイヅミ領、

東トカチ領と書いてある。ホロイヅミ領の西から東は、約41.2kmとある。川があり、川幅は約9m、この川が境目である。この辺の風景は蝦夷日誌9巻の最初に記録する。両方を見ていただきたい。

蝦夷地行程記

一. サルム会所から	ビタムンケへ	3. 927km
------------	--------	----------

等である。蝦夷日誌9巻目に移り見ていただきたい。

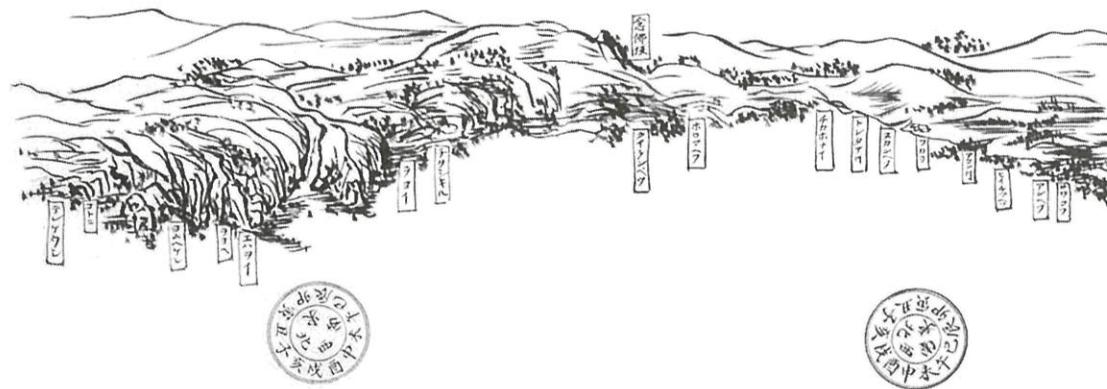
蝦夷日誌 卷之九

五十瀬 松浦 弘著

この巻、8巻に続き見てください。またクスリから海と陸の道のところは、8巻に詳しく書いているので省略する。

境杭、前のビタムンケの訳は瓢箪く瓠：ひさご：ふくべ、瓢箪、この日誌にだけに見る地名である。ヌンケフは形である。ここまで砂浜で磯の道はない。もつとも船中からこの崎は奇岩や怪岩が重なりあっていて、また細い滝が数本見える。私は船の中から見た。風景はよい。これより岩石の崎の上をまわって行く、しばらく行くと左右に別れ道があり、トモチクシ、この間は海岸に道はない。崎の上を越える、アイヌ人は皆この道を通る。私はここから下り海岸に出る。この辺は御影石が多い。そして、レフシベ、小さな滝が所々にあって景色はよい。岩石が険しくそびえたつ岩の端を通る。まわって、チヨマナイ、左右に岩石の小さな沢がある。越えて、タン子ショ、ここは大難所。岩伝いに歩いて行くときは、ここで波をかぶる。この辺の海岸はとても深い。ナマコ、フノリが多い。そして、ソウウシベ、ここはまた岩の岬。ここから湾になり、険しくそびえたつ岬にあたる白波、実に目を驚かせる。まわって、チカフンウシ、岩の岬である。エコアエウタ、小さな砂浜がある。越えて、また少し内側に入ると、ルベシベシ、といふ川がある。ここに番屋がある。アイヌ小屋がある。ここから砂浜である。漁小屋がある。1090m位行き、ヲシラベツフト、岩石と転太石の川があり、清流が流れている。漁小屋がある。ここから砂浜を218m行く、内海のようなところに出る。ヲリコマナイ、ここでまた山道と出合う。漁小屋で同行の者は、皆、私がここに来るのを待っていて、ようやくようやく出発する。

國之路險ルキシリチ師



蝦夷地行程記

一. ビタゝヌンケから	トムチクシへ	2100m
一. トムチクシから	タン子ソウへ	327m
一. タン子ソウから	ルベシベツへ	872m
一. ルベシベツから	ヲシラベツフト	1090m
一. ヲシラベツフトから 本道でヲリコマナイ		218m

<略>

さて、また境 ビタゝヌンケフから山道を来る道筋を聞いたまま記録する。ヒナイ、山道をまわって、ヲクチシ、ここは木立が少しあるという。平らな野原を行つて、ヲシラベツ、小川がある。通行人の昼休所がある。約1900m下つて、ヲリコマナイ、へ出る

蝦夷地行程記

一. ヒタゝヌンケフ陸道から	ヒナイ	2290m
一. ヒナイから	ヲクチシ	3.9km
一. ヲクチシから	ヲシラベツ	1962m
一. ヲシラベツから	ヲリコマナイ	1962m
等である。		

<蝦夷日誌：市立函館図書館蔵>

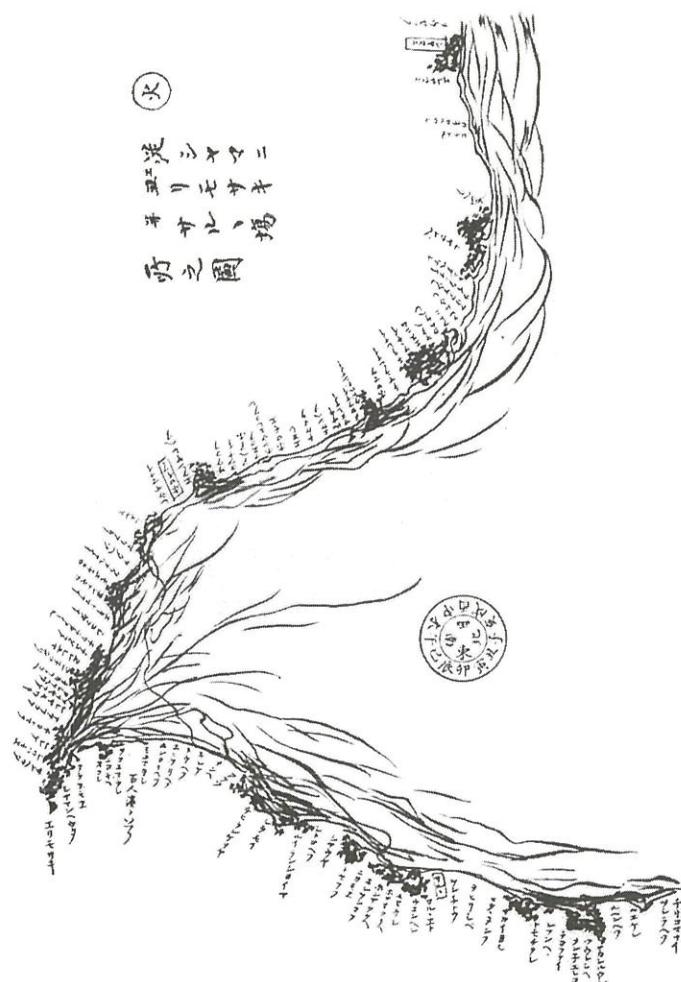
さて、ここの漁小屋にしばらく休んだので、二人のアイヌは船で海岸を270m位漕ぎ出て、ナマコをヤスでたくさん突いてきた。また、1匹の尾の形がフグ（海豚）に似ている変わった形をしている魚を獲ってきた。この名を尋ねるとキナホウ<マシボウ>という。キナホウは気が抜けたものという意味、和人（日本人）の言葉では馬鹿である。さて、その持ってきた腹を切って腸を取り出し、その背にイナウを刺して放した。その腹を切るにもイナウを刺すにもすこしも驚かず、また海中に入ると、アイヌが言うには「決してこの魚は死ぬことがない。そのため大きさが5.4m位にもなる魚が獲れた時は、腹の中からイナウが2本も3本も出ることがある。」と、ここにその変わった魚のことを記録する。

蝦夷草紙（最上徳内著、寛政二年1790）

キナホウ。形はアンコウのようで、アイヌはこの魚を獲り、腹から腸を取り、腹の中にイナウを入れてまた海に放す。

さて、ここから、ヲリコマナイから、海も陸も道はよいけれど、みんなが海岸を通るので、カムエヲウシ、岩の岬があり、ここをまわって2kmで、ヲナヲベツ、川があり、歩いて渡る。上流に滝がある。みんな岩の磯である。越えてまた2kmほど行くとアイヌ小屋があり、ヒヲロ、小川があり、小休所がある。ここから山道に入つて難所もないと聞く。また、海岸を通るにも干潮の時はよいと聞く。しかし満ちている時は通るのが難しいと聞く。通行人はみんな上通りへ、すぐ道に出れるようだが、私はここからアイヌの船を頼んで海岸の風景などを見物して行くことにし、船

を押し出した。幕府の管理前はここを、ヒロウとサルトの境にしようとしたが、今は前述したビタヌンケフを境としている。さて、船で出て小さな岩の岬をまわり、ヤロウの滝、幕府管理前は名もなかったが、幕府の管理役人がこの名をつけた。高さ5.8m位である。越えてコタロクシ、岩は険しい。小さな滝がある。岩の磯、船を近づけるのは難しい。まわって、エヒニマエ、同じように岩の磯、その風景はさまざまに目を驚かせる。まわって、フンベヲマナイ、ここには小川があり、小さな沢がある。ここからヒロウへ約820m、小さな湾へ船を漕ぎ入れる。まわって砂浜に着



＜蝦夷日誌：市立函館図書館蔵＞

く。エチコ、砂浜で小川がある。ここから平地。会所元まで近い。しばらくすると本道と出合う。

蝦夷行程記

一. ヲリコマナイから	ヲナウヘツヘ	1853m
一. ヲナウベツから	ヒホロヘ	2071m
一. ヒホロから	山道 ヒロウヘ	3.9km
	海岸 フンベマモエヘ	1635m
一. フンベマモエから	ヒロウ河口（川尻）へ	872m
	ビロウ、サルト会所から23.6km位	<以下、省略>

「蝦夷紀行」忠藏（尾張屋番屋）嘉永七年（1854）

＜出典：成田修一編著 沙羅書房刊＞

嘉永七年三月、日米親和条約を締結、開国を余儀なくされた幕府は、ロシア対策にも追われ、目付・堀利熙、村垣範正を首班とする大規模な調査隊を樺太まで派遣した。村垣の従者として随行した尾張屋番頭の日記。＜森資料＞

1854年9月7日（旧暦：嘉永七年閏七月十五日）夕方天気、5km、サルト、福嶋屋嘉七の持ち場所、番屋に泊る。預り人は小三郎。合計23.6km。間口27m、奥行10.9m、土蔵1ヶ所、物置小屋が多い、ここは通行の時に使い、漁はない、ここからまた山道（猿留山道）は難所である。 サルトより

9月8日（旧暦：七月十六日）曇、4.6kmでカルスコタン、腰掛番屋で小休憩。ここサルト川は川幅27mで歩いて渡る。小川があり合計2つの瀬があり、マスの漁がたくさんある。ここから沼見峠へ登り、3.9km位あり、坂に休息所が2ヶ所あり、極めて大変難渋な山道で、峠の峰から、周囲500mほどの池があり、水は本当に清い。この池へ昔義経公が入水したと人々は言い伝えている。この池へ石を打込むと、突然に水面が大荒れになるという。ここにはシカがたくさんいるので鉄砲を2度撃つたが、すぐに随分登り、闇夜のようになり2m先もしっかりと見えない、本当に悪い峠である。2～3人で通るときは昼間でも化け物や妖怪などにしばしば出会うという。<カルスコタン>より3.9km。トヨニ、野立御休所、ここは峠を登りつめた峰である。この辺シカがおびただしく住んでいる。山の坂は難所の道である。同所

<トヨニ>より4km。アブチ、腰掛け番屋があり休憩。この山の出岬のエレモンの岬という所が7.9km位突き出ているという所に昆布小屋があるという。アブチより5.2kmでヲタベツ、野立御休所、この間に小川が3つあり歩いて渡る、マスの漁が少しある。ヲタベツより、3.9km、モセウスナ井、腰掛け番屋があり休憩、ここはアイヌの家が10軒ありマスが獲れる。ここから100mほど山を行って下って海岸通り、モセウスナ井より

9月8日（旧暦：七月十六日）3.9km、ホロイヅミ、福嶋屋嘉七の持ち場所、番屋に泊まる。支配人は善吉。合計26.8km。運上金は630両、間口45m、奥行15.5m、板土蔵8軒に9m位のものが4ヶ所あり、物置13ヶ所、右の少し高い所に2.7m四方の住吉大明神と弁才天の2社があり、左の小高い所に稻荷大明神社があり、土地はよいところである。ここは春にタラ、フノリの漁がよく、旧暦の四・五・六月はイワシ漁、旧暦六月土用の入から、旧暦九月中旬まで昆布がおびただしく獲れる場所である。昆布は4000貫目で石高とする。

「協和私役」　窪田子藏 安政三年（1856）

<出典：高倉新一郎編・三一書房、森資料>

老中・堀田正睦（佐倉藩主）が蝦夷地調査のために派遣した窪田子藏の道中日記。

1856年9月28日（旧暦：安政三年8月晦日）サルトを出発する。100歩少し歩くとうっそうとした雑木の中に入る。言うところによると、ここは前に番屋のあった所という。寛政時代の幕府が直轄の時、この地に勤務する南部の藩士100人以上が山崩れのために圧死した。あるいは風土病（瘴瘧・しょうこう）にかかり水腫病のため死んだ。怨恨の思いが散らずたいへん不思議な気持ちがする。よってここを去り、今の番屋に移る。その墓はこの林中に葬られた。一石を立て今もある。サルト川を右に渡り行くこと3.9km、サルト川を左に渡る。カルシコタンで休憩。サルト川は、その前を流れている。水の流れる音がやかましい。サルト川は水中に多くの石がある。大きな石、小さな石が混じっている。このために水の流れる音がおもいかけず大きい。これより山に上がる。サルト嶺という。羊腸九折で登るのはとても急だ。道はたいてい北から南へ登る。沢の水音は次第に遠くなる。すでに水の音は我々の足の下から聞こえる。まさしく山に上がることになる。まわって渓谷の上に出た。山の上に小沼があり、小池のようだ。水の色は蒼黒<あおみどり色に黒く>、

ほんの少しの波が水面に皺をつくっている。山頂から直下数十丈、道を右にかわれば、左は大海である。蒼々渺々<そうそうびょうびょう・あおあおとかすかにちいさく>帆船が一つ海上に見える。沼は道の右にあり西にあたる。道は南に向かう。これをトヨニという。この山の最高峰である。山の上に木はない。細い草があり黄色くなっている。この日は南風が吹き、ちぎれた雲が四方に散らばり、風は益々急になり雲の陰が山上をはしる。馬の上からこれを望めば大きな走馬灯を見ているようだ。ここから山を下り3.9kmで、アブチという。昼食。アブチより南にエリモの岬を望む。エリモ山はみすぼらしい。ここから15.6km、エリモの手前を百人浜という。ここはまた南部の藩士100人が溺死したところから名を付けたという。アビチより林中を行く。シマリス（縞鼠）を見る。アイヌが捕まえようとする。遠くに逃げない。しかし、ついには捕まらなかつた。シマリスは全身の毛が銀色でとても光る。背中に黒い線がある。縞模様の衣を被っているようだ。ゆえにシマリスという。約8kmでモロラセナイに着き休憩。ここより高原で林木はない。野原の中にシカが多い。シカが山中に遊ぶのも多く、これを数百歩の外側に見る。すぐに海岸に出る。コロフルという。海岸のいたるところにコンブがある。漁舎がとても多い。みんな国人<和人>の出稼ぎに来ているものである。海岸を2.2kmほど行ってホロイヅミに至り、宿泊する。ホロイヅミは東蝦夷地。漁が多い所、昆布が多い。また野生の馬が多い。毎年30頭以上を産み、多い時は1,000頭になる。東蝦夷地の中心より馬が多く、人も多い。しかし、漁業はすくない。西蝦夷地は漁が多くて人が少なく、馬も少ない。宗谷の広いところにも馬を育てているが40頭あまりにすぎない。東蝦夷地は馬が多い所は数百頭もいて、数十頭に減ったこともない。しかし、未だ1000頭を越えるところもない。おそらく、土地の肥えているところとやせているところがある、野草はおいしく（郊原楚草の甘美なる）自然は馬に適するだろう。この間新しく牧場をつくり、その仕事は第一に臼の牧場（臼牧）のようにし、また馬を害する猛獣を駆逐すべきである。オス馬をたくさん持っている者、メスを争いオス馬が闘死し、メス馬あるいは胎児を傷つける。この1000頭のうち必ず500頭オス馬である。500頭のオス馬を荷役や農業のために買い散らし、その収益を上げた者がわずか数十頭を飼育すれば、利益を得ること数千金になるが、良い馬はこれより多くは産まれない。ホロイヅミに馬が多いことは既に蝦夷地の最高である。しかしアイヌは少ない。常に人をトカチから借りて漁をしている。トカチは人が多くて漁が少ない。人をホロイヅミに貸し、漁場をホロイヅミに借りる。また馬を借りること50頭、トカチの馬は百数十頭いるが、瘦せていて疲れやすい。物を背負って行くと倒れる。ホロイヅミの馬は肥えて元気でよく走る。この日サルトを出発する。みんな馬を雇ってサルトの危険な道を越えようとする。馬銭は5割増しの料金を取ろう

とする。みんなが言うには、馬は野飼いの馬で、一桶の餌も会所が飼育しているものではない。馬夫はアイヌである。また一銭の駄賃を与えるものではない。1000頭の馬を更に更にその用に使えば、馬は苦労せず、会所もまた損はない。3.9km40文、これはすでに重んじるべきである。なお5割増しの料金を取ろうとする。悪賢い商いで利益を得ようとするのは末永くは続かない。そして、みんなは馬を断り乗らなかつたが、私は足が弱いので馬に頼らなければならず、ついに一人馬に乗った。馬は肥えて元気で力強い。サルム山道の危険を感じなかつた。

この地形、エリモの岬は会所の東南5.9kmに出ている。東南に海があり、西北には山を背負っている。暖かい。ここから気候は一変してトカチ、クスリに比べることができない。トカチ以北は厳冬に雪1.5~1.8m、一丈を越える。ここは積雪は30cmを越えると大雪とする。蝦夷地の新しい園を開こうとするのはどこでもみんな同じである。

<以下省略>

「蝦夷行程記」 阿部喜任 安政三年(1856)

<出典：えりも町史>

1856年

母衣泉、サルムへ26.4km、

運上屋1軒、家40軒あまり、漁小屋120~130軒、馬100頭あまり。船の港（船澗）は西向きで港の中は暗礁が多い、港の形はよいが、碇泊するには大変危険である。産物はサケ、タラ、イワシ、青魚、コンブ、海獣、海草の類が多い。山中には、シカ、クマ、トドマツ、その他の雑樹が多い。岩の岬を少し行くとユルフル、小川がある。ここから左、3.9km位上がって、モセウスナイ小休所がある。7.9kmほどアフチ昼夜所、ここから坂道で難所である。トヨニ峠である、上に沼があり、少し行くとサルム川小休所、ノホリサルム川がある。

ユルフルから海辺通りは岩の磯で大難所である。ヲタベツ川があり、エントモア漁小屋、シユマウス漁小屋、エントモ漁小屋、アフラコマ漁小屋には500石程の船が入れる湾（船澗）があり、ここから大岩岬を通ってエリモサキ、これが第一の岬である。北東方向へ通つてヲコシ漁小屋がある。シヤウヤ、この辺を百人浜という、漁小屋がある。エリモサキは北緯42度、出崎を北へ通りシヤウヤ、トウフツの峠を越えてサルムへ出る。ここから東向きの海岸である。エリモサキからシヤマニへ66.8km、ヲツナイへ117.8km、アツケシへ直線（鳥道）で164.9kmという。

佐留々、ビロウへ23.6km。

大番屋、人家がある。船は番屋下につなぐ。港の形はないけれど、山陰になる所がいい、浜通りはヒタタヌンケ川があり、幅10m、海岸通りは大難所である。トムチクシは大岩の磯である、タン子リウ、ルベシベツ川があり、漁小屋がある、ヲシラヘツフトに小川があり、漁小屋がある。陸通りヒナイの小川を渡つてヲクチシ、ヲシラヘツに小川があり、ここでまた道一つになる。

猿留山道のコース（図参照）

ホロイズミ～山道入口・コロップ～ヲタベツ～
ショウヤ山中～沼見峠（トウブチ峠）～カルシコタン～サルル

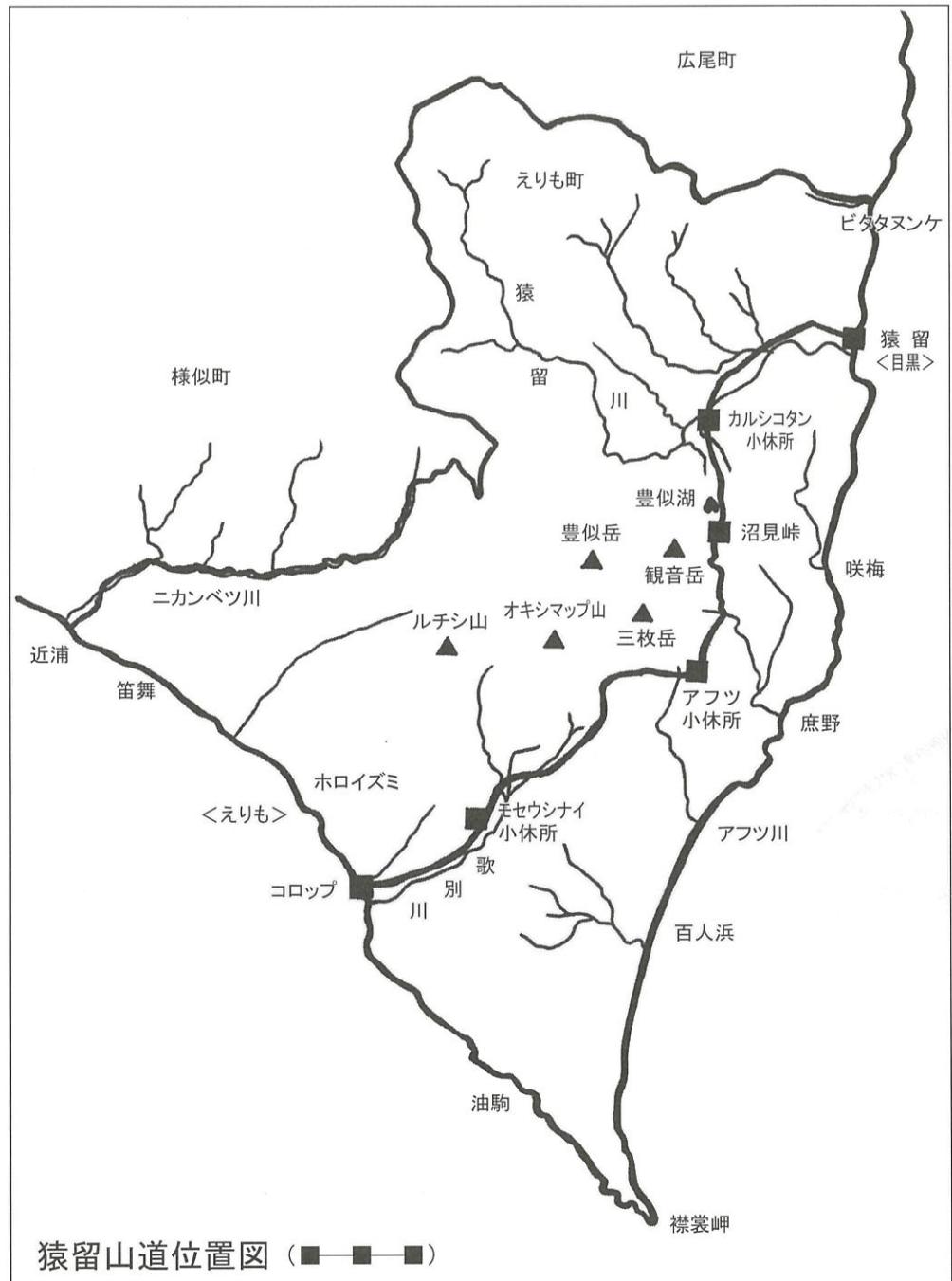
現在、猿留山道のルートの現状は以下のとおりです。

えりも（ホロイズミ）	
国道336号線	
コロップ	
国道336号線	
旧肉牛牧場	
えりも町道・林道	
庶野山中	
林道・山道（未整備）	
ガロウの川	
山道	

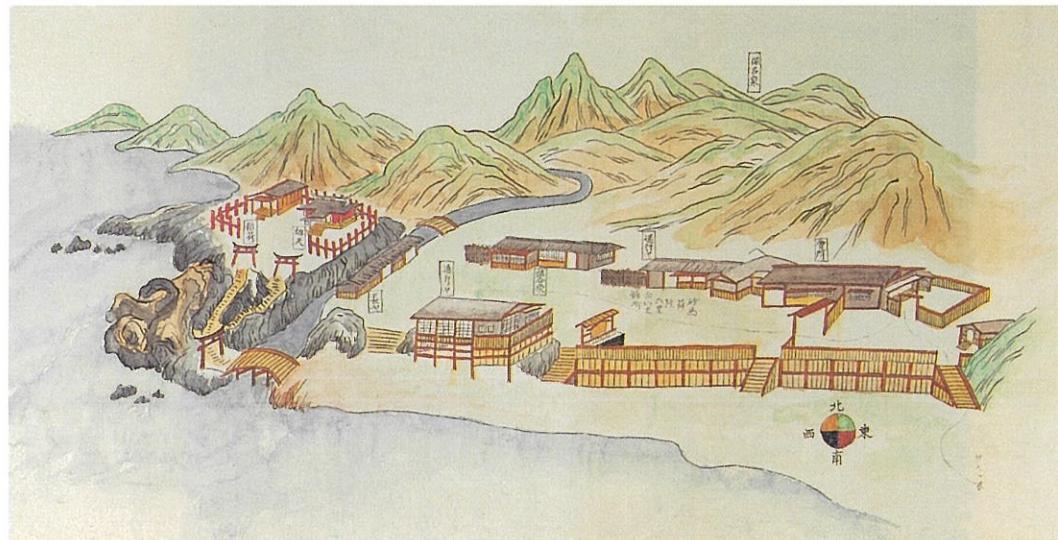
342m地点	
山道	
沼見峠	
山道（未整備）	
カルシコタン	
えりも町道・林道	
目黒（猿留）	

猿留山道を歩く時の注意事項

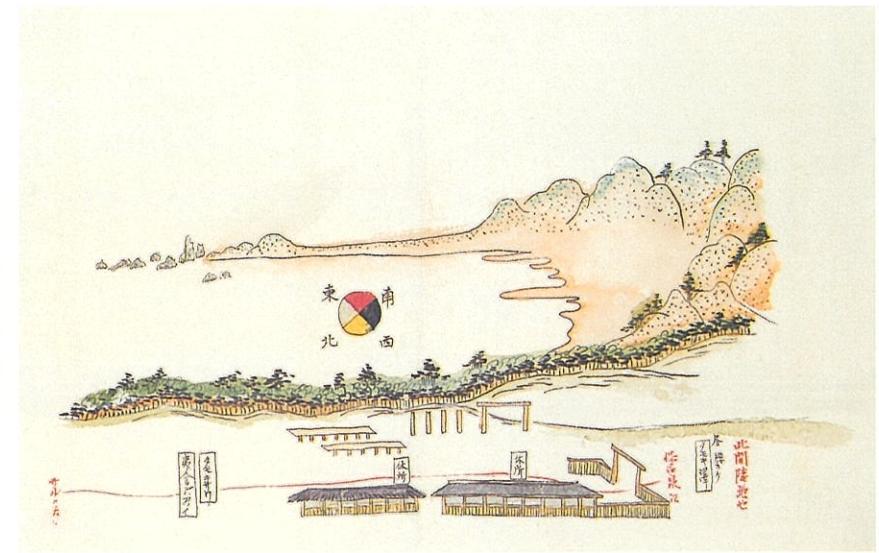
- 1 > 猿留山道は「日高山脈襟裳国定公園」内に位置しています。みだりに野生動植物を採取しないこと。
- 2 > 北海道有林内であるので、入林届を提出（記入）すること。
- 3 > 喫煙者は携行灰皿を持参し、火の元、タバコの火の後始末には特に注意すること。
- 4 > 案内標識は未整備なので、必ず地形図を持参し、安全確認をすること。
- 5 > 林道にはゲートが設けられています。ゲートのカギについては、各管理者に問い合わせ、走行する場合は安全走行を尊守すること。
- 6 > スズメバチ、ヒグマから身を守るために、ゴミは必ず持ち帰り、鈴などのヒグマよけを身につけること。
- 7 > 山歩きは、自己責任において行動すること。



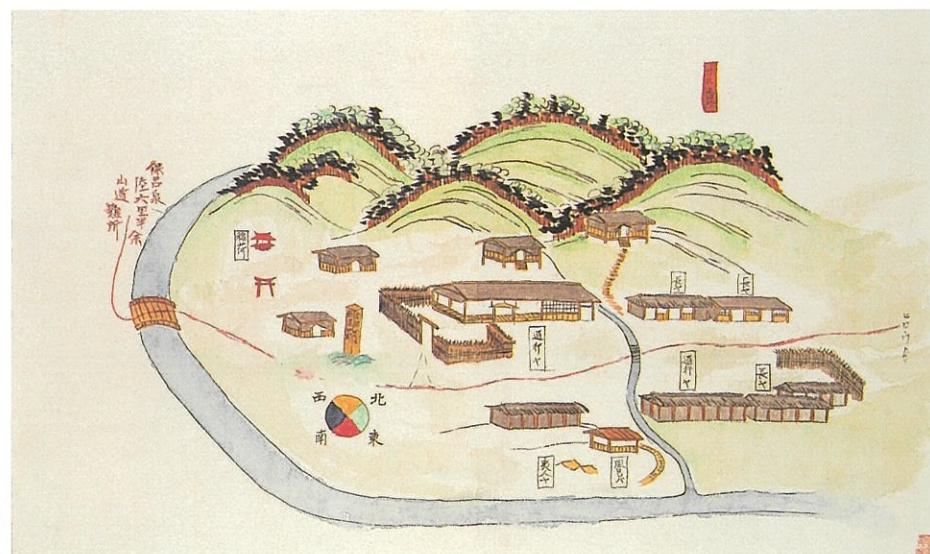
横山隆福・東蝦夷地より国後へ陸地道中絵図 (文化六年 1809年 市立函館図書館蔵)



保呂泉会所



アフチ小休所

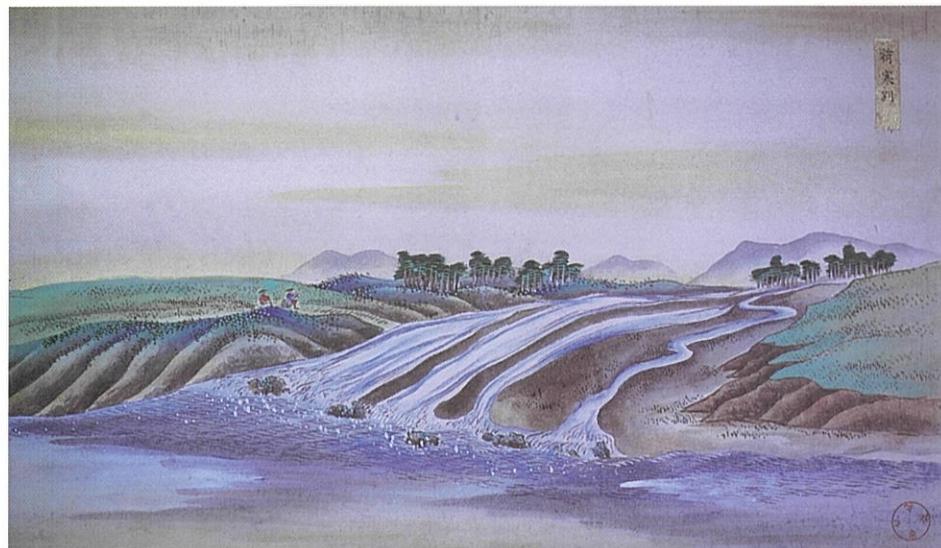


サル(ル)番屋

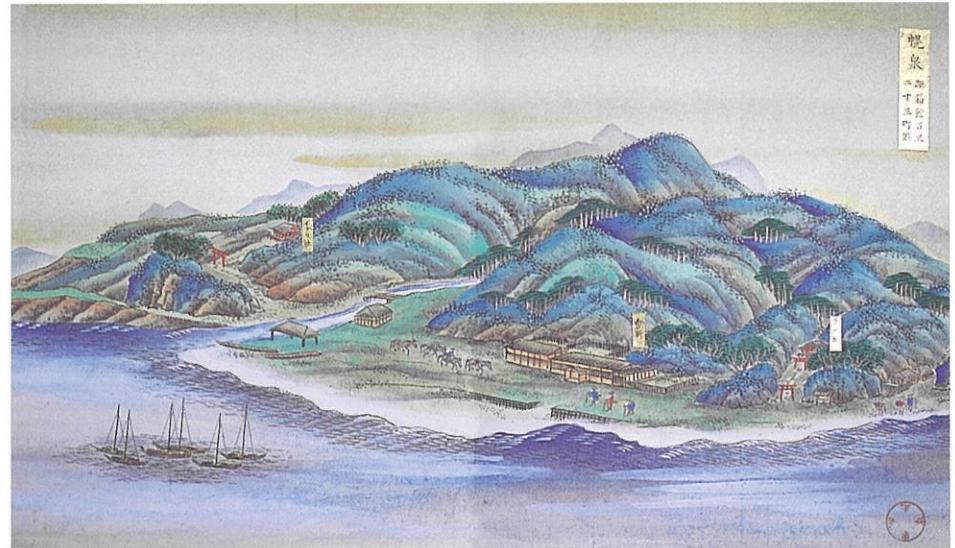


ヒタシソヌンケコヤスミ所

目賀田帶刀・北海道歴検図（安政六年頃 1859年頃 北海道大学附属図書館北方資料室蔵）



荷寒別



幌泉（距箱館百里二十三町餘）

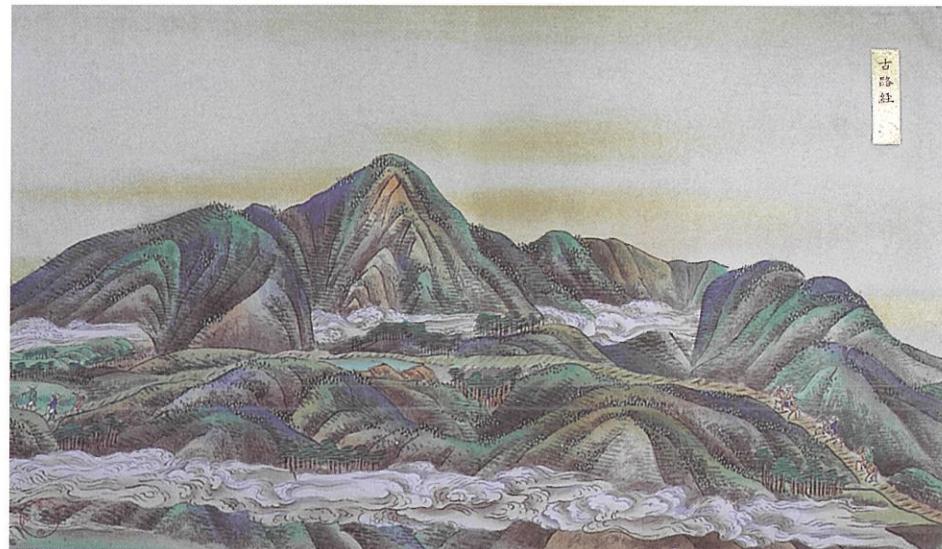


小田別（午廿分、トワベツ山、午六分、撰藻岬、小休所）

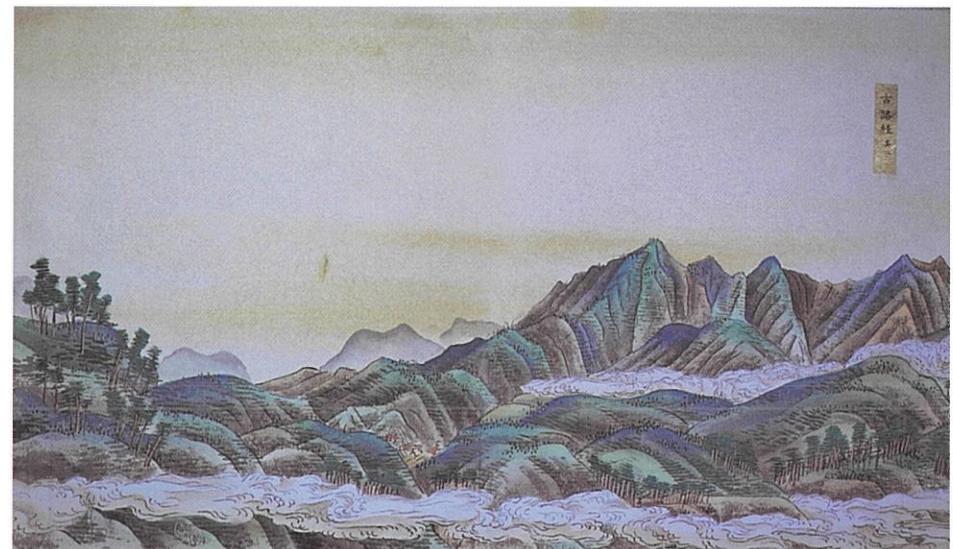


小田別其二

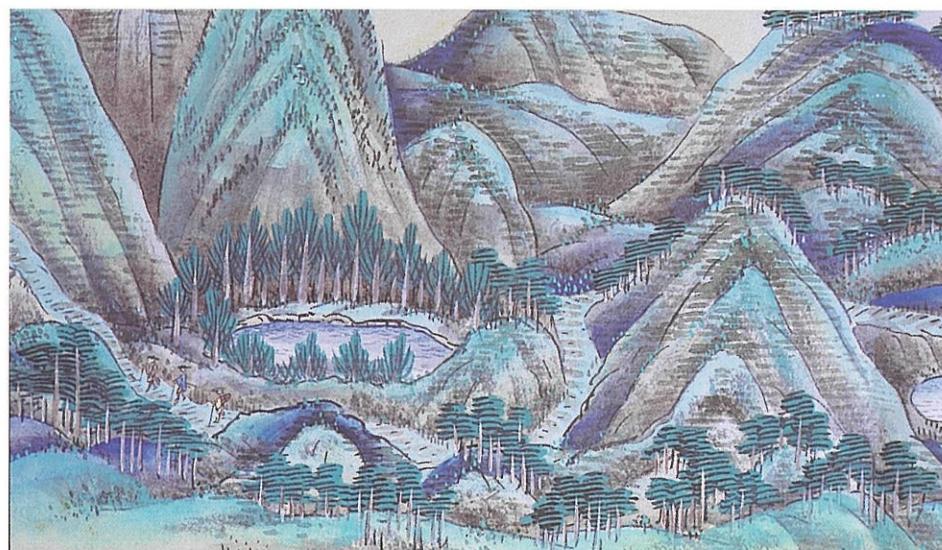
目賀田帶刀・北海道歴検図（安政六年頃 1859年頃 北海道大学附属図書館北方資料室蔵）



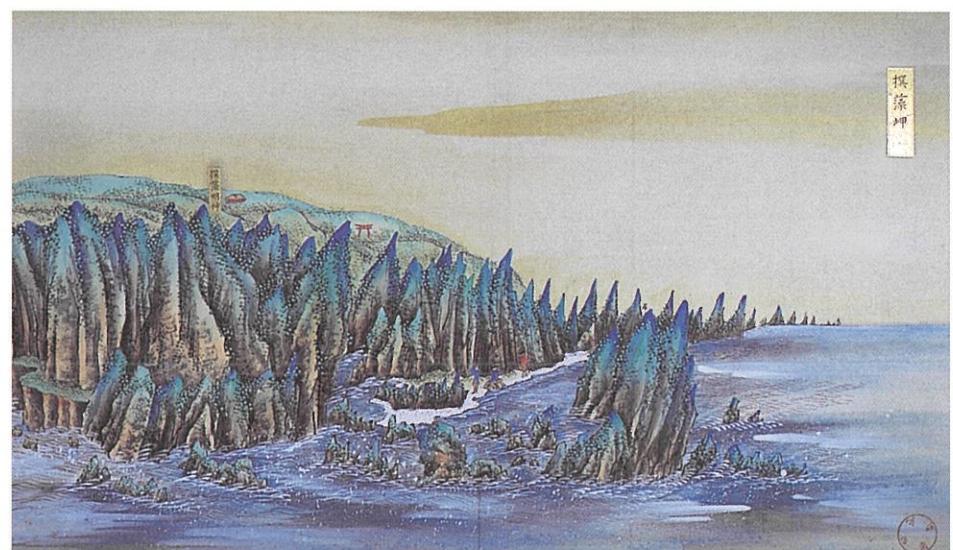
古路経



古路経其二



小田別其二・拡大

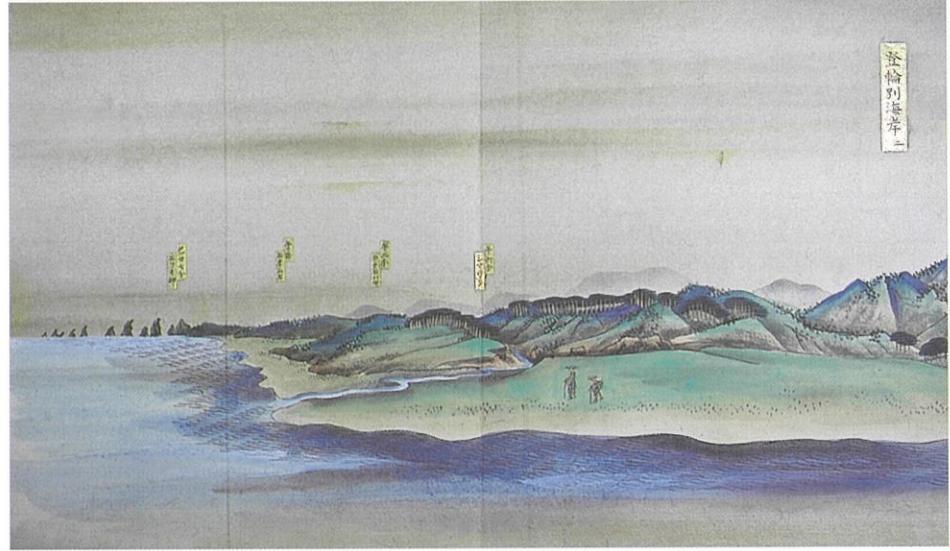


撰藻岬（撰藻明神）

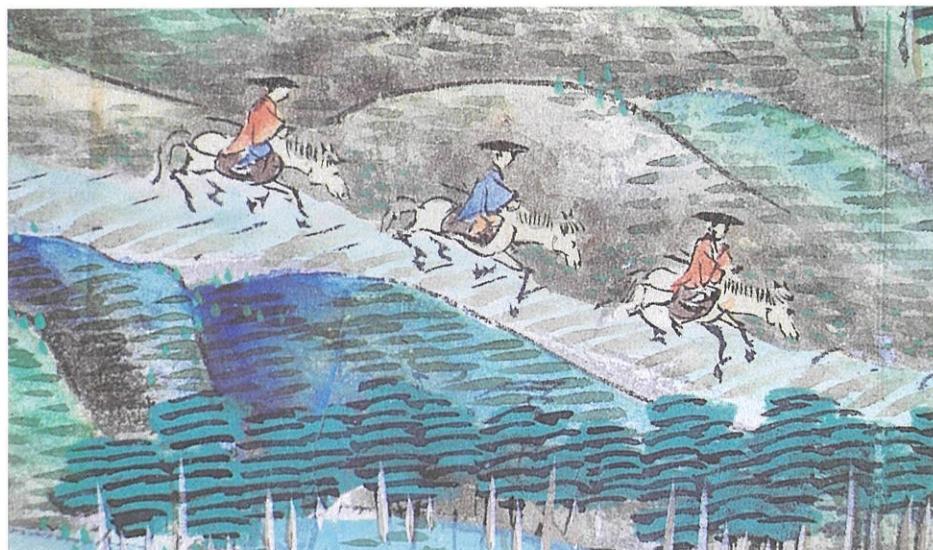
目賀田帶刀・北海道歴検図（安政六年頃 1859年頃 北海道大学附属図書館北方資料室蔵）



登輪別山中



登輪別海岸二（午六分シンウシ、午二分オクヒハマ、午正ニオムヒ、巳立七分エリモ岬）



登輪別山中・拡大



沙流々（距箱館百七里十九町餘、トヨニ山道、沙流々岬、撰藻岬）

「竹四郎廻浦日記」 松浦武四郎 安政三年（1856）

＜出典：高倉新一郎解説 竹四郎廻浦日記 下 北海道出版企画センター刊＞

卷の二十七

1856年10月25日（旧暦：安政3年9月27日）出立

＜十勝と幌泉の境の休所を出発し、海岸の岬2ヶ所を越えて右の方へ約200m入る
と

ヲヒタルシベ 岩サキ

ヲンネト

サルム<猿留>

番屋に着く、さてこの番屋は幌泉の場所であるが、エリモ岬から当所までの昆布を十勝より採りに来ているために、当時この番屋の宿取扱いは十勝が管理していた。よって、十勝番人が来て世話をしていた。

さて、この地名サルはサルムである。これは玄裳道士のアイヌ語で、その話によると、ここはツルが多いところである。その土地肥沃にして前に川がある。ここから左、海岸通りを行くときはチフヤンサルムサキ（猿留岬の北側にある、やや広い砂浜海岸）等を越えてえりも岬の方へ出る。

しかし、冬、山中は雪で道が通れないとき、今もその海岸を通る。詳細は三航日誌に書きここでは略す。（字欠）通行屋1棟（109坪）、板・蔵1、雇いアイヌ小屋1棟あり、昔はここにアイヌ小屋5軒あったが、今は1軒もない。前に標柱（十勝より約23km、幌泉より約26km）がある。この辺はシカが多く、今日も浜でアイヌたちが1頭を捕ってきた。夜中に鳴き声を聴き、はるか遠い故郷に思いをはした。この前の川は浅瀬で小石少しあり。しばらく上に登ると三瀬斗につく。その源は様似領で幌満とその上の山の後ろから来る。

10月26日（旧暦：安政3年9月28日）出立。川岸に沿ってしばらく登る

ヲン子ナイ

ノフルサルム 歩いて渡り 川あり

サツテクサルム 歩いて渡る

サルムヘツ

この辺はカエデが多い。その他、カシワ、カツラ等も紅葉になってきた。川があり、幅約28m、小石川で急流、水かさが増している。時には舟で渡る。この川は3

つの川が合わせてサルム川となる。いずれもマス、イワナ、雑魚がいるという。越えて小休所1棟（6坪）ここから坂道で難所である。

カルシコタン

この小休所の後ろの辺をいう。地名カルシはきのこ。コタンは所である。近年まで南部人が来て椎茸を作っていたので名づけたという。これからよいよ険しくなる。

トヨイ

険しい山をしばらく歩いて（約6km）南に山が険しくそびえたっている間に1つの沼があり、これを豊似湖という。深い沼である。その上の小道から見るととても美しく見える。

この上の山を豊似岳という。神靈がいて昔、湖の山にアイヌがシカを追った時には、激しくはなはだしく雨が降り、よって早々に帰ってきたという。少々行き峠あり、トウブチ峠また沼見峠ともいう。前後の眺めがいい。ここから山の中腹を南へまわり、左にえりも岬等を望む、少し行くと

ハンケシトマヘツ

シトマヘツ

ヘンケシトマヘツ

3ヶ所とも谷川、地名シトマヘツは風雪厳しく歩きにくいところ。少し行ってアブチ

ここから百人浜を眺めるのに良い。昼休所1棟（17.5坪）。この辺水がなくシトマヘツから運ぶ。地名アブチはアンツの訛り言葉である。古くは、この辺の山々にオヒョウが多くあり、皆アツシを織るのに皮をはぎに來ることから名づけられたという。

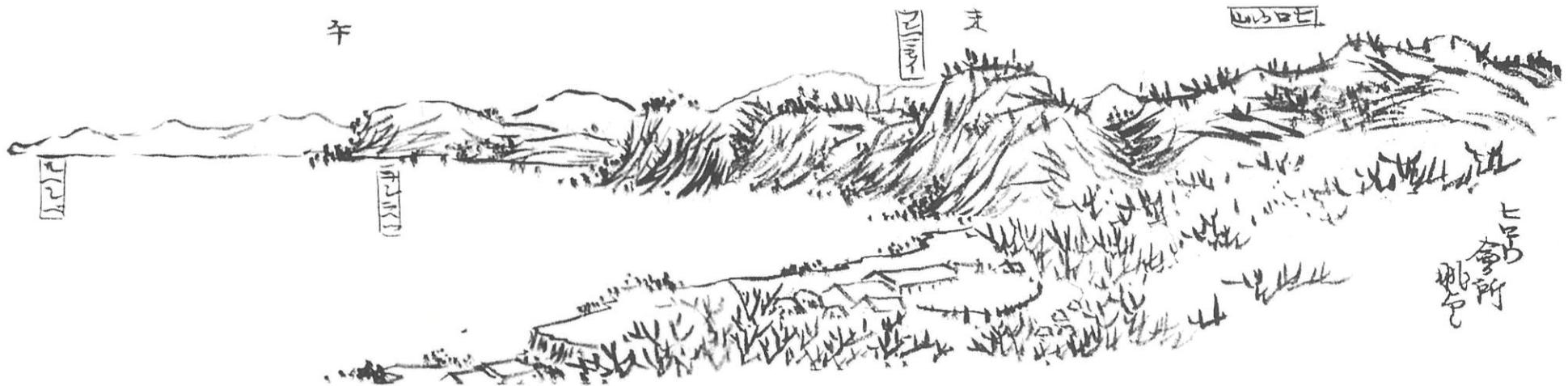
ヲタヘツ

小川

モセウシナイ 草刈沢

歩いて渡る。この辺は平地でカシワが多い。地名は草刈沢ということ。小休所（12坪）1棟あり。ここまで下役の秋山氏が出迎える。その後ろにアイヌの小屋7軒（トキクンテ家族4人、アシンテキ家族5人、シヲ子ロ家族4人、シェリムシ家族2人、アハマカ家族7人、チヤラシンケ家族3人、シェリヤ家族4人）あり。ここには、昔、何もなかった。50～60年前始めてアイヌ村となった。そのころは10軒余りあったが今は7軒になった。そのうちトキクンテの爺脇乙名キンサクは当年87才になった。さて、ここから山道は、すぐに会所の後ろに行くのによく、大変近いと聞いた。

ケレフシ



モセウシナイと同様のところである。昔からここに7軒あったが、今は3軒（アマノ家族2人、イヘクニ家族2人、ユウコライ家族2人）があり。2軒は相続人なく、1軒（イヘクニのせがれエヘヲリノ）はまだ妻がないと聞く。ずっと下って
ユルフル
ホンモロヨ

ここは砂道。上に昆布小屋がある。そばに近年アイヌの家が3軒あったとか。今、2軒（乙名インカラアイノ家族4人、惣小使リクナン家族7人）は会所へ引越した。1軒は出稼ぎに行っているが当所に残っている。この辺、この間の砂原岳噴火で焼けた小石が海岸に多く寄った（浜は西向き：酉向）。

シユンケシナイ

ニケフシ

ここも近年まで3軒ほどあったが今はない。

シラリヲマナイ

ホロイヅミ

地名ホロイヅミはホロエンルンの転語（ある語から変じて出来た語）である。ホロエンルンは大岬と訳す。ここは、左右が岬になっていて一つの湾になっている。西（酉）に向いていて小さな澗がある。会所1棟（210坪）、旅館2棟（27坪、48坪）備蓄米蔵1棟、板蔵10棟、鍛冶職、細工蔵、雇いアイヌ小屋、廐、釜納屋、住吉社、稻荷社各1棟づつ。ここは松前家臣蛎崎藏人領地である。ここから奥を奥蝦夷といい、これより手前（口）を口蝦夷という。当時の会所はアイヌ人4軒（並乙名タロ

＜竹四郎廻浦日記：北海道大学付属図書館蔵＞

家族7人、シトエタ家族7人、イロンナ家族4人、クロ家族8人）当時の場所内の総軒数は27軒、人口は100人である。文化の頃の書物には三寅年（1806年）45軒、人口は175人、馬23頭とある。その後、引渡し時は文政5年（1822年）になるが、35軒に減った。しかし、その頃も人口は173人いた。当時、馬は115頭いたが、馬がもしいなければ、往来の通行、宿場で人馬の乗り換えが出来なかつただろう。前に標柱（シヤマニヘ24.8km、サルトヘ24.1km）あり。

10月27日（旧暦：安政3年9月29日）出立。今日の人足はすべ和人によって引き継いでいく。そのわけは、様似に痘瘡（伝染病の天然痘）が流行してアイヌたちが山へ引き込んでしまったからという。砂道を少し行って、丘になり

エンルン

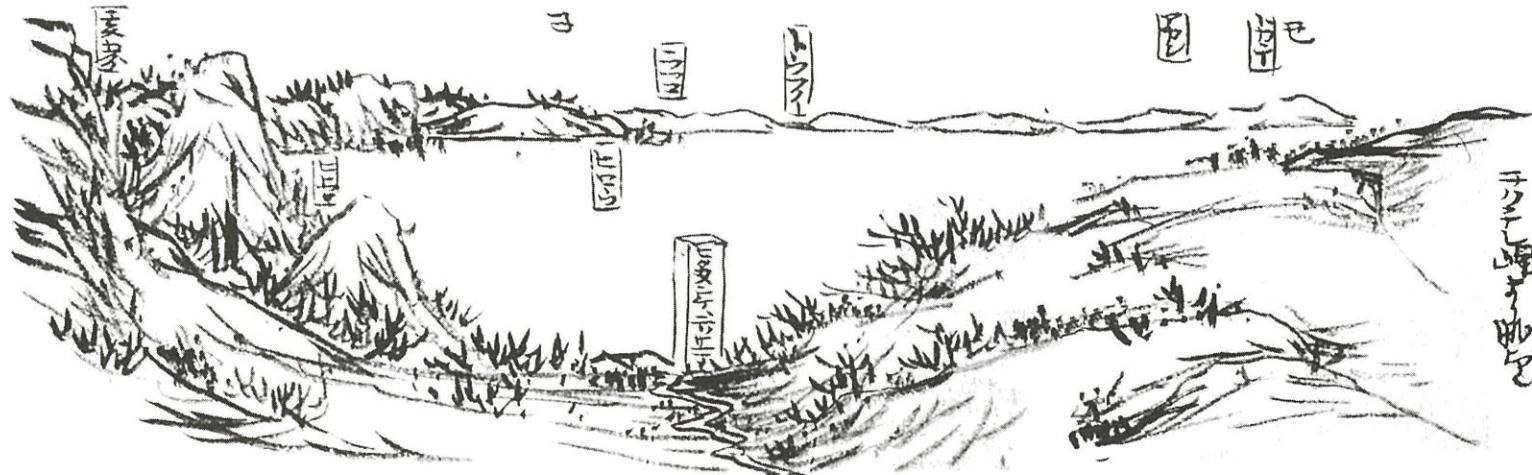
小さな岬である。近年まで3軒、当時2軒（イフエサン家族4人、ウエンコヤ家族6人）、この上を越えて

シヤコツ

コンカニ

ここは沢の出合いで、左右に少し開いていて、土地は良く、小川がある。流れは遅く深い。カレイ（鱸）、雑魚が多い。近年までアイヌ小屋8軒あった。当時は4軒（乙名ヌカルクニ家族4人、イヤハウ家族3人、イヘニカ家族2人、イタシナンカ5人）がある。（浜は西向き（酉））

ヌツチナイ



<竹四郎廻浦日記：北海道大学付属図書館蔵>

ここも今はアイヌの家はない。しかし、文化年間（1804～1818）頃まで2軒あったと聞く。そのうち1軒（シンノクロ家族3人）は会所の所に残っている。

アベヤキ

地名アベヤキはセミを焼くということである。近年まで8軒あったが、当時ようやく3軒（惣乙名ハシユチウ家族4人、並乙名ヒリカケク家族3人、チキリアイノ家族3人）あるだけという。さて、ハシユチウの爺イクタチヤは当年80歳、母マツロトンは85歳、実に珍しい夫婦である。また、チキリアイノ（55才）せがれ等は相應の年であるが未だ結婚もせず、よって次男とともに男だけで暮らしている。さて、この辺のアイヌは昔、みんなニカンヘツの川上に暮らして浜へは出てこなかつた。ただ、漁猟の時期に出稼ぎにだけ出てきたという。そのことはこのイタクチヤがよく知っていて、彼が初めて浜へ住居を持ったという。少し平らな山を越えて

フユマフ

ホンウエンコタン

小休所1棟（11坪）がある。漁小屋もそばにあって和人の出稼ぎの者が暮らす。ここには昔アイヌが5軒ほどあったが、痘瘡（天然痘）のために全員死に、今住むアイヌはいない。よってここはウエンコタンの名があるのか。少し山を越えて

ウエンコタン ここから浜道

ホロムイ

アユシ（カユシ）

シヤクコタン 漁小屋あり

チカヨウ

ヘセトエ

ニカンヘツ

ここまで浜道である。地名ニカンヘツは釣りということ。昔アイヌの頭領（頭獵）がラッコ（獵虎）を釣ったという。川の幅は200m位。渴水の時は浅瀬になり幾筋の流れになり歩いて渡るという。川の南に標柱（ホロイヅミ会所へ77.9km、トカチ境目まで41.2km）がある。また川の北に標柱（シヤマニへ17.7km、ウラカワ境まで22.7km）があり、ここを境としている。しかし、この川は確かにホロイヅミ領であることは明らかだ。いつからこのようになったのかわからない。

この川の源流は11.8km位でトヨイ岳の後ろになるという。川筋の土地はとても広い。

ルサキ

この辺崖の下は砂利浜である。昔はここに境柱があったと、ホロイヅミアイヌが伝えている。

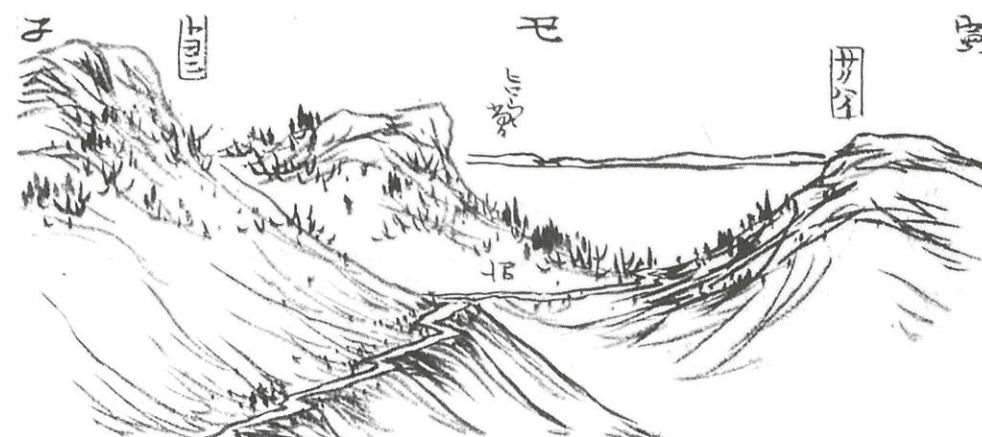
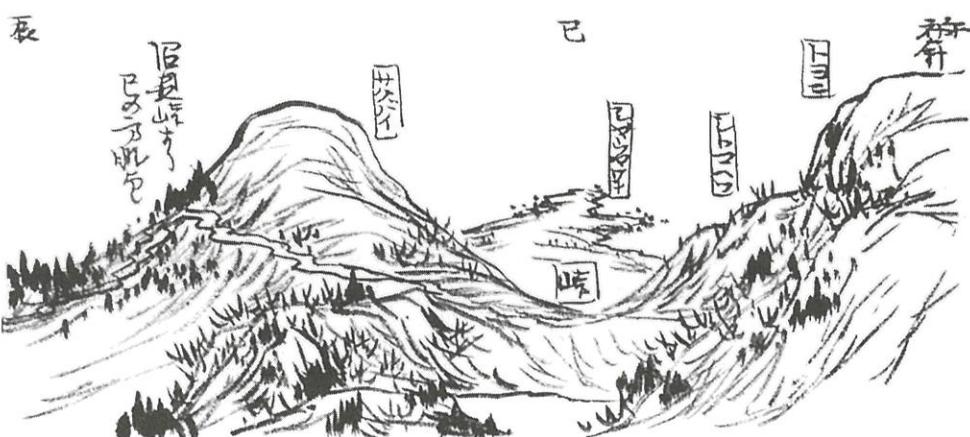
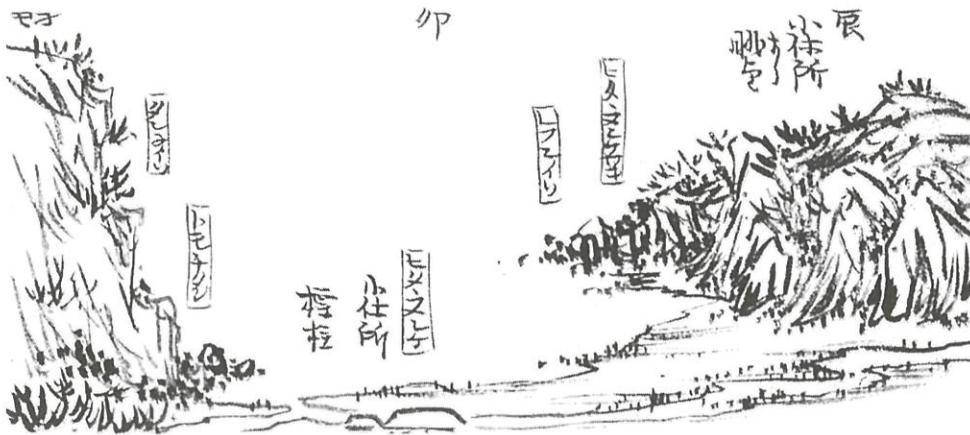
サノシナイ（サノンナイ）

チカフヲンナイ

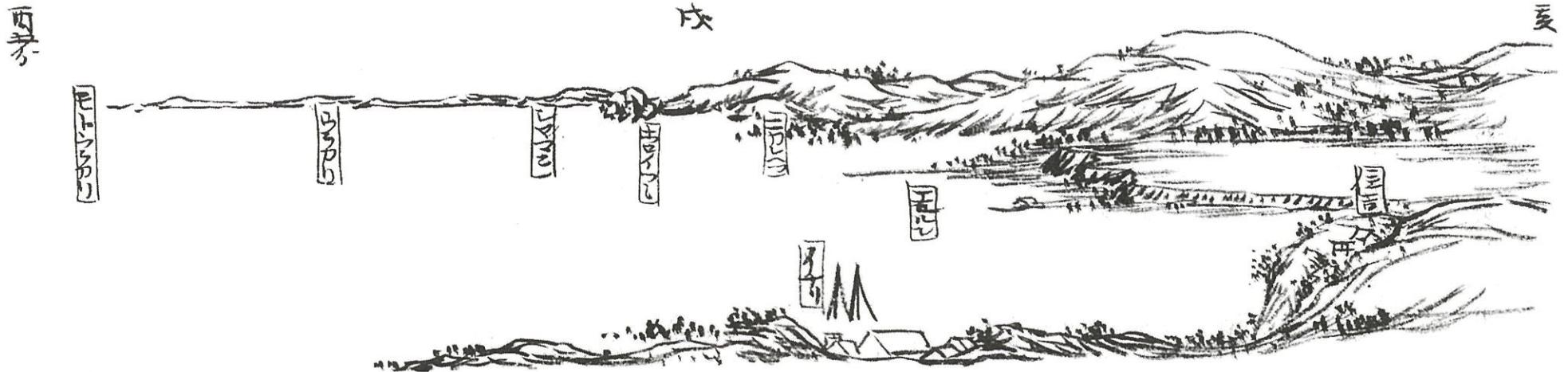
ウトルナンナイ

ホロマンヘツ

ここに幅330m位の沢で向こう岸に川（幅90m位）がある。船で渡る。しかし小石の川で浅い。手前に昼休所1棟、漁番屋あり。出稼ぎ人が一人暮らしている。アイヌ



<竹四郎廻浦日記：北海道大学付属図書館蔵>



<竹四郎廻浦記：北海道大学付属図書館蔵>

の出稼ぎもいる。また、前に標柱（シヤマニへ12.4km、ホロイヅミへ10.9km）あり。同心吉沢氏（シヤマニ詰同心組頭吉沢左十郎）が出迎えに来た。<以下省略>

* 当時天然痘（痘瘡）が流行すると、アイヌは皆顔に鍋墨などを塗り、病人を放置して山に逃れた。痘瘡の原因はバコロカムイと呼ぶ、旅をして歩く悪霊と考えられていたからである。そのため人足がなく通行に支障がでたので、安政四（1857）・五年にわたって医師を派遣し、強制的に種痘を施行し、これを防いだ。

「東徼私筆」 成石修 安政四年（1857）

<出典：大野良子編 政界往来社刊>

安政二年（1855）、函館などを開港する日露和親条約が結ばれていたが、日本周辺には、外国船が出没し、国内は騒然としていた。特に北辺の蝦夷地の実情把握のため、幕閣地自身がその家臣を蝦夷地に派遣した。老中久世広周（くぜ・ひろちか：下総国関宿藩主）は、成石修を蝦夷地巡察に派遣した。<森資料>

1857年9月13日（旧暦：安政四年七月二十五日）川の水量が少し減ったのでトカチを出発して270m行くと川があり、急流で馬の上では大変危険だ。林の中に川が3つあり、どれも27m位である。それより3.9kmでヒロオ山道で森林の中を通っている。

小さな坂を下がって休所がある、ヒホロ川は川幅が28m位で急流で深く渡る時に馬の腹がぬれた。ヲナウヘツ山道入口に小さな滝がある、3.9kmでヨリコマナイ川があり、28m位で馬で渡る。オオシニヘツ休所があり、昼食にする。3.9kmでヨクチシ、ヒナイを過ぎてトカチとホロイヅミの境界杭がある。

海岸へ出てヒタタヌンケ休所があり、これから海岸の崖への道は凹凸で危険であり、寒気がする。岩がすごい所は海中を渡るが怒涛が馬の頭にぶつかってくる、渡り終えて岩石に上ると、突き出た石の頭に馬の蹄がぶらつき、5～6歩は止まらない。しかしここは危険なので手綱をさばいて足（躍）を踊るようにしてかろうじて砂のあるところに着き、気づくと私は馬の頭にまたがっており、いかにおじけていたか、このようにまで我を忘れてしまう愚かさだ。元の鞍に戻ろうとすると怒涛が大きく来るのが見えて、役アイヌは馬を岩へ再び引き上げようとしたが、馬の蹄が再び乱れてついに岩下に落ち、鞍の上の波によって岩上に打ち上げられた。このとき右手の親指をしたたかに打って痛さが耐え切れなかった。その後ついにまったく癒えなかつた。今日は馬も優秀で、平地の旅は面白いほどに馬を走らせたが、このような危険を馬にさせることを心得ていなかつたので、自分も怪我をし、馬を働かせることは大変誤っていた。ヨキタルヘシ、この辺から雨がやみ海岸は一様に奇岩が現れ、ときどき馬を止めて見た。所々に昆布場がある。今日の行程は22.9kmでサルト番屋に到着、ここは通行のための置所でホロイヅミの所有である。

9月14日（旧暦：七月二十六日）11月（旧暦九月）中頃の気候である。ここよりエリモ岬をまわる海岸の道があるけれども、通行は山道（猿留山道）を行って26.8kmでホロイヅミに至る。この道サルル越えでもすこぶる危険である。番家を出すぐには山道である。3.9kmサルル川に沿って山道を上下し、2200m程行くとヲン子ナイ川があり川幅11m位を越えて、行くとノホリサルル川があり川幅28m位、この辺は平地で密林である。サルル川は川幅31.8m位で急流で深く、水が馬の腹にとどく、カルシコタン休所がある。これより山中の小道で渓流の中を、山を踏み越え、水を渡り、曲がりくねった道をよじ登り危険である。2.8km位も登ったところに四方に山がそびえたち、下に一つの碧沼（あおみどりの沼）がある。昔、間宮氏（間宮林藏）が測量したがその深さはわからなかったという。山腹の小道は足下は数百丈の深い谷であり、左に碧潭蒼々（あおあおとした）深い淵なので、恐ろしく感じだ。トヨニの嶺は高く、この辺から東の方の山々が連立し白い雲がわいてきて非常にすばらしい。これよりシトマベツ川で川幅は13.6m、トマヘツを経てアフチ休所があり昼食にする。ここよりエリモ岬の方向は連山が眼下に見えて太平洋（東大洋）は蒼々として眺望はとても珍しい。山道を下り3.9kmヲタベツ、川が3つある。少し行くとケ子フシ、ここより海岸3.3kmでホロイヅミに至る。当所は西に向いて浜が広がっていて岸辺には弁才船が停泊している。領内のアイヌ家は28軒、倉庫の類が6ヶ所、ここに着いてエリモ岬を後ろにし、これからだんだんと南に向かう（のぼる）ほど暖かい。

9月15日（旧暦：七月二十七日）朝雷鳴後晴れ、ホロイヅミ会所を出発する。ナンブヘツを渡り3.9kmエンルモ、3.9kmブイマツフ、ホンウエンコタン、この辺平原で草野である。ウエンコタン小川を渡り、海岸は昆布の場である。3.9kmでニカンヘツ、ホロイヅミ・シヤマニの境界の杭がある。ニカンヘツ川は川幅が広く馬で渡った。川の流れは5つありこれより海岸のホロマンベツ休所で昼食にする。これから沢の中に入つて山道（様似山道）である。1km位急な道を登り降りし、ホロマンベツ川幅72.7m位の流水を渡る。両側が大きな石で、枝道を行く所は穴のようだ。第二の山を越えると3.9kmでヲナイ、第三第四と山を歩き水を渡り行き歩くのは大変悩まされた。第一から第四までようやくで、山を下り降りてコトニ休所がある。3.9kmでブユニの奇岩がある。海岸を行つて小川を3つ渡り、3.9kmモンベツ海岸、小さな岬の辺は丸い石が多くて馬の蹄を悩ませた。これからシマニ川、川幅36m位で馬で渡る。これより崖の上を行つてシヤマニ会所に到着する。

「罕有日記」 森一馬 安政四年（1857）

＜出典：市立函館図書館蔵＞

「罕」まれにある。論語「子罕言利」（子まれに利をいう）からとっている。越後長丘藩主牧野忠雅が老中職にあったとき、蝦夷地・北蝦夷地の調査に派遣した長岡藩士の日記。（カラーページ参照）＜森資料＞

1857年10月6日（旧暦：八月十九日）

＜略＞

サルトキタルフシから1850m通行家に宿泊、5時（七ツ半）到着

客舎は番屋を兼ねていて昆布場であるという。この家の番人は昨日ヒロウにいたが、今夜の宿泊を考え、私より先に戻ってきていた。種々丁寧なおもてなしを受け、もっとも心がやさしい。

- 一 今日の行程はわずかに23.6kmほどに大変時間がかかった。山と海の厳しく危険なのは今日より大変なものはない。体の上下が無事に到着したことを喜び、お神酒を捧げ飲んだ。悩んだためか、さらに今、毎日の疲労を取り払うようだ。隣には仙台藩アツケシ在番の足軽の二人が宿泊していた。
- 一 私は山中で落馬し少し右すねを痛めた。神文哉の粉薬を塗つて治療をした、部屋は六畳ほどである。
- 一 番人に頼んでシカの皮一枚得た、酒代として一朱を与えた。

1857年10月7日（旧暦：八月二十日）快晴 宿泊地はホロイヅミ29.4km
サルト

7時過ぎ（五ツ時過）出発。番屋からすぐに草や樹林の中を行き160m位にてサルト（一里標ヒタタソケより5.8km、ホロイヅミへ29.4km）川を左にみて500m位行くとようやく茂った林の中を登る。小川を越え、また坂道を登り降りしてヲン子ナイ川（幅は18mほど）石のある川で清流である。渡つて山中は平坦で雑木の中500m位にてノホリサルト川（幅は36m位）石のある川で、急流なのは前の川と同じ。渡つてなお山林や小川があり、越えて平坦な山なみと樹林の間をいくと、一段と低い所に下りて樹木はいよいよ増えて鬱蒼としている。日光も届かず500m位で（サルトより3.9km）また数百メートル（数丁）行くとサクテクサルト川（幅10m位）200mほどでサルト川（幅36m位）石のある川で急流である。これらの川は下流で一つになり、サルト川の南で海に入るという。越えて前と同じように茂った林の中を川に沿つて上がり、330m位で川近くへ下り、石の道500m位で川と距離をおき、また一つの小さな流れを

越えて小さな坂を登ってカルシコタン小休所がある。タバコ・茶で休憩する。ここから森林で狭く急な坂道を次第に登って稜線に出る。曲がりくねった道が2000mで険しく危険である。アツケシ(厚岸)国泰寺使僧に出会い、道が狭いのでお互いに通りすぎるのが難しく、少し広いところを選んで馬を止めると、僧侶がわざわざ馬を後ろに戻してくれた。馬を導く者が来て挨拶をしなくてよいのでお通り下さいというが、私は馬から下りて丁寧に挨拶した。しかたなく馬を下りたのに丁寧なお札を述べられ、別れを告げてまた馬に乗る。この辺は狭い道で、馬の足元は深い急な谷底で馬の乗り降りはもっとも難しい。また800m位を上り右側に広い沢があり、一つの湖が見える(縦横500m位)青い水は湛々(たんたん)として、一点のよごれもない。昔、最上徳内が繩を降ろして測ると深さ二百余尋<360m>あったという。また魚はないという。この辺より稜線上や左右の山には木立はなく芝草が生えているだけで、すべて岩山に見える。また数百メートル登るとトヨニ(一里標サルゝ川一里)ここから登ることまた1km位で景色は絶頂である。右はとても高い山、左はなだらかな山で、どれも高い山であるが樹木はない。左斜めに下り、遠くを望めば青々とし雲が長くたなびき、眼下には渓流と山が重なり波が打ち寄せるようだ。絶景に心酔し自然に轡をとめた<馬を止めた>。ここから下り1600m位また森林の中である。仙台藩横尾金右衛門氏と行き会う。私から人馬の引き換えを希望し、お互いに馬を降りて林の中で挨拶した。これからクナシリ崎まわり見てシラオイに帰るという(この人、目付役なので上下5~6人を連れている)。以前に奥の青森に逗留したとき、そこに到着するのをみると、若党中央間が14~15人でもっとも厳重に護衛している人であった。当時シラヲイの本陣に所属していた。人馬の準備ができお互に出発の挨拶を伝え南北に分かれた。ここから大きな樹木の間を下り、渓流を數本越え、また急な坂を600m位登り、平らな山の上に出てシトマレツ(一里標トヨニより)この前の林を下り上ること数回2200mで細い川を渡り、アフチ昼休所があり昼食をとる(サルゝからのさし入れである)。ここは南にエリモ岬(エリモはネズミのことである、現在神を崇めて岬の上に小さな祠が建っているという)細長く大洋へ突き出している。巨大な岩が多くその出ている先から湾となりこの山の下に入っており11.8km位ある。また美しい景色である(この出ている岬は芝の山で木立がなく磯辺を百セン浜といわれている)。食後、平坦な山道を数百メートルアブチ(一里標)また登り降りること2回、渓流を3本越え急な坂を登り、平坦な雑木林を次第に下り、坂を越して沢に入りヲタベツ川(幅18m位)標木がある(アブチより3.9km)、越えて山間は平坦で広く、なお2200mあまりでモセウシナイ(またケレヘツともいう)小休所、アイヌの家が9軒あり820m位でケレヘツ(ヲタヘツより3.9km)前と同じ山道を1.4km下り磯辺にでる。海岸は平らな山が続き、この辺は昆布小屋

が多い、小川を2本渡り2kmで山の出崎をまわり

ホロイヅミ 会所に宿泊5時(七ツ半時) ここは沢の間で右にエレルモの岬があり、小さな湾の形をしており船溜があり、七八石の船が停泊できる。会所と通行家は浜辺から奥へ200m位にあり、南西(申)に向いている。庭前の左に稻荷の祠があり、建物の後ろに住吉弁天の祠があり、住吉の祠は蝦夷地では珍しい。

- 一. 詰役御調下役秋山透、同心佐藤卯兵衛。ホロイヅミ場所の受負人は箱館の福島屋嘉七、支配人は卯三郎、通辞<通訳>は多七、海産物は昆布、鮭、ふのり、運上金六百八両、この中にアイヌ家が28軒、108人おり、内男59人、女49人
- 一. 今日は26.8kmの山道で急で危険であった。ヲタヘツ辺りからなだらかな山道である。ここはイリモ岬の南で波浪は特別に静かである。地勢も自然も違っている、今晚の食事にナスビ(唐茄子)、ニンジン(人参)、手蕷芋(ていも)類があり、ニンジンは色が白かった。
- 一. ここは従来よりアイヌが少なく、毎年松前辺りから60人の出稼ぎを雇ってコンブを探らせているという。会所が船に小屋、鍋釜筵<むしろ>の類まで貸し出し(ただし貸し賃をとる)、昆布百石目につき代金13両にて買い上げるという。この出稼ぎ人は西海岸ヘニシンの出稼ぎに行き、帰宅した後、夏の土用<今月7月中旬>前よりここへ来て、12~13両の金を得て帰るという。
- 一. 子モロ崎からエリモ崎まで(この地の北)数十キロメートルの大きな湾があり、その間にコンブカルシ、サルゝの岬その他所々に小さな岬があり小さな湾がある。すべて大方は東の海の波を受けて荒れている。エリモ岬からは南の海に面して波も穏やかで、耕作物も実るという。

隣の秋山氏に名簿を渡し、8時(五ツ時)川辺を渡り200mあまりでナンブケ(以前、文化年間南部家にて陣営を建てたので、アイヌがここをナンブケと呼んでいる)、同じように380mでコンガ子、小川がありアイヌ家が3軒、昔この川上に鉱山があったのでこの名にした(この地の近くで英一が山上を見て、この山は鉱山であろうといったので、コンカ子の名となった、英一の見定めには感心する)。この先はエンルモの岬があり、道が途絶えている。馬を右に向けて山に登ると、山の上は平坦で道がよく、山と海の風光は美しい。エンルモ(ホロイヅミより3.9km)同じ前の道870mでシヤヨツ、左に岸へ下る小川がありアイヌ家が3軒ある、この地はアイヌが少なく内地<本州>の華民が家族を連れての出稼ぎで、昆布百石目を13両で買いとり、百石目につき1両づつの手当てがあるという)、低い所に下り380mあまりで小川があり、再び野原に登り650mほどで汀に下ると番屋がある。ニシン、イワシ、サケ、コンブ等の漁があると

いう。小川を渡りホンウエンコタン（一里標）小休所で茶を飲む（番人も家内も引つ越した）。ここから浜に下がり山に沿って行く、途中は石で難所である、ホロミイ、アウシ、シヤコタン等の地を経てチカヨフ番屋がある。以上はすべて昆布場で出稼ぎ人の小屋が多い、海に向いた小船は枯葉のように汀に、乾かす昆布はクモの巣ように、海岸も波打ち際ともに岩が多い。この辺、岸の上にシカが群れて遊び、また岩の間にはミセバヤ草<ヒダカミセバヤ>が多い、高さは短く色は緑で花は大きく紅色である。その開く前の花は竹線のよう紅色である。ようやく山が途絶え、道は砂地となり930mでニカンベツ（一里標）、ニカンベツ川は川幅約100mで、水が枯れ5筋に分かれている。4番目の流れが本流で、36mあまりで全員渡った。（標木に水野正太夫持場シヤマニ会所まで17.7kmとあった。）

ニカンベツ、ホロイヅミ、シヤマニ境

川の東に疱瘡<天然痘>除けの札を建て、左右に武者人形をワラで作り、小さな旗を刺して、加藤清正、鎮西八郎為朝等の名を記してあり、蝦夷地の慣わしと思われた。芝山に沿って石の浜を行きルサキ、サトシナイみんな小川があり、100mあまりでチカフナイ、ウトルサンナイまた小川、この辺すべてに出稼ぎの小屋があり、数十丈の巨岩が壁のように立ち、崩れ落ち、途中は石の道で狭く、岩の様子は奇々怪々（滝が2条あり、この間にシヤワンナイ、ヲトルサンナイ、すべて昆布小屋である）である。ニカンヘツから2200mで巨岩はなくなり沢が開けた。平らな砂の草原を700m行くと小さな沼がありホロマンヘツ昼休み所である。

「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」 松浦武四郎 安政五年（1858）

戊午第四十六卷東部南岬志

<出典：松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説

戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・下 北海道出版企画センター刊>

戊午巡恵里茂日誌

松浦武四郎著

本名はエリムである。その意味はネズミである。この岬を遠くから見る時はネズ

ミが伏せているように見えるという。またここにネズミの形をした石があるともいう。どれがそれであるかわからない。この岬の地形はホロイヅミから南に突き出でいる一つの岬である。この岬をまわってヒロウ領<本当は幌泉場所>なるサル番屋<サル>番屋>までを記するものである。

ホロイヅミ会所

ホロイヅミは原名ホロエンルンが転じたものである。その会所をはじめ地形や人別等のことは丙辰記行<1856年=安政3年の廻浦日記>に記録しているので略する。私はここでにて一夜宿泊する。案内の者として脇乙名イブイサンと馬士キンチヨの兩人を雇って出発する。兩人へ酒一升を与える。

1858年8月20日（旧暦：七月十二日）快晴、さて、会所を出発して行く、この辺は先年の通行の時より、昆布取小屋数十ヶ所増えて、浜中がとても賑やかである。干潮でとても歩きやすい。

シラリマナイ

シユンケシナイ

コリフリ

ヲタベツ

会所からここまで2500m、平らな砂原、上は平らな山でカヤ野原である。海岸は崖が多い。この時期が昆布の盛りでここに番屋1棟、前に左本道、右エリモの神社と杭が建っている。ヲタベツ、その名の意味は砂ばかり流れる川であるがためにこの名がある。これから海岸のとおり行って

クツフルエ

崖の岸である。この辺の海岸には暗礁が多い。上は平らな山である。樹木はない。しばらく過ぎると

ウトランクシナイ

カヤの原、平らな山の下に小沢がある。その沢の下は険しい岩石原である。しばらく過ぎて、並んで

モエ子コロ

崖の下が湾になっているのでその名になった。モエはムイのことである。ムイは箕<みの>のことである。子コロの意味はわからない。この辺は平磯である。また少し過ぎて

エントモカ

一つの岬である。この岬はホロイヅミと向かい合っている。エトモとは鼻のこと、突き出でている所である。またしばらく過ぎて

ホクトマナイ

岬の南に一つの小沢がある。その名の意味は不明。また少し行って
ウケマシナイ

同じように小川、崖の下の岩磯へ落ちる。上はカヤの原である。またしばらく過ぎて

シユマウス

この磯は険しい大岩ばかりである。シユマとは岩のこと、ウスはウシの訛り、多い
とう意味である。また少し行き漁小屋がある。越えて

ヲヘシコマナイ

磯で岩があり、過ぎて小川。ここは小石浜がしばらくの間つづく。その名の意味は
不明。浜をそのまましばらく過ぎて

ホンチャラセナイ

ホロチヤラセナイ

等2川とも山の間に滝川になって落ちる。チャラセは山間にチャラチャラと流れる
という意味。また少し行き

ホンチャカキシ

ホロチヤカキシ

今、訛ってサカキシという。その名は昔エトロフ島・クナシリ島のアイヌが松前藩
主にあいさつに行くとき、ここへ必ず船をつけ休み、船中の荷料等を飾り、用意して、
ここより日和待ち<天候風向きをみて>をして、本当によい時はエトモ<室蘭
>までも行くに良いところであった。よって名づけたという。またしばらくすると
ヲニタラフ

本名をランラフシナイという。アイヌ等は薬に用いる草が多くあるので名づけたと
いう。またしばらく過ぎて

エイシユマ

今、訛ってエンシユマという。その名の意味は、ここにとがっている岩石ばかりが
あるために名づけたという。この辺より海岸はすべて大岩原で、怪石奇石だけである。
その様子は実に人象のようで、また獸禽のように、屏風のようなものがある。
またしばらく過ぎて

ヒン子ワタラ

ここは大岩が海中から突き出ている。よってここは船では行くのが難しいので、我々
はこの手前から陸へ上り、ここからアフラコマの方へ下る。しかしその名と形象を
記録しておく。その名の意味は、昔、雄の海濱（ポピリ）<トド>が多く上ること
から名づけたという。またしばらく過ぎて

マチワタラ

ここはまた前に同じ岩磯の岬である。ここは雌の海濱（ポピリ）が多く上ることか
ら名づけたという。また少し行って

リフンエントモ

一つの岬である。この岬、北の方のエントモカと対であり、その間は一つの湾をな
している。またしばらく過ぎて

チカフノコエ

小さな岩岬である。この辺にワシが多いことから名づけたという。チカフはワシの
ことである。また少し行って

ヤンケヘツ

小川である。沢目の間にある。水は少しある。その名は、どんな物でもこの川へ打
ち上ることから名づけたという。ヤンケはゆれ上るという意味である。また少し行つ
て

ヲチヨロツケ

大岩が険しい所、その名の意味はわからない。またしばらく過ぎて

シムヤモサキ

一つの岬がある。この岬リフンエントモと対である。その間は一つの湾になつて
いる。その名は人間<和人>の岬という意味である。なんということであろうか。また
しばらく過ぎて

ホンヌル

右岬のそばに小さな岩原がある。それをいう。過ぎて

アブラコマ

ここは小さな湾になっている、小川が一流れあり。両岸は険しく高く、小船を入れ
るに適している。アブラコマは和名アイナメという魚のことである。この魚はここ
に多くいることから、番人が通称に名づけたものである。アイヌはこれをホンナイ
と言い伝えている。ここに番屋1軒ある、トカチアイヌが来て昆布漁をしている。
私はまたここから陸路に上り行く。すべてこの辺はみんな平らな山で小さなササの
原である、ここよりソウヤ（庶野）への近道がある。さて、海岸をそのまま、また
270m位で

チヨトマリ

本名はシユマトマリという。その意味は岩澗という意味である。またホロイヅミア
イヌによるとチヨトマリで、チヨマというのは恐ろしい神のことである。ここに窟
<いわや>が一つあるが、その窟に神がいらっしゃり、昔から漁労や狩猟の始めに
は必ず御神酒をあげて、イナウを供え祭るという。また並んで

テシケ

その窟の後ろの方になる。その名の意味は神様の泊所ということである。またしばらく過ぎて

レツハモエ

大岩壁が険しい小さな澗である。その名の意味は不明。モエはムイの転じたもの。すなわち湾になっているということ。また過ぎて

サンベワタラ

大岩壁で出岬である。その下は干潮の時にはかなり通りやすい。まわって長い崖があつて、過ぎると

ショツケワタラ

ここも前と同じワタラである。その名の意味は不明。ここを通って外へ出る

エリモサキ

である。その名の意味は前に述べているとおり。ネズミの形になっているために名づけたという。社があり周りは風が厳しいために、堤を築いて風からの構えとしている。祭る神はどこの神であろうか、イナウ、絵馬等が多く飾り立っている。さてこの神殿の所に出ると、ソウヤ<庶野>、ヒロウ<広尾>の崎まで一目に見え、西も快晴の時はユウハリ<夕張>山の辺まで見えるという。ここは第一の南の岬で、その風景は表現できるものではない。その神殿の下に

マチ子ワタラ

ヒン子ワタラ

等2ヶ所の大岩壁が海中から突出している所がある。ヒン子ワタラはエリモの神の御使いの雄の神が住む所、マチ子ワタラは雌の神が住む所という。またその次に

イナウシ

これは神殿の前の直下の波打ち際である。イナウが多く立てることから名づけられた。イナナウシの意味である。その前55mの海を隔てて

エサント

奇怪な岩石が突出する。その名の意味は不明。これが第五番目の岩である。また100m位を隔てて

リイワタラ

海中から突出する。その名の意味は高く突出していることである。これが第四番目の岩である。また55m位を隔てて

カハリイソ

海中から突出する。これが第三番目の岩である。その名の意味は不明である。また55m位も隔てて

ホロイソ

海中から突出する。その名の意味はこの岩、五つ岩の中で第一に大きいことから名づけたということ。ホロとは大きいということ。イソはイショウの詰り、すなわち岩ということ。また36m位を隔てて

モノク子

海中から突出する。その名の意味は不明。等名づけてアシキ子イショウという。その意味は五つ岩ということである。実に海中から五つ並んで突出して、眺望は表現できないくらいだ。ここに昆布が多く生えているのを、アイヌはエリモ様の髭であると言って、昔から取ることはない。神殿で昼飯にして、ここからまた陸に上がり、約550m位で浜に下る。その陸の下の所を

シヤマンベウタ

ここはエリモサキの東岸で一つの岩の岬がある。その岬の後ろの一つの小浜をいう。名の意味はカレイの砂浜という意味。これはおそらくカレイが多いことから名づけられたと思われる。また、並んで

フラリモエ

ここへ上から下ると、小さな湾があり、この辺は東岸で昆布取りの出稼小屋が多い。その名の意味は昆布が多くて腐るために、その悪臭がとてもする、よって名づけられた。フラリは悪臭のことである。モエは前に記載したムイということで、湾のことである。またしばらく過ぎて

ヲコシ

砂浜である。その名の意味は、昔、ここにヲコシチエツフという珍しい魚が流れついて名づけられた。ここに番屋が1棟（横5.4m、縦11.7km）板蔵（横3.6m、縦2.7m）等、その他出稼小屋が多い。アフラコマから山を越へ550mでここに来るのはいいことである。また砂浜をそのまま行くこと330m位で

ニヨモイ

ここは砂浜である。その浜の形は東に向かうにつれ、東の海から流れくる波が打上げる木が多くあることから名づけたといふ。ニヨは木である、モイはムイという意味である。またしばらく過ぎて

シヤクハイ

同じ砂浜で、海中に少しの岩磯がある。名の意味は不明。またしばらく行き、過ぎて

ヲコエマウシ

本名のヲコエウシから転じたものである。その名の意味、ヲコエとは小便のことである。この崖より小便のように流れることから名づけたといふ。またしばらく過ぎ

て

シユマウシ

この浜辺は岩石が多くあることから名づけられた。岩が多いという意味である。またしばらく過ぎて

フウレヘツ

砂浜である。その上に崖があり、そこから悪い水が流れ落ちることから名づけられた。またしばらく過ぎて

ホンヲリヘツ

ホロヲリヘツ

いづれも小川。その名の意味は不明。上の方はすべて平らな山である。また過ぎて
トワベツ

本名はトワンヘツという。この川上に沼があることから名づけたという。その沼をシイトウという、その意味はガマ（シイキナ）が多くあることから名づけたと思われる。この辺を総称して

百人浜

という。その意味は、昔、東風で海が荒れた時、東海乗りの船がここへ多く打上げられ、乗組員が百余人も死んだことによりこの名があるという。また、昔、アイヌ等が合戦し、ここで多くが討死したともいう。いづれが正しいかわからない。三年前までここに一つの石碑があったが、当時はどうしてあるのか知らなかった。ある人はその百人の溺死者を遺徳したものと言い伝わっているという。さて、また同じ所を行くと、砂が美しい所があり、馬で一目散に走るのに適している。過ぎて

キシケ

砂浜である。その名の意味は不明。ここで浜の形は南南東（巳）に向く。またしばらく過ぎて

ヲトベ

同じ砂浜である。この辺から小石が混ざり、名の意味は不明。またしばらく過ぎて

アフチ

同じ砂浜に小石混ざり。小川がある。この川は山道（猿留山道）の昼休所アフチヘツからくる川である。トワヘツからここまで約5.9kmといえる。その間は道がよい。ここから次第に岩石がある。少し行って

チヒランケソウヤ

小川がある。ここは小さな岬になっている。前側に岩磯がある。その名の意味は、舟を下げる岩磯という。チヒは舟のことである。ランケは下げる、ソウヤは岩磯のことをいう。また少し過ぎて

シ子ライ

岩磯、その上に転太石（ごろたいし）の浜がある。その名の意味は不明。その上を越えて、その内側

ルイランソウヤ

小さな湾である。その名の意味は道から下がる岩磯がある所という。ルイとは山道、ランとは下がる、ソウヤは前に書いたとおり。アフチからここまで2,000mという。並びに

シトマヘツ

小川がある。その浜は小石である。名の意味は恐ろしいとという意味である。すべてに恐ろしいということをシトマレということから名づけた。この川、山道（猿留山道）アフチと峠との間の川からくる。並んで

シヤウヤ（庶野）

ここは一つの湾で転太石の浜である。前側に暗礁が多く、突き出ているということでこの名がある。番屋1棟（横5.5m、縦7.3m）、板蔵1棟（横3.6m、縦12.7m）その他カヤ蔵等が多い。その番屋の前約270mから600mの所は船を碇泊するに適しており、積取舟はすべてここに碇泊する。またこの山はすべてホロイヅミ領だけれども、ホロイヅミはアイヌを追い払った（払底に附）ので、トカチアイヌが多く来て漁獵をする。

早くも今日も16時（七ツ）前になったので、ここにて宿泊する。トカチ詰合秋山透氏もここへ来ていらっしゃる。狭い板間に両人が枕を並べて寝た。さて、その辺の様子を見ると、この辺、海藻・魚・ナマコ・マグロ・カレイ、また様々な魚が多く、その繁栄は表現しきれない。

今夜は8月20日（旧暦：七月十二日）ともいう、人間地<和人地>にいれば、盆の仕度を急いでいるだろうと、四方山のことなどを思い出して寝たが、力は一匹もないなく、本当に昼寝のように快眠した。

8月21日（旧暦：七月十三日）朝の涼しい間に秋山氏はここから馬に乗り、上の野原へ上がり、ここから山道（猿留山道）を通り、サルトへ出られる。私はここから海岸をそのまま行く。

さて、ここから山道は約3000mでシトマヘツの川縁に出て本道へつながり、そこから峠を過ぎてカルシコタンへ下り、サルトへ下る。約11.8kmとい。私は馬士に馬を連れてさせて、直接サルト番屋へ山道通りを行かせた。

さて、出発して小石浜をそのまま行き約2200m位、その間、小さな岬の上を過ぎる。その岬は大岩が陥しく海中から突き出でているといえる。

トセフ

この岩は波打ち際にある。この神はエリモの神様と兄弟で、とても恐ろしい神であるのでここに置いているという。トセフは広きという意味である。また幅という意味もある。ここを少しまわって

フヨカシュマ

大岩が険しく突き出ている。その下に大きな穴がある、この穴に入り行くに適している。フヨとは穴のこと、シユマとは大岩のことである。穴岩の意味である。またそこをまわって

ニヨモイ

小さな湾である。その湾、木が多く打上がることから名づけられた。前に同名がある。この辺から山岸がいよいよ高くなつて立ちそびえている。またしばらく過ぎて

ホンフシコツ

ホロフシコツ

等2ヶ所とも小さな平地がある。小さな湾である。それをいう。また越えて、昆布取り番屋が多い。しばらくすると

ホンサクハイ

ホロサクハイ

大岩が険しい岬の名である。その左右小さな湾になる。その名の意味は不明。大岩の上を飛び越え、跳ね越え等して来るという。今、満潮でとても困難である。この岬から向う方向、ウトマウニと向きあう。トセフからここまで約1900mと思う。また、しばらく過ぎて

チセウシ

小さな湾である。ここアイヌが言うには、十数メートルの崖で、その上は山だという。雑樹がはえ暗い森である。その名の意味は家があるという。ここは昔からアイヌ等が来て昆布を取る小屋があるので名づけられた。私もここから先は、いよいよ道が悪くなり、通るのが難しいので、舟を借りて乗って行った。しばらく過ぎて

ウトマウニ

本名のウトマウエンの詰った語である。この海岸は大岩が多く突き出しているが、その間を波が行き交うため、舟は大変難渋するのでこの名がある。ウトマウエンとは、その間が悪いという意味である。シヤクハイからここまで約100m。また岸をそのままままで行くと

ウエンベン

険しい崖の所に一つワタラ<平磯>がある。ここは干潮で通れるが困難なことからこの名がある。その名の意味は悪い崖という意味。ウエンは悪い、ベシは崖である。

ウトマウニからここまで1400mと思える。ここから、ただ一面の崖の下を行くこと約2200m位で

ヲンコノキ

同じ崖である。その上の山にオンコ（土蘇木）が多くあることから名づけたものである。ヲンコノキは松前方言、アイヌ語をラルマニという。この辺は和人が多く入つて、毎年昆布を取りに来るため、ここを今までラルマニウシヒラと呼んでいたが、日本語（和語）になったと。大変興味を持った。またこの平地を過ぎて

チフヤニ

一つの岬、岩が険しく立ち重っている。その名の意味は舟を上げる所という、この岬を越えるとサルトの番屋が見える。また380m位過ぎて

サルトエト

ここはサルトの岬であり、よって名づけた。サルトの鼻ということである。その鼻をまわると番屋のある岬と対して一つの小さな湾になっている。ここには小石浜へ船を着けて上陸する。昆布取り小屋3～4軒あり、これは今年初めて建ったという。この湾は波が荒く、昆布取りの良い天候がとても少ない所である、100石目で他の場所が15両で会所が買い上げるのを、ここの品は18両で買い上げるので、その出稼ぎの小屋も出来たという。ここから浜を過ぎて380m位で

サルトヘツ

川幅は約24m、小石の川である。急流。川を越えて向こう岸へ上がると、カヤ原を270m位過ぎて

サルト番屋

ここはホロイヅミ領であるが、トカチからホロイヅミ領へ出稼ぎに行くために、今この番屋はトカチにて番屋守を置いて、通行を取扱っている。サルトはシヤリヲロの訛りである。シヤリオロとはアシ（蘆）ハギがはえる所という意味である。番屋1棟（横11m、縦10m）、板蔵（横2.7m、縦3.6m）、雇いアイヌ小屋2棟等が美しく建っている。ホロイヅミから27.5km、トカチ会所へ22.4km、ヲンコノ木から2.7km位と思う。13時（九ツ半）頃に到着したところ、トカチから酒も来ていたので、先にイフイサンとウトマウニから雇ったアイヌへ5合程与え、休む間に秋山透氏も着いた。よって、今夜はここでただ一泊し、明日は早く出発しようと、そのことをイフイサン、キンチヨヘ伝え、精霊会＜孟蘭盆：しょうりょうえ＞の団子等を持参して浜辺で納涼して横になると、また異国の話となってしまった。

「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」松浦武四郎 安政五年（1858）

＜出典：松浦武四郎著 高倉新一郎校訂 秋葉実解説

戊午東西蝦夷山川地理取調日誌・下 北海道出版企画センター刊＞

戊午登武智志

トウフチノホリはホロキツミの範囲である。サルト番屋を出て約9.8kmでトウフチ峠がある。これはトウフチ山から続いているのでこの名がある。

その峠は峰続きで北西に当たり、山が高く険しくそびえたちひとつの稜線で、その名の意味カモイトウという周囲約3.9kmの深い沼がある。よってこの名があるという。トウフチとは沼の端という意味。昔からこの山に上ることを禁じているので、すべての人を上げなかつた。そこで私は安政三年(1856:辰)にこここの山に上ることを願つたが、案内する人が言うには「近年もここにお上りにならうとした人がいたが、山の中腹まで上ると、四方に黒い雲が舞い下がり大きい雷・大きな雹くひょう>の雨が、車軸を流すように降り、一歩も前に進めず帰つてこられた」と話しを聞けば、いかにもその山の様子は普通ではないと思い、むなしく過ごして忘れることの出来ない恨みと思っていたので、今度こそと思っていた。

1958年9月1日（旧暦：七月二十四日）

サルト番屋で役人山村氏が、医師大内氏等と同じ宿に泊まり、私は一人、イソラム、エクレの2人を招いて、足の早い馬を準備させ、この馬に乗つて8時前（五ツ前）にトウブチに着く、峠へ来たら私はイソムラに『この山に神様がいて、昨夜私が寝たところ、白髪のアイヌが一人白衣を着て、突然現れ、夢のように、現実のように、私に語りかけた。「私はトウフチ山の神である。生まれつき酒が好きだが、この頃一滴の酒も私に持つててくれる人がいない。あなたが今日私の山に上つて、1本のイナウ（木幣）を削つて立て、それから下り、お酒を私に手向けて下さい。』と言われたと思ったら、夢はさめた。そこで今日は上つてイナウを1本立て、それから下つて会所で酒を買って捧げる。』と言い、「そこで貴方達が案内をするように」と尋ねたところ、案内のイソラムもエクレも「神の教え」と言う、みんな「下りお酒を捧げる。」と言う、そういうことならと私を案内してくれることを承諾した。それからここへ荷物を置き、山に上ると、その山は一面スゲ（菅）がはえ、すべり、その下は大きな岩が突き出ている。どうにも足を止めておけなかつたので、悩んだ。約1900m行くと四方がよく見え、その景色はいいようがないものだ。また1090mも上ると、ただ岩石が露出していて、その間はカバ（樺）の木が多い。また270m

位過ぎて頂上に着く、大きい岩が重なっているところに、ゴヨウマツ（五葉松）が地にはつてはえていて、そこからアリがたくさんはい出していた。そのアリは大きく足のような羽があつて飛び歩き、少しでも腰をかけて休む気にならなかつた。つま先立ちして四方の景色を描き、イソラムにイナウを作らせて納め、山を無事に下つた、本当に蝦夷地の開拓の一つのよいこと（吉兆）が起きる前兆だらうか。12時過ぎ（九ツ過）峠に下つて、次々に進んで山村氏、大内氏も来ていて、私が降りてくるのを待つておられ、同行して午後4時過ぎ（七ツ過）にホロイヅミ会所に着いた。

案内人2人と当所の乙名、並びに脇乙名4人へ酒2升を与えて「トカチ、ホロイヅミの大漁、並びにマツラニシハの旅の安全のために」と祈つてゐるのも、本当にちょっと笑つた後の話となつてしまつた。

「安政六年未年アイヌの御目見え附添

并喜多野様井上様竹内様御取扱日記」

＜出典：加賀家文書現代語訳版第二巻（別海町郷土資料館）2002＞

1859年4月22日（旧暦：安政六年三月二十日）

出発し、広尾の会所へ午前12時頃着く。清酒1升をアイヌたちに下され、昼飯をご馳走になり、それから歩いて猿留まで行く。仁助は途中から病気になり音調津という昼飯場に長助・作蔵を添えて一宿させ、残りは猿留に午後六時ごろ着いた。

4月23日（旧暦：三月二十一日）

早朝、人足を6人頼み、重助を付けて仮づくりの籠で、仁助を迎えてやつた。正午頃着いた。午後4時頃峠の下の小休所まで來たので、重助・長助と一緒に泊ませた。猿留番屋のお世話になりました。今日、このようにしたのは、明日の道中を考えてのことである。

4月24日（旧暦：三月二十二日）

幌泉・十勝の両方から急にお見回り御出役の通知が來たので、人足がいなく、長助・重助・作蔵の3人が仮づくりの籠をかついで猿留峠を登り、所々に残雪多くあつてかなり難儀した。峠の半ば頃から私と重助の2人は幌泉へ馬を借りに走り、昼飯場へ行ったところ、御見回りの弁当付き馬がいて、幸いにも支配人も居ましたので、病人が出て大変困っていることを願出たところ、馬を1頭お貸し下され、重助が

馬に乗って引き返し、午後7時頃に幌泉御会所へ着きました。アイヌたちへ清酒1升5合、私にお酒、肴のご馳走を下されたことです。

「東蝦夷日誌」 松浦武四郎 安政四年五年（1857、58）

＜出展：松浦武四郎著 吉田常吉編 新版蝦夷日誌、上、東蝦夷日誌、時事通信社＞

本編はシヤマニ境のニカンベツから書き始め、幌泉のトウブチ峠を越えてサルトヘ出で、十勝領アエブシユマまでを記録した。この順路は私の数度の旅からまとめて書いたものである。

- 一、本編のトウニ岳<トヨニ岳：現在の觀音岳>に登ったこと、並びにヲタベツより浜通りをエリモ岬へ行き、そこからソウヤ<庶野>浜に着き、サルト番屋へ到着したこと、またビタヌンケよりトムチクシの海岸の記録は、すべて戊午（安政五年1858）の南志岬から書いている。すべてこれらのところは、一字下げて書いている。
- 一、前編に書いた様似山道、ならびに本編に出てくるトブチ峠、また十勝領の3ヶ所の山道を、私は数度越えているが、あえて心に留めないが、戊午（安政五年1858）の夏の日、この海岸をまわり、はじめて近藤重蔵・最上徳内らの苦労がわかり、その功業がたいしたものであることを感じた。願うことは、本編を読んだ者は、これら二人の苦心を賞賛しようではないか。

文久四年(甲子)<1864>の年、晩冬、大江戸下谷我楽堂で書く。

幌 泉

旅の疲れで何となく倦怠感を感じているが、この道のりは毎日よい風景にめぐまれ、一行から遅れがちで、日の暮れるのを忘れて、旅宿に着くことが度々あったので、同行の侍にある時注意された。私は弁解しないで次のように答えた。「昔、李伯はよく馬の絵を画いた。法雲秀禪師はこのことを戒めて言うには、あなたは画家である、人物画を画くのを仕事としているのに、馬ばかり画いているのは恥ずかしくないか、君は一生懸命駿馬神を画こうとしているが、いつか必ず君の心神がすさみ、馬に食べられてしまうのではないか。李伯は驚きその非を悔い、ひるがえって反省し、これを改め、それ以後は、觀音菩薩の像を多く画いたと云う（仏祖統記）。私も蝦夷の好風景を書き、心神<精神>をこの山と水の間に入れ込み、来世はこの地に産まれ山水総都督になりたいものである」と答えた。その後、私が図を書き、

畫裡風光夕照間丹壁其峰
寒灣ノ月夜の天工變化
雪烟今り山蒲を泉源之急鳴巖



＜東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館＞

一行に後れることがあってもとがめられなくなったのも不思議である。

さて、＜幌泉・様似の＞境目であるニカンベツ川（急流、冬分には橋をかける）に着く、北岸は崖で、南岸は平地である。地名の由来は果物のある川という意味である。果物はヤマブドウ、サルナシ等である。またの名をニーヤンベツといい、河口まで樹木が生い茂っているためといわれている（地名解）。昔、この場所のアイヌは、皆この川筋に住んでいたそうであると、乙名リクナシ、乙名イブサンが語る。

川筋を少しである1090m上ると急流である。両岸の山がせまり大石がごろごろしている。二股である、これより左はルベシベ（小川）、ここからポロマベツ＜幌満川＞に昔、越える道があったという。右を少し上りシユマウシ（小川）、また少し上流のヘタスヌイ（左川）、シイニカンベツ（右川）、共に源はサルゝ山と背を合わせている。源流域にはトドマツ、カバが多く、魚類はマス、サケ、アメマスが多い。川筋に家の跡が多く、また陶器のかけら、雷斧＜アイヌの斧＞、雷槌＜アイヌの槌＞等が多く出るという。上流は非常に良くないところであると、脇乙名がいう。この境目のことは、ヘチヤントカとイナンオロ等が言うには、昔の乙名の話であると。

海岸を少し行くと（岬）ヘトセ（1150m）。地名の意味は堤のようであるという。チカフユ（小川）、ここには丘の道がある。昔、悪い事をした者の指を木にくくり付けて置いたところ、そのまま折れてしまった所と云うことである。この辺、十勝アイヌの出稼ぎの者ばかりである。過ぎてシャクコタン（魚場）、夏場の漁場という意味である。（1180m）アユシ（小川）、海岸は磯である。海栗（アシンテ・がぜ）＜ウニ＞が多いため名づけられた。過ぎて山の下を（654m）、ホロムイ（小沢）大きな湾という意味。（1500m）フユマフ（小沢）、この沢に流泉花くりュウキンカ・やちぶきがあるので名づけられた。その沢にまた、ウシカマナイという沢があり、畠地に適したところの話してある。ここから岩磯が続き、陸地は平坦である。昆布小屋が多く、昔と違って和人の出稼ぎも多く見受けられる。

むつ出羽の 越の人らも この国の ひらくる祈りと ひろめをぞかる

＜陸奥・出羽・北陸の人たちも 蝦夷地の 開けてくる時期だと コンブを獲る＞

アベヤキ（小川、アイヌの家）名の意味は、アベは火、ヤキはセミである。大昔、大きな火の様に光る炎（エンエン）の蝉が出たのでこの名がついた。ここから丘の（630m）ヌツチナイ（小川）、コンガニ（小川）昔、黄金を掘り出したためか、沢の奥に金坑の跡がある。（960m）サツコチ（小沢）、マタルサン（平地）、各々道の意

味か。アツテシラゝ（岩磯）を過ぎて、エンルン（大岬）本命ポロエンルンという。大きな岬の意味である。ここへ来ると両方が見える所、尖っているという意味である。ホロイヅミはこの訛ったものであるという。海岸はすべて岩磯である。過ぎてアツテシラ、（岩磯）を下ること（1450m）エクシユワンベツ（小川、土橋）、両岸にアイヌ小屋がある。（160m）

この川は会所の下の川である。別名南部家という。文化年間（1804～1818年）に南部家藩の陣屋があり、その時に名づけられた。右にフンベヲマナイ、左、ウトクベツなどがあり、その水源はホンノボリの奥からくるという。

幌泉（会所、通行屋2棟、鍛冶蔵、細工小屋、馬屋、備蔵、各1棟、板蔵10棟、雇アイヌ小屋、釜納屋）、鎮守住吉大明神（1棟）稻荷神社・弁天と合殿。小庭の中の泉が築山にそって流れ、社前より様似・浦河方面の眺めは大変よい。

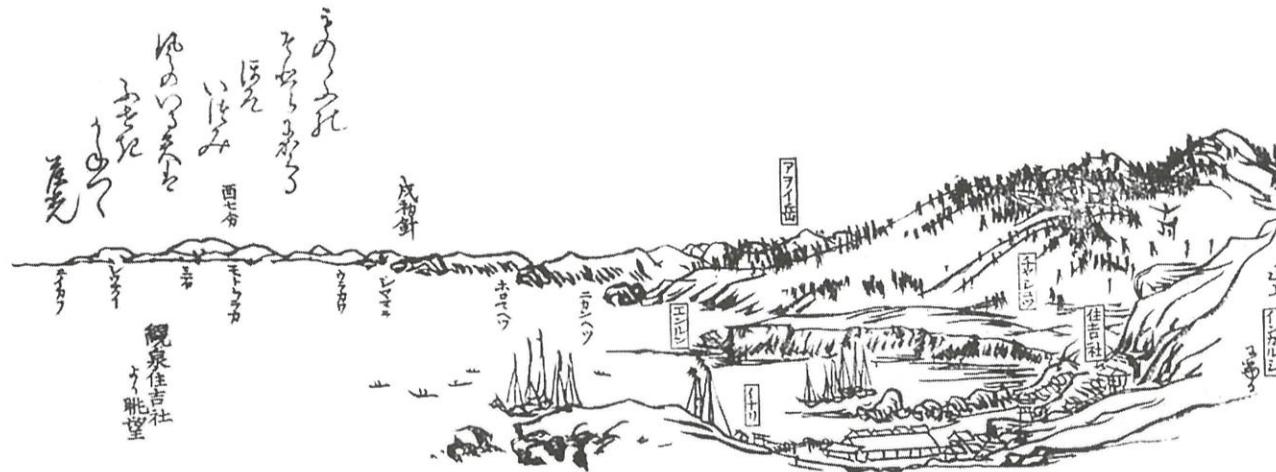
遠かたは しぐれながらに 蝦夷が住 篠屋の軒に 夕日かがやく

＜遠くは時雨れているが、アイヌが住む チセの軒に 夕陽が輝いている＞

幌泉の名は前に述べたとおりで、ポロエンルンで、岬の名を当所の名前とした。ここは元松前家の家老、蛎崎蔵人の給地である。この地の後ろにホン岳＜ホンノボリ＞という山がある。湾は南西（申7分）の方向で海を望み、船泊りは岩磯が多く、700～800石の船が5～6隻、1000石位の船が1～2艘碇泊している。そのほかはすべて沖の方に碇泊している。入船は南西（未申刻）、出船は北東（寅卯刻）が良い。アイヌは（文政5年1812年39軒173人、安政甲寅元年1854年28軒115人）となっており、近年減っている。この会所は産物が多いが、そのやりかたはアイヌにとって過酷だからである。所々に部落がある。産物はタラ、サケ、マス、フノリ、サメの殻、昆布、シイタケ、サバ等が多い。その他は、雑漁、ナマコが多く、繁盛している土地である。昔からこの地を境として、奥蝦夷、口蝦夷＜表蝦夷＞とし、人足の賃料は1里（約3.927m）22文である。これらの事は、昔の様子を知るために記したものである。

今日幾日 雪ふみわけて 越ものを ここは小春の こゝちこそすれ

＜今日も幾日も 雪を踏み分けて 越えてきたが
ここは小春の 心地がする＞



＜東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館＞

何神の わざにやあらん この国に 植ずまかずの 桑のはやしは

くどの神の仕業であろうか この蝦夷地に

植えもせず種をまかなくとも クワの林があるのは>

さて、ここより上は崖、下は砂浜である。湾をまわり（550m）シラルヲマナイ（小沢）、岩のある沢の意味、まわって、ホンムイ（小湾）字のように湾である。ニケブウシ（小沢）過ぎて（890m）、シユンケウシナイ（山合）嘘の沢とう意味、ここは遠くから見れば沢であるが、近くで見ると山間であるので名づけられた。浜を過ぎホンモヨロ（小湾）、ユルフル（小川）坂のことである。

ここは新道入口で、ここから山に入る。この山道は近藤重蔵・最上徳内が寛政年間（1789～1818年）に十勝まで切り開いた。（エリモサキの方は、ここから右に行く）これに従い山道に入る。原野である。すべてカシワ（槲柏）で、下草はススキ（芒）ハギ（萩）が生えている。（1300m）ケレフシ（小川、この川は歌別に流れる。）過ぎて（1530m）モセウシナイ（小沢）イラクサ（蕁麻）が多い所という意味、（小休所、生い繁るの意である。人家が4～5軒ある）この辺でクワを多く見る。このことを当所詰、鈴木三左衛門という雇足軽に話したところ、翌年養蚕を始めた大変良く出来た。いつも養蚕は漁獵等の臭氣がある所では出来ないといわれているけれども、この地で良く出来たことを考えれば、その土地の特異な風土によるものと考える。この養蚕は蝦夷地での養蚕の起源となるものである。

しかしながら、鈴木氏が養蚕をすることに対して請負人より色々と悪く言われたりし、漁獵のさしさわりになるなど妨害されたことは悪の極みである。この様に自生のクワの木が沢山あるのは、養蚕せよと天の神から授けを給わったものと思うばかりである。

この辺は畠地として大変よいところであるが、開墾したところはなく、東蝦夷地のアイヌはシヤマニまではみんな畠作を好んでしているのに、この地では少しも耕し始めるのはどうしてだろうか。産業振興の志（志士心）ある者がいない。人家も去年まではなく、乙名イタクチヤロが最近ここに住んで、来年は必ず畠を作るといっていたので、安政5年（戊午：1858年）に、ここを通ったときはアワ（粟）、ヒエ（稗）などの畠を作っていた。そこにイナゴ（蝗）が飛んでいたので一句を記する。

粟畠に いな子なるゝは この国も 稲も生たつ しるし成らん

＜アワ畠に イナゴがいるのは この蝦夷地にも 稲が育つ しるしである。＞

さて、乙名の話しによれば、子にすすめられて畠をつくったが、シカが多くて困ると、このことを大変怨めしく私に話してくれたが、私もこれには当惑してしまった。安政5年（午年：1858年）の7月に通ったころ、シカが沢山いたので

夏来れば 妻ももとめず 桟（さお）鹿（小牡鹿）の
なかぬもいとど 淋しかりけり

<夏が来れば 妻ももとめず 子のオスシカが
鳴かないのもますます 淋しいものだ>



<東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館>

と口すさみ、小休所の柱に書きすごす。ここから、東海岸のトワベツへの道があり、標柱が立つ。(2180m) ヲタベツ（川幅9m）岸にイワツツジ（岩躄躅）が多く生えている。名の意味は砂の川である。源流は近い。ここから赤土の坂となり、樹林になる、道は険しい。木立をすぎれば、左にアブチ岳、右の方、エリモの方まで平野を一面に見渡し、実に天下の絶景である。

ながめやる あなたに國も 有ときく
こや毛もの喰 人ぞ住らむ

<眺めている かなたに 国もあると聞く ここに獸を食べる人が住んでいる。>

アブチ（昼夜所3.6m、10.8m）飲み水は遠方から持ってくると。山を背に建っている。名の意味は、アツウシの訛りである。これはニレ（榆）が多いためである。雪の深い冬期間は、この山中を1日で越すことが出来ないので、その時の宿泊（止宿）のためにとして近藤重蔵・最上徳内が建て置いたという。同じく山の中腹を少々行き、谷を一つ越える。（この谷こはシトマベツへ流れ落ちる）弘化（1844～1848年）のはじめに通ったときは、この辺りに桟橋があったが、この度はそのような物は無い。この辺は岩が高く、とても難所である。眺望はなんとまあよい。シトマヘツ（川幅4.5m急流である）名の意味は、シトマレヘツで恐ろしいということ。ここは冬の間、風雨が強いところから名づけられた。ここから谷川を、また過ぎ、折れ曲がりを5ヶ所を過ぎ、エゾマツ（蝦夷松）、ゴヨウマツ（五葉松）などがある山腹を、しばらく行き（3.9km）

きのふまで 雲か山かと 思ひしは
こゝの峠のあたりなるらし

<昨日まで 雲か山かと 思っていたのは ここの峠の付近のようだ>

トヨニ峠、（左にトヨニ岳、右にトフチ岳）ここから東北の方を眺めると、山の向こうに、トウブイ（当縁）、ヲホツ内、久摺（クスリ）の方、阿寒の両岳、その他小さな山は、はっきりわからないが遠望できる。後ろを眺めると、アブツからヲタベツの原野が一望できる。眺望は、たとえようがなく、左のトヨイ岳は、天を刺して直立している。

私はこの山を登ることを、弘化（1844～1848年）に、ここを通った時、計画した



〈東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館〉

が、支配人なる者の話しでは、文化（1804～1817年）の頃、ある役人がこの岳に登られて、5～6分で、晴天がたちまち暗くなり、この沼から雲が立ち上がり、大きな雷が大地を碎くように、雨が車軸を流すように降り、その頂に行くことが出来ないまま下山された。その後、天保（1830～1844年）の頃のこと、松前藩の家臣が、この岳に登ろうとして、アイヌが断るのを強いて案内をさせて登ったのであるが、2～3合目にして、また空が乱れ曇り、盆を傾けたような大雨となり、自ら恐ろしくおののき、上がることが出来なかつた。その御方は3日後にお亡くなりになられたと聞く。

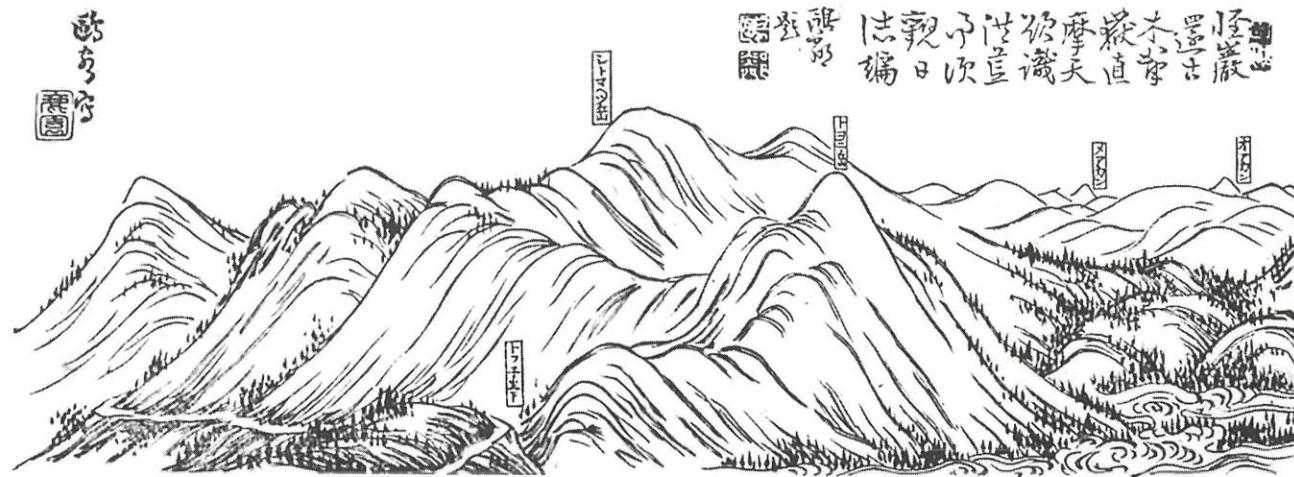
このようなことでアイヌも大変恐れていると言われるままに、空しく思っていたが、2年前の辰年（安政8年、1856年）に、また、登山を計画し、一昨寅年（安政元年、1854年）に、堀使君（利熙）の家来が、登山の命令をされたので、止むを得ず案内者を出させたが、これまた本当に、大雷、大雨で登ることが出来なかつた。よつて、アイヌは、その山の靈がいるのが明白であると恐れて、案内を命じても逃げ去つて、来る者がいなと答えるので、また、空しく時を過ごしたのは、滑稽である。

今年、安政5年（戊午、1858年）の7月下旬、サルトで、山村惣三郎という人と同宿し、この山の話をしたところ、惣三郎殿は安政3年（辰年、1856年）に、この山に登ろうと案内を幌泉で頼んだところ、前に私が断られたように同

じ理由で断られ、今度も十勝でそのように断られたことを話してくれ、高い山ではこのようなことがあるかもしれない、お互いに話しながら就寝した。翌朝、早く起き出し、イソラムク（サツナイ〔幸震〕のアイヌ）、エクレ（ビバイロのアイヌ）の兩人を呼んで、『私は昨晚不思議な夢を見た。80余歳とも見える大老人（ホロチャチャ）が、白いアツシを着て弓矢を持ち、黄金の太刀を腰に差し、私の枕元に来て、「余はトヨイ岳の神である。その方に一つの頼み事がある。それはほかでもない。昔は、トカチ・幌泉のアイヌらは日々イナウ（木幣）を作り手を合わせ、時々お酒を持って、我が山に持つて上がって来て捧げてくれたが、次第に和人の習慣になって、近頃は一切捧げてくれるアイヌ人はいない。その方は蝦夷の国、どこの高山へも酒をあげ、イナウを持って上がり捧げたので、明日は必ずお酒とイナウを持って我に手向けてくれよ。そうすれば、来年はトカチ・幌泉は大漁になり、川上まで昔のようにサケが上る様にする、また悪病も決して流行しないように守る。』と、ほんとうに雲に乗つてトヨイ岳の方へ飛んで行かれた。山の上には金色の光が輝やいていると。』

それで、私は今日酒1升を持って行こうと、亭主に1升の酒を用意してもらい、同宿の村山氏に時間を都合してもらえるようたのみもせず、急いで出発し、9時（五ツ半）頃峠に着いた。馬をつなぎおいて、トヨニ岳の方へ登ること（50～60歩で）、山はいよいよ険しく、近年1人のアイヌ人も上らないため道はなく、30～60cmにもなるイワスゲ（岩萱）が生え、その中を分け行くと、イワスゲが生え、おおいかぶさつていてるためにわからず、下には大岩が重なつてるので、その間に足を入れ、また岩の上に乗ると、すべり岩の角に腰を打つなどして、その危ないことはとても大変であった。

ここを上ること1時間位（半時）で、ソウヤ〈庶野〉・幌泉を眼下に見下ろすようになる。また、1時間位で、山の8合目と思う頃、カムイトウ〈豊似湖〉は、私の足下にある。一步誤れば湖中に転げ落ちてしまうと思われる。昼頃、山頂に上ると、割れた岩が折り重なつて一つの山になり、その間からイワツツジ、ゴヨウマツの老木が岩をはい、カバの木も数10株が、曲がりくねり、風になびいて地をはようであり、その上にイワスゲが生い茂つてゐる。岩の間から白蟻が一面にはい出し、足の踏み場もない。考えは違わず1本のイナウもなく、両方のアイヌも近年はまったく上がってない。考えると太古にアイヌたちはここに時々上がり、この石を積み上げ作つたので、この山の形が、少し高くなつたように思える。ここから北北東（子丑）の方に、ヒロウ・ベルブネ〈歴舟〉・十勝の川筋が一面に見え、北西（戌亥）の方は、かなしいかな、シトマベツ岳にさえぎられて、それより遠くを眺めることは出来ない、西はエトモの方まで、



南は、その果ても知らない大海原であれば、とりあえず口づさみ
ならびたつ いもせのあかん 中ならん むねの煙の ひまもあらぬは
<並び立つ 夫婦の阿寒岳 中ほどの 高い煙は 休むこともない>

すべて、アフチ岳、トフチ岳を眼下にして、まるで波濤のように見える。この山頂にイナウを捧げ、日本・蝦夷すべての国中の大小の天神地祇（神祇）、特に登与仁<豊似>大権現に、国家安全、風雨順時、五穀成就、大漁満足、道中安全、転んでも怪我をしないようにと神々に高らかに祈願し、下ろうとするとき、支配人の言うように、もしも大雷大雨に遭ったらと用意の桐油を滲ませた布を尻に敷き、すべるや否や富士の素走り<砂走り>と異なることなく、瞬時に6合目近くまでおりた。

ここで峠の方を眺めると、ほんのわずかであるが、ここにアリが通るように何かが目に留まり、次第に近づくのを見ると、人馬であり、これぞ山村氏であると語り合い、その人達の方を仰ぎ見て、私が下山するのを待っていてくれた。道すがら、今朝の夢物語からトヨイ岳の様子を語り、まったく今日、私は山に上ったので、気持よく無事参詣をして山を下りた。

<東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館>
かねてより 聞きしにまして 此山の
神のいさをは たうとくぞある
<かねてより聞いていたのに増して
この山の神のてがらは 尊いものである>

峠から。右手の山の中腹の狭い道を行き（左）カムイトウ（周囲3.9km位）という、その深さを知るものはいない。（昔から水際まで360m。）水色は藍く、山の懷にあるので、周囲が高いけれど、その水の増減はなく、また、流れる出口もない。これは久摺<鉋路>領の摩周湖と同じである。また水面には1枚の落葉も浮かんでいない。実に不思議な湖である。よって神湖と名づけた。昔は、この峠を通行する者、湖の見える間は談話をも禁じたと語っている。（2.7km）すべて近年まではマツ、トドマツなどがはえていたそうであるが、今は大半が枯れて無くなっている。

これから山合いをしばらく下り、（1400m）ここは岩が高く、雨天の時は水が流れ、滝川を上るようだ（下り）カルシコタン（小休所）名の意味はシイタケの所というそうだ。昔、南部の人が来てシイタケを作った所という。この辺、紅葉の盛んな頃通ったことがあるが、枝が多く折られていたので、

行ゆけど まだ道遠し 冬木こる 音かと思ひしは きつゝきの空



〈東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館〉

〈行っても行っても まだ道は遠い
冬の薪を切る音かと思えば キツツキの空〉

サルベツ（川幅27m）転太石（ごろたいし）の川ですべて危ない。昔は小舟が置いてあり、通行人は自ら舟を操って渡ったが、次第に馬での通行が多くなり、後に舟も廃たれて無くなっている。名の意味はサルンで、昔、この山中にツルが多く生息していたので名づけられた。サルンはツルのことである。川筋には大木

が多く、特にここにはカエデ（楓）、エノキ（榎）、ツタ（葛）など秋に紅葉した時は、浅瀬を照らし、行き来する人の顔にも、映えて見事である。（平らな山2600m）サッテクサル（川原）ここはサルの乾いた川の意である。（109m）ノホリサル（川幅14m）橋がある。両川ともサル川へ流れている。ある時、秋のなかば頃に、早くも樹々が十分に紅葉し、早や落葉する木々もある。すべてこの紅葉は一度に染まることなく、染まるとすぐに散りはじめ、その眺めの間は、わずかの期間である。それで奥に住む乙名の2人の翁は、「紅葉しないで散らない葉が木にある限り」と、風土の実状を嘆かれたのも、そのことが分かっているということだ。〈和人は働いたアイヌに、紅葉せず一冬枯れた葉がついているカシワの木の葉が落ちたら、賃金などを支払う等と約束し、賃金を支払わなかつたことがあったという。〉私もそばの木に、一句を書き記し置いた。

ながめやる はての限りは 山守りよ 神いますとて 斧をゆるすな

〈眺めている遠いかなたの限り 山を守れ
神がいますよと 木を切ることを許すな〉

川の両側は砂地で（番屋の向い）、サリベツ（左川）、ヌフリサル（右川）、ナンフケ（左川）ここはシイタケ取りが住んでいる所、ワウシ（渡し場）、カルシコタン（右川）、タンネナイ（右川）この水源は小川が数流あり、サケ、マス、アメマス（鰐）、ウグイ（桃花魚）、カジカ（杜父魚）などが多く、水は浅く冷たく、両岸には奇石怪岩が多い。また滝もあって、分け入ると、大変良い景勝地である。

越えて左の山のそばに架け橋などがあり、下り樹木が多い（1200m）サルの番屋元に到着。

○ここから幌泉・ユルフルから浜道、エリモまわりを記す。

1858年8月20日（旧暦：七月十二日）脇乙名イフイサン・馬士キンチヨを雇い連れて、ユルフル（分道）から右の浜道に入る。長い年月で変わってしまい、昆布小屋が軒をならばせ、小屋の上までコンブを乾かしている風景は、あたかも昆布を使ってアイヌは家の屋根に葺くくふく〉というのは、これらを見ていっていると考えられる。（327m）

ヲタベツ（川幅は10m位）、この川の上流を山道にて越る。（218m）同じ崖の下を行ってヲタベツ、この川筋はチカフサンナイ（右川）、ケリコムシベツ（左川）、過ぎて二股になり、右をヲタベツ、左をシロツミという、その源流はホ



ンノボリから来る。サケ（鮭）・ウグイ（アカハラ・桃花魚）が多い。

クッフルエ（大崖壁が立ち）平らな磯が有て釣場、昆布・ナマコ（海鼠）場でよい。上は平らな山草地である。および、ウトルクシナイ（小川）にあるため名づけられた。(497m) エネコロ（涯下の湾）この下は千畳敷という。磯である、その磯は小魚・ナマコ（海参）等が住んでいてとておもしろく、また淡菜（イカヒ）・ウニ（海胆）・小貝がうずたかくつく・昆布・海蘿（のり）・裙帶菜（わかめ）<スジメのことか>・鶏冠菜（とさかのり）・その他種々はえている。(426m、岬は岩、番屋が1棟ある) ここは危ない崖にも小屋を建てて住んでいる。この地の漁業を見て盛んなことを知った。その名の意味はホロエンルンと対する意味で、鼻という。戯れに

えみしらも 海の花貝 さくらかい
ひろふや道の すさびなるらん

＜アイヌたちも 海の花貝 さくら貝 拾うことに 熱中している＞

この丘を越て (500m) ホリトマナイ(岩の岸)、これから浜の形は北東（未申）向きになる。岩の磯、(254m) ウケマシナイ、(490m)、シユマウス（大岩）大きな岩

があるため名づけられた。(254m) ヲヘシコマナイ（小石の原）、隣に (218m) チヤラセナイ、およびホロチヤラセナイ（共に滝の川）、ここから海岸は馬では通るのが難しいので、馬は陸をまわし、私は乙名を連て岩の上を飛越え跳ね越えて行き、（およびサカキシ、およびホロチヤカキシ）昔から松前藩に挨拶に行くアイヌはここに上がり、風待ちや天候をみて行く所から名前がある。チヤカキシは松前藩に挨拶に行く時の船の飾り物である。ここから、ますます大岩の岸になり (1700m)、ヲニタラフ（小沢）本名はヲシラフシといって、アイヌが藁に使う草があるためである。(270m) エイシユマ（岩の岬）とがった岩が多く集まり岬になっている。ここからは歩いて行くのが難しいので、崖の上から眺望して行く。ヒンネワタラ（岩の岬）、マチネワタラ（同）、ヒンネは雄、マチネは雌である。雌雄の岬という意味。天辺怪巖奇石、仏菩薩が立っているようだ。阿羅漢の座のように、もしこの地に伝教・海空・慈覚の大徳等が伝わっていれば、それらの名前がついていたであろう。

そばだちし 巖ほ鬼とも 仏とも こゝろからにも 見ゆる姿か

＜そそり立ち 巖は鬼とも仏とも 心から見える姿か＞

(800m) リフンエントモ（岩の岬）名の意味は、海中に突き出る鼻である、崖は屏

風のように、上より眺めれば、目が眩んで見るのも困難である。この地の役小角（えんのおずぬ：7～8世紀ごろの呪術者）が来て、大のぞき錢懸等の行場となる等と独言して行く（昆布小屋が多い）。洲浜、（890m）チカフノコエキ（岩の岬）ワシを獲るという意味。この岩面にワシの巣があるという。（377m）ヤンケベツ（小さな沢で湾は深い）ここに出る砂地である。（908m）ヲチョロツケ、（345m）シヤモ岬（岩の岬）上を越てホンスル（岩の磯）過ぎて、（400m）シリボク（コンブ小屋が多く、船潤によい）和人はアブラコ潤という。これは内地の珠鱈＜アイナメ＞のことである。この魚が多いことから名づけられる。アイヌ語でここをシリボクという。アブラコは松前・箱館の方言である。小さなササ原、樹木は一本もない、ここからソウヤ（庶野）へ直接行く道がある。また海岸通りは困難なため、磯船を雇つて行き、岩壁を伝い（970m）チヨマトマリ（昆布小屋が多い）チヨトマリという大きな岩の崖がある。名の意味は恐ろしい神がいるという。アイヌたちは漁の始めには必ず神酒・イナウ（木幣）を持って来て、その大漁を祈るという。（1520m）テシケ（岩で平ら）岩崖の後の方という意味。レツハモエ（大岩の壁、高さ52m）小さな湾になっている。種々の水鳥を見る。またエトピリカの一群を見た。このことをアイヌに尋ねると、最近、奥蝦夷から渡って来たと、サンヘワタラ（岩の崖）、およびショツケワタラ（608m）、どれも大きな岩で面白い景観の所が多い。

外国（とつくに）や ちかやあらん

此あたり 見知らぬ鳥の すむにつけても

＜異国は 近くはないな～ この辺り 知らない鳥が すんでいても＞

エリモ岬（この地で第一の南岬）名の意味はネズミである、この岬を遠くから眺めるとき、ネズミが伏したことから名づけられた。本名ヲンネエンルンという。ヲンネは大のさらに大きなものをいう、エンルンは岬である。すなわち極めて大きな岬である。風が厳しいため石垣を作り、その中に小さな社を建てている。下にマチネシユマ（第7の岩）、ヒンチシユマ（第6の岩）海中に突き出ている。東西にはソウヤ・トセツサキ、遠く阿寒の両岳を眺み、西面には夕張・シビチャリの山々を見る。その風景は実にすばらしいといふべきだ。さて、海中にイナウシ（第5の岩）、エンサト（第4の岩）、リイワタラ（第3の岩）、ホロソウ（第1）が並んで突き出でていて、その先にモノクネ（暗礁）、大潮の時はまた一つ岩を出す。この岩の連なりは約3.9kmも海の中に突き出でている。そのため回船はこの岬の11.8km先を航海し、暗礁に波浪が寄せる様子は、一色で非常に不思議に見える。その岩に

昆布がはえて波にゆられるのは、まるで竜が潜っている渕に踊るように神秘的だ。アイヌはこれをエリモ様のおひげとして採らない。ここから陸を行き、岩間に見なれぬ草が多く、特に姫竜胆（ひめりんどう）が岩間を埋めるように咲いていた。

たゞみなす 岩間岩間に 竜膽の さくはつづれの にしきとぞ見ゆ

＜豊が重なるように 岩間岩間に リンドウが咲くのは
しんみりとした彩と見える。＞

5～600歩岩角を足を持ち上げ進み、シヤマンベウタ（浜）名の意味はヒラメ（比目魚）浜である。ここからまた岩の崖、（1547m）フラリモエ（昆布小屋が多い）、ここは砂地である。名の意味は臭い湾である。この地は昆布が多く打ち寄り、腐爛し臭いために名づけられた。（290m）ヲコシ（砂地）昔からヲコシチュツフという変わった魚が流れ寄るために名づけられた。（番屋1棟、蔵があり、人家が多い）。過ぎて（290m）ホロオコシ、（290m）ニヨムイ（小さな湾）木の湾と訳す。シヤクバイ、（1270m）ヲコエマウシ（崖から水滴）砂地で歩きやすい。（508m）シユマウシ（岩の岬）、フウレベツ（小川）およびホロヲリベツ（小川）雨天にならないと水はない。（1126m）トワベツ（小川・幅5.4m）上に沼がある。名の意味はトワンベツ川という。またトワはワラビ（蕨）のことである。ワラビが多いためともいう。さて、その沼をシイトウという。名の意味は、ガマ（蒲）が多いために名づけられた。（1344m）キシケ（砂地）過ぎて、（1435m）ヲトンベ、（708m）アブツ（石川、幅5.4m位）この川は山道の昼所のところから来る。これはまたシヤマンベウタより堅い砂の道である。これを百人浜とすべて名づける。その意味は、昔、一夜の時化で大きな船が多く浜に打ち上り、水夫＜乗組員＞が100人あまりも死んだのを埋めたとも、また、昔から縄張アイヌと十勝アイヌと戦って、その死骸を埋めたとも言う。碑が1本あるとのことで、日の暮れる前まで探したれけれど探し出せず去った。ここに山道の道と出合う。（1308m）チヒランソウヤ（コンブ小屋）、ここから小石の浜が少し、岬を越えて（962m）シネライ（昆布場）岬をまわり、617mルウンソウヤ（小さな湾、岩の磯）、ここからアブチへ山道がある。小石の浜をそのまま行って、シトマベツ（川幅5.4位）この山道で越える下流である。岬をまわりシヤウヤ（岩の磯・番屋や蔵が多い、出稼の家が建ち並び、前の船潤はよい）、雑魚が多く、至って極めて繁華な地である。5～6船が前に停泊し、秋山氏もその検査に出かけられている。夜になってもカ（蚊）は一匹もいなく、快く寝た。

あぶちやま おろす嵐に 塩氣たち 月影くらし 蝦夷の海面
＜アブチ山から 下りてくる嵐に 波が白く立ち
月影は暗い 蝶夷の海面＞

8月21日（旧暦：七月十三日）。秋山氏はここから山道に入る。私は浜の方に向う（山道はこからシトマベツに出て、峠を越てサルトに出る）小石の浜（1071m）、トウセツブ（大岩の岬、穴がある）ここにエリモの兄弟の神が暮らしているとい伝わる。またイトセフは広き幅という意味である。また、この石をフヨシユマという。過ぎてニヨムイ（小さな湾）、この辺より崖はいよいよ絶壁になり、その下は岩原である。（1503m）ホンフシコツ、ホロフシコツ（昆布場である）、岩の間に狭い土地があるために名づけられた。（493m）ホンサクハイ（川があり急流）あわせて（475m）サクハイ（小さな川で急流、昆布場）、ここはソウヤ岳の南東になり、湾になり、ウトマウニと向き合う。また岩間を越え、（974m）チセウシ（大きな岩の原、昆布場）今日は雨が降ってきたので、ここからは通るのが困難なため、ここから舟を命じて出発した。（581m）ウトウマニ（岩の岬）本名ウトマウエンの訛りである。その意味は、潤が悪いである。（944m）ウエンヘシ（そびえたち崩れている岬）名の意味は、悪く崩れている岸である。ニヨムイ（小湾）、ここからいよいよ難所である。字などで何か聞きとめるのも難しい。ウンコツ（崖下）訛ってヲンコノキともいいおもしろい。ウリシウシ（岩の間の平磯）、奇岩怪石の下を伝い、モシヤクハイベツ、およびシャクハイベツ（共に急流）まわって、（454m）トリフタフナイ（平磯）、小石の原があり、上はそびえたつ高い山大きな崖が続き、チエウシ（岩の岬）、ウエンチクシ（蝦夷地第一の奇石）、ここは大岩壁の後を越る。平磯（1816m）サルトエト（大きな岬）この崖より崩れた砂が処々にあり、陸を通る時は大変危ない所という。この岬ヲンネトウフ岬と向かい合って一つの湾をなす。まわって船を岸に寄せる。この辺昆布小屋が一面に建ち並んでいる。小石の原（1162m）、この辺の昆布取りの様子を聞くと、ホロイヅミの領の内にても、シヤマニ境より会所元エリモシヤウヤ浜までを、文政年間（1818～1830）、昆布100石目を金25両の時も、わずか、10両位少ない12～13両、近年80両位になっても、わずか15両で会所元に買い上げられている。よって、こここの昆布は多く算出し、家族三人の時、必ず100石の昆布を取るのによい所であるが、他所より移住する者はいない。もしも、このようなことをやめ、昆布を直接売ることをゆるせば、3～5年のうちに、必ず人も集まってくるのに、出稼の者が取上げた昆布は必ず会所で定められた値段で売る法のため、いつまでも不毛同様になっているのがなげかわしいことだ。特に憐れなのは

アイヌの取る昆布は100石目というが、130石目位に一貫を計算し、取り上げるという。その天秤というのも、石をくくったまったくいいかげんで、四貫五百目抱といつても、すべて五貫目位も取り、その代金は天保頃（1830～1844）で35文である。嘉永ニ酉年（1849）より50文に値上げした位のことである。どうしてここでこの巨大な島のお天道様（天日）を拝むようになるだろうか、などと独言を言い船を着けた。

商人（あきうど）の こゝろあらぬは ことはやり
心してもれ 浦の防人（さきもり）

＜商人に 配慮がないことがはやっている
よくよく考えて対応しろ 浜辺を守る人よ＞

サルトベツ（幅18m位、石の川、急流）上って番屋前（蔵々、通行屋、馬屋、弁天社があり）、ここは前に記録したとおり。雑木が多く、沢の形は東向で前浜、東風の時は風の当りはひどいものだ。よってこの前浜よりヒロウの方は出稼の昆布も少しである。値段よく売上っている。総じて寛政前はこの辺の山道ではなく、順番にまわって来るところ、木の根、岩の角をよじのぼり、越えて来るが、この陥しさから逃げるようになるだろう。本当に近藤・最上のその実行＜山道の開削＞は、筆が及ぶものではない。さて、ここからは小石の浜、上は大きな崖で、東風が厳しい時は、その崖を打ち、通行が難しい。（1100m）オンネトウ（岩の岬）大岩壁が崩れ落ちて、また一つの岬となり、この上を越えて、（981m）ヲヒタルシベ（岩の原）名の意味は、大きな岩山の間から水が流れるという意味。大崖の下をまわって（2160m）、ビタヌンケ（川があり、11m、小休所がある）名の意味は、ビタヌンケは解く、ヌンケは選ぶという故事である（地名解）。またビタヌンケは少しの上り下がりのことをいうという。（リクナシ、イフイサシが言うには）、またこの涯は危ない所をアイヌたちがここを割って開いたために名づけられたと。（惣乙名ハエヘクが言うには）。

此川は二つに分れ、右の方は山道通り、左の方はバンナイ、ベンナイ等がある。その源流はシノマンビタヌンケといって、その上流はサルトと共に山へ並んで入っていっている。魚類・ウグイ（桃花魚）・アメマス（鯨）・チライ等である。

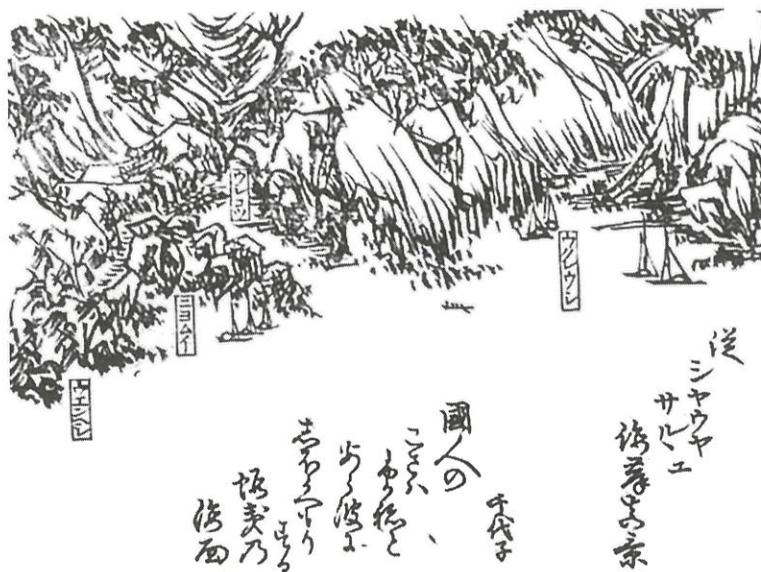
この川をもって場所の境とする。標柱（ホロイヅミ会所へ44.6km、シヤマニ境へ53.1km）

あとがき

今から200年以上も前のこと。この北海道は森におおわれ、豊かな自然とともに暮らす人々がいました。和人が進出し、場所請負制度により貨幣経済が入り、猿留山道や様似山道も作られてきました。歴史の事実は一つしかありませんが、解釈には様々な考え方できます。ここに紹介した絵図や紀行文は、当時の様子を知る貴重な資料ですが、歴史のほんのひとコマでしょう。この冊子の読者には、様々な視点から歴史を考えていきたいと思います。

猿留山道は、北海道で公費によって作られた最初の道ですが、アイヌ民族の視点から考えると、どのようにとらえたらよいのでしょうか。

歴史を実証する遺産・資産として、猿留山道を保存し、活用していくことは、歴史的な面だけでなく、日高南部の豊かな自然環境を活かすことも可能になり、新しい地域づくりへつながります。



〈東蝦夷日誌（六）北海道大学附属図書館〉

寛政十年（1798年）近藤重蔵がルベシベツ山道を開削時に、ルベシベツ山道入口に榜標を建て、往来の人に示した文があります（広尾町史から口語訳にする）。

最後にこの文を紹介し、皆さんとともに、猿留山道を後世に伝えていきたいと思います。

覚え

この道は、浜通りでトモツクシならびにピンナイという難所があり、往来の者が難儀するので、今回、新しく切り開いた。この道、往来の者は、一枝の木、一本の草でも切りとり、見通しを良くして、将来の往来のため心懸けてほしい。

寛政十年十月 近藤重蔵

〈えりも町郷土資料館 ほろいづみ〉

えりも町ふるさと再発見シリーズ3 えりも・猿留山道

発行：猿留山道復元ボランティア実行委員会

（えりも町教育委員会、北海道日高支庁、

えりも町郷土資料館N42°の会）

〒058-0203

北海道幌泉郡えりも町字新浜207番地

TEL&FAX : 01466-2-2410

E-mail : erimomus@cocoa.ocn.ne.jp

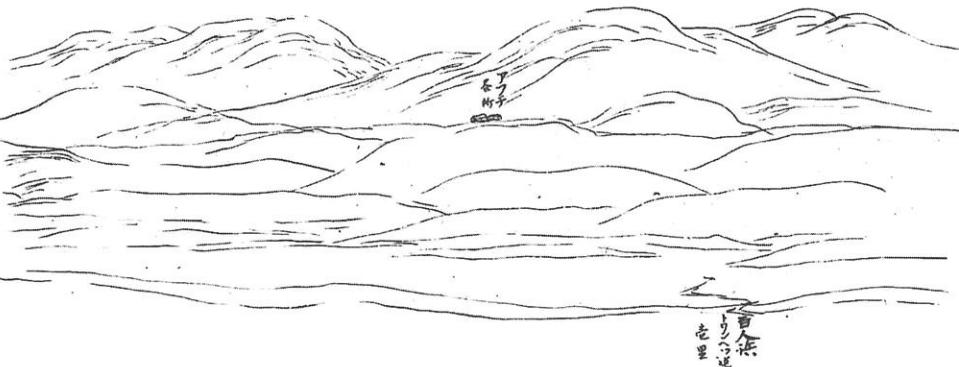
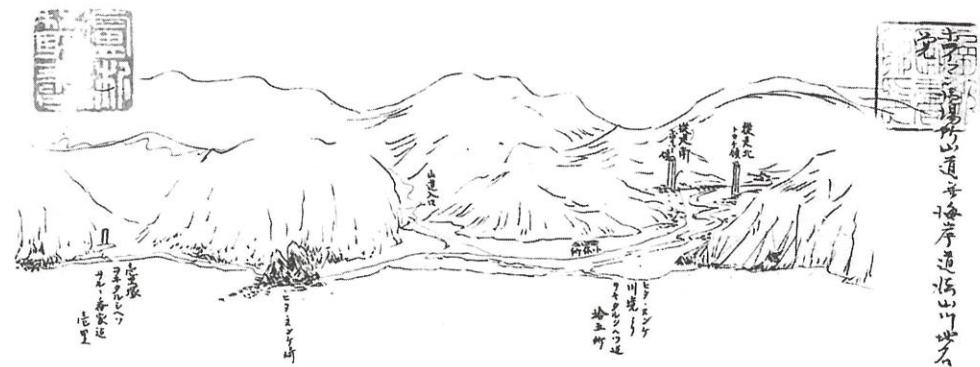
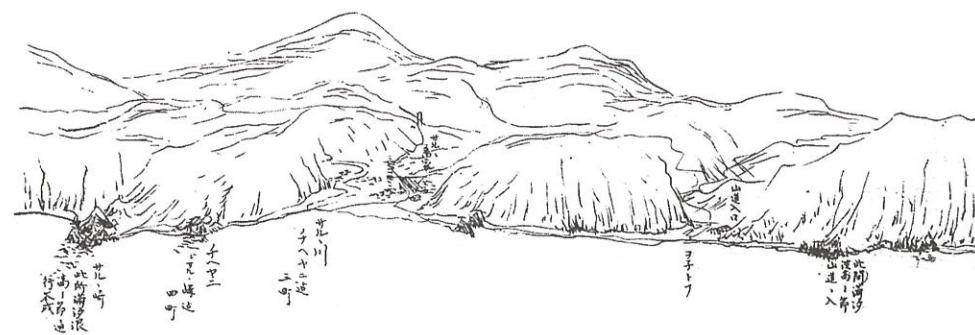
発行年月日：2003年10月11日

編集：えりも町郷土資料館 中岡利泰

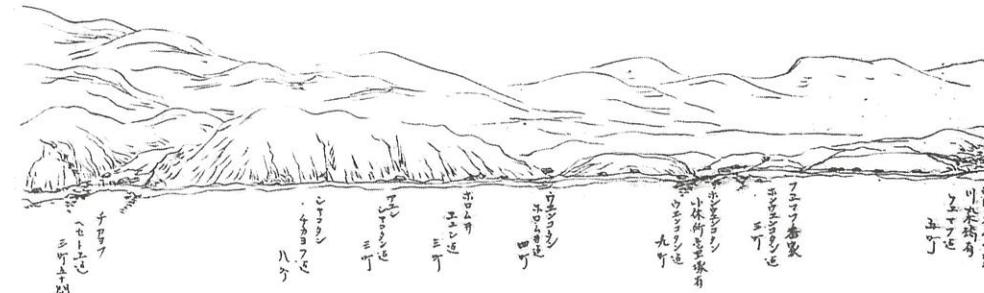
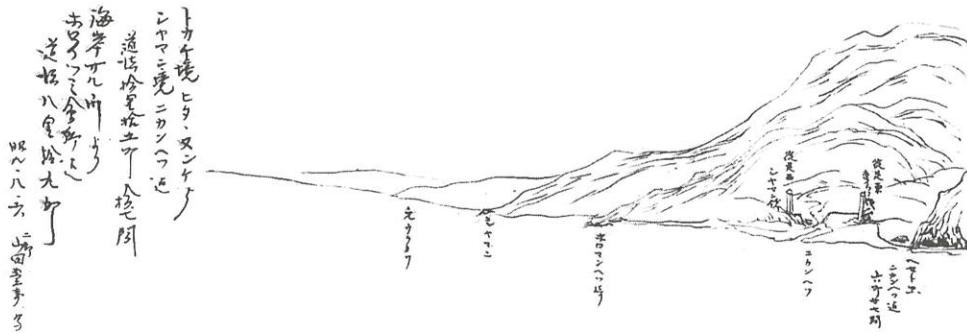
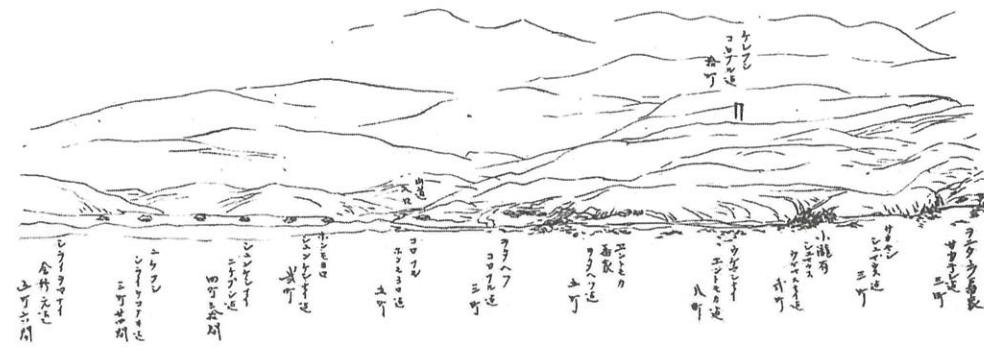
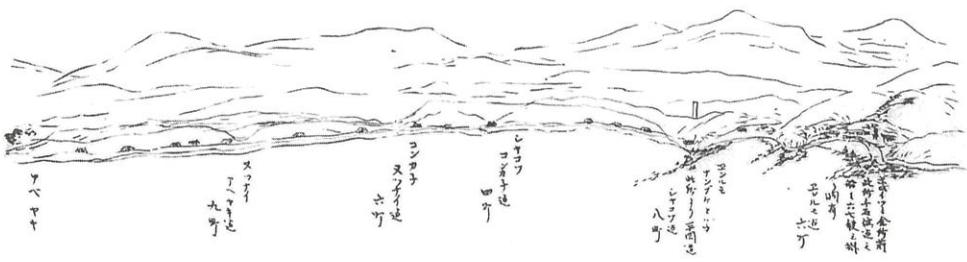
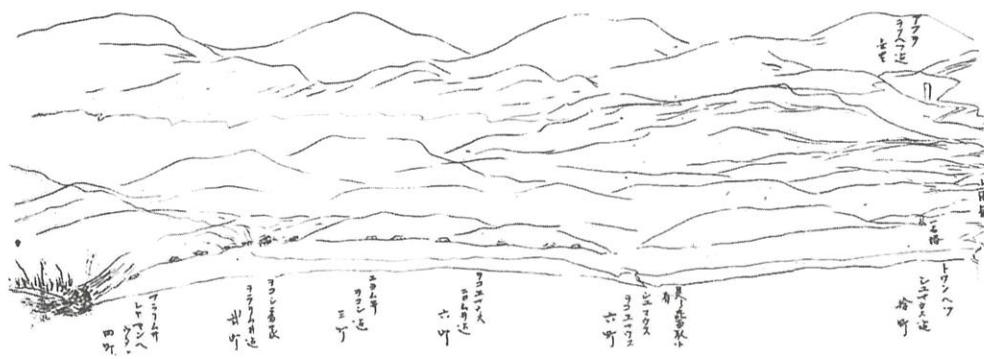
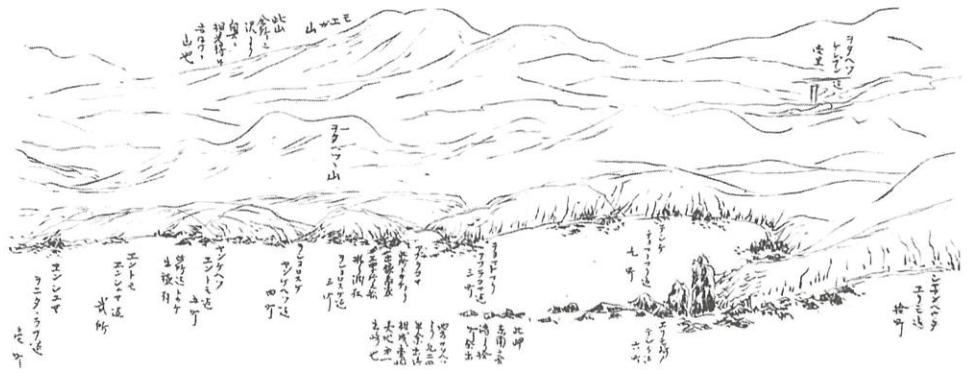
印刷：広尾大同印刷株式会社

この冊子の出版経費の一部は、財団法人太陽北海道地域づくり財団助成事業・えりも町振興奨励補助金の助成を受けています。

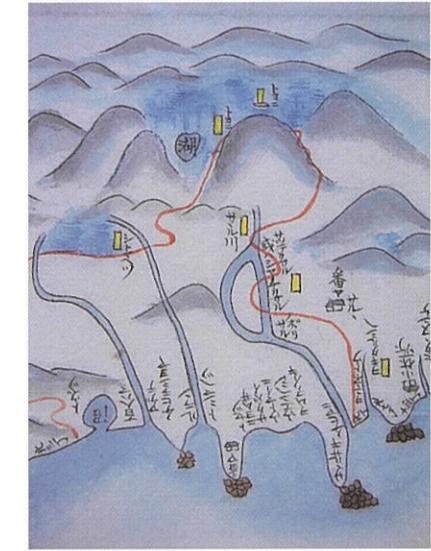
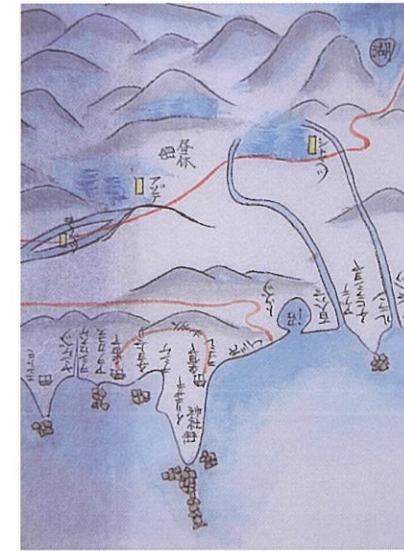
福島家文書 幌泉場所山道山川地名里数並絵図<市立函館図書館蔵>



福島家文書 幌泉場所山道山川地名里数並絵図<市立函館図書館蔵>

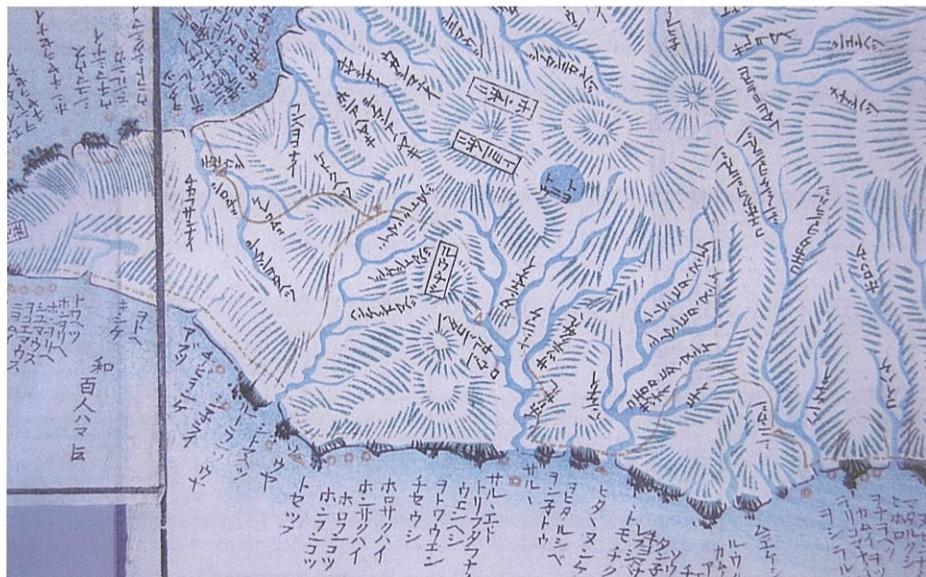


かんゆう
森一馬（春成）・高井佐藤太（英一）・罕有日記（安政四年1857年保呂以子美管内略図・拡大 市立函館図書館蔵）

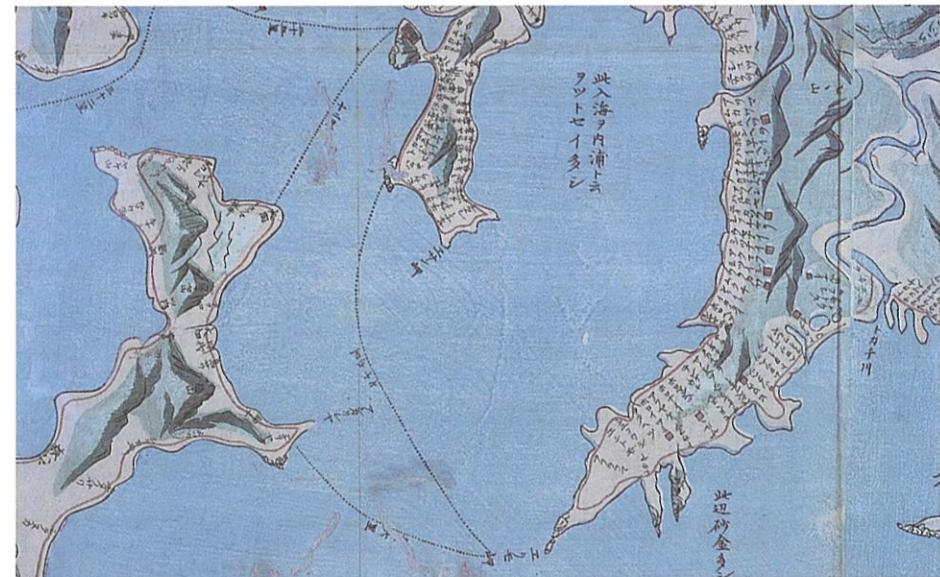


村上島之亟・東蝦夷屏風（文化四年1809年 市立函館図書館蔵）

アツトイ休所（同左拡大）



松浦武四郎・東西蝦夷山川地理取調図(七)・拡大 (寛政六年1859年 市立函館図書館蔵)



喜多野省吾・蝦夷地全図・拡大 (嘉永七年1854年 北海道大学附属図書館北方資料室蔵)



豊島毅・改正蝦夷全図・拡大 (嘉永七年1854年 北海道大学附属図書館北方資料室蔵)